

# 小玉遺跡

小玉地区コミュニティ消防センター新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

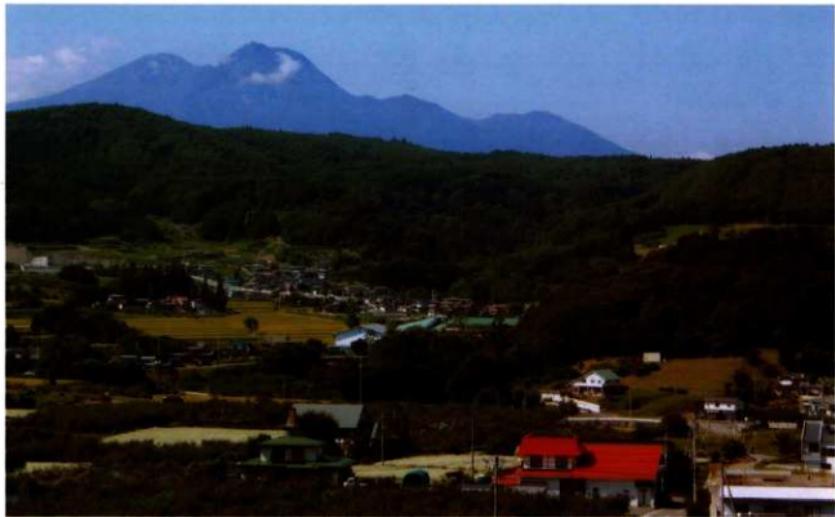
長野県上水内郡飯綱町教育委員会

# 小玉遺跡

小玉地区コミュニティ消防センター新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

長野県上水内郡飯綱町教育委員会



小玉遺跡（中央）遠景 背後に妙高山



石組・集石群全景（北より）

図版2



小型石器・測片



彩色土器・土偶・骨片付着の土器（左下）・ヒスイ原石（右下）

## 序

飯綱町は平成17年10月に牟礼村、三水村が合併して誕生しました。隣村同士で良く知っていたようなつもりでいても、同じ町になってあらためてお互いを意識してみると、日常のなかに、ことば、食生活、風習など、それぞれに違いをみつけて、驚いたり、感心することも多かったように思われます。違いを知ることはお互いを尊重しあう出発点といえます。新しい町づくりに向かうとき、はるか昔の先人たちから受けついだ個性的な地域の文化を知ることは、ますます大きな意味をもつようになるでしょう。

ここに小玉遺跡発掘調査報告書を刊行いたします。この調査は平成12年の旧牟礼村時代に小玉地区コミュニティ消防センター建設事業に伴って事前に実施しました。調査の結果、いまから6千年前の縄文時代前期から中～後期、そして1千年前平安時代の人々が暮らした証しを目の当たりにすることができました。特に縄文中期の住居跡、縄文後期の石組・集石遺構をはじめ、日常生活の道具である土器、石器が大量に出土し、脈々と続いてきた私達の歴史がまさによみがえりました。今まで牟礼地区では縄文時代早～中期の丸山遺跡、後～晚期の明寺寺・茶磨山（旧茶臼山）遺跡の調査で誇り得る成果を収めております。そしてこのたびここに中期の生活史を加えることができました。さらに、飯綱町の縄文時代中期の主要遺跡は三水地区の上赤塩遺跡、東柏原遺跡に広がっています。どの時代も当然人々の往来はあったはずでしょう。そうした交流をへて私達の祖先がつくりあげた文化にはどんな個性や特徴があったのか、出土した資料はそのことを知るのに欠かせない文化財です。これを大切に将来に伝えていくことは、現代に生きる者の責務と考えます。この報告書がその役目を少しでも果たしてくれることを願ってやみません。

調査をご理解、ご配慮をいただいた小玉区、同公民館役員の皆さまをはじめ、発掘現場でご協力いただいた皆さま、報告書作成にご協力いただいた皆さまに感謝申し上げ、またとりわけ調査成果の整理から報告書執筆まで多大なご尽力を賜りました笹澤浩先生に心より深く御礼申し上げます。

平成20年3月31日

飯綱町教育委員会  
教育長 相澤 毅

## 例　　言

1. 本書は小千地区コミュニティ消防センターの新築工事に係わる小玉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で使用した地図は国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図を利用した。使用許可基準の範囲である。
3. 遺構測量・小型石器実測は株式会社写真測量研究所に委託した。
4. 遺構図の整理は横山かよ子が、トレースは富岡麗子が行った。縄文時代遺物実測、トレースなどは笠澤浩が、平安時代については横山が行い、図版作成には鈴木千秋が補助した。磨製石斧・円石などの石器実測、トレースは柳澤まち子が行った。写真は遺構について横山が、遺物は笠澤が行い、現像・焼付けはナカムラフォト（信濃町）に依頼した。
5. 繊草分担は以下のとおりであり、編集は笠澤の指導のもとに横山が行った。  
笠澤 浩 第3章第1節1～(1)、第1節3～(1)、第2節1～13、第3節、第4章  
小山丈夫 第2章  
横山かよ子 第1章、第3章第1節1～(2)・(3)、第1節2・3 ((1)を除く)  
第3章第2節14～16、第4節
6. 本書で使用した主な引用・参考文献は卷末に一括した。
7. 遺跡の記録と出土遺物は飯綱町教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 遺跡記号は遺跡名から「KD」とした。
2. 遺構の記号は奈良国立文化財研究所（1962）、長野県埋蔵文化財センター（1987）に従った。  
竪穴住居跡 SB 土坑 SK 石組・集石 SH 土器集中箇所 SQ ピット（小穴）P
3. 本書に掲載した実測図の縮尺は以下のとおりである。  
遺跡グリッド配置図 1:25000 調査区分割図 1:200 発掘全体図 1:100  
遺構図 1:40、1:50 遺物実測図土器 1:4 石器 2:3、1:3  
土器拓影図 1:3 遺物写真（モノクローム）1:3、1:6  
以上によらないものはそのつど、縮尺を示した。
4. 石器一覧表の石材の略称は原則、長野県埋蔵文化財センター（2000）に従い以下のとおりである。  
黒曜岩 Ob 凝灰質頁岩 TS 蛇紋岩 Se 結晶片岩 Sc 無斑晶質安山岩 An  
緑色凝灰岩 GT ホルンフェルス Ho 珊質頁岩 SS 凝灰岩 Tu 閃綠岩 Di  
頁岩 Sh チャート Ch 熟板岩 Sl 珊質凝灰岩 ST 砂岩 Sa 鉄石英 Ja  
玢岩 Po その他の安山岩 安山 ヒスイ 軟玉 Ne
5. 遺物実測図では須恵器は断面を黒色、織維土器・灰釉陶器・白磁は断面をアミ、黒色土器は内面をアミで表した。また縄文土器の赤色塗料、黒色炭化物もアミで示した。遺構図（第9図）中、平安時代の遺構はアミで示した。
6. 一部の遺物につき、写真図版番号と図版番号を同一で示した。
7. 遺物実測図は土器・土製品と石器に分け、それぞれの通し番号とした。遺物実測表の番号欄はその番号を示す。遺物番号欄には実測時の整理番号を載せた。原則として通し番号を使用し、整理番号は遺構実測図内では（ ）内に、本文中ではR-を付して区別した。
8. 本書作成にあたって、寺内隆夫（中期縄文土器）、綿田弘美（後期縄文土器・文献教示）  
中村由克（石材鑑定）の三氏には特に指導を受けた。

## 目 次

序文

例言

凡例

日次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
1. 調査の目的と調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
第2節 調査の方法	2
1. 遺跡の呼称と記号	2
2. 調査区の設定	2
3. 遺構記号	4
第3節 基本層序	4
1. 基本層序と遺構・遺物との関係	4
第4節 調査経過	5
1. 作業日誌（抄）	5
第2章 遺跡の環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	7
第3章 遺構と遺物	9
第1節 純文時代の遺構と遺物	9
1. 壊穴住居・土器集中箇所	9
(1) 壊穴住居 SB 1    (2) 壊穴住居 SB 2    (3) 土器集中箇所 SQ 1	
2. 石組・集石群	14
(1) 石組・集石群下層の遺物                          (2) 石組 SH 1	
(3) 石組 SH 2    (4) 石組 SH 3    (5) 石組 SH 4	
(6) 石組 SH 5    (7) 石組 SH 6    (8) 集石 SH 7	
(9) 集石 SH 8    (10) 集石 SH 9    (11) 石組 SH 10	
(12) 集石 SH 11	
3. 土坑	18
(1) 土坑 SK 4    (2) 土坑 SK 5    (3) 土坑 SK 6	
(4) 土坑 SK 7    (5) 土坑 SK 8    (6) 土坑 SK 9	
第2節 包含層出土の縄文土器・土偶・土製円板	20
1. 前期中葉の土器	20

2. 前期末葉の土器	20
3. 中期初頭の土器	21
4. 中期前葉の土器	21
5. 中期中葉から後葉Ⅱ期の土器	21
6. 中期後葉Ⅲ・Ⅳ期の土器	22
7. 後期初頭の土器	23
8. 後期前葉の土器	23
9. 後期中葉の土器	27
10. 無文土器	28
11. 越後系の土器	29
12. 北陸系の土器	29
13. 彩色土器・器台・ミニチュア土器	29
14. 繩文土器底部	30
15. 土偶	31
16. 土製円板	31
第3節 包含層出土の石器	32
1. 包含層出土石器と遺構出土石器の様相	32
2. 石器・剥片類の素材別検討	36
第4節 古代・中世の遺構と遺物	38
1. 遺構	38
2. 平安時代の遺物	39
3. 中世の遺物	40
第1章 調査の成果と課題	41
第1節 いわゆる「石神類型」をめぐる2、3の問題	41
1. 東北信地域の後期前半の土器研究と「石神類型」の認識	41
2. 土坑SK4の性格と出土土器の一括性	42
3. 土坑SK4出土土器の様相	43
4. 「石神タイプ」か「石神類型」か	44
第2節 石組・集石群の時期と性格	45
引用・参考文献	46
あとがき	49
表	50
図版	55
写真図版	
抄録	

## 図目次

- 第1図 遺跡グリッド配置図
- 第2図 調査区区割図
- 第3図 小玉遺跡位置図
- 第4図 小玉遺跡周辺縄文時代遺跡分布図
- 第5図 北陸系後期土器
- 第6図 石器の素材別グラフ
- 第7図 石神類型とその周辺の上器
- 第8図 発掘全体図（1）、石組・集石
- 第9図 発掘全体図（2）、住居、土坑・ピット群
- 第10図 1. 堪穴住居SB1 2. 石圍炉
- 第11図 1. 堪穴住居SB2 2. 土器集中箇所  
SQ1・埋甕 3. SB2埋甕
- 第12図 1. 石組SH1 2. 石組SH2、石組SH5  
3. 石組SH3 4. 石組SH6
- 第13図 1. 石組SH4 2. 集石SH7・集石SH8
- 第14図 1. 上坑SK4（下層） 2. 土坑SK4（上層）  
3. 土坑SK5（下層） 4. 土坑SK5（上層）  
石組SH4 5. 土坑SK6（下層） 6. 土坑  
SK6（上層） 7. 土坑SK7 8. 上坑SK9
- 第15図 石組・集石群内の石器出土状態
- 第16図 縄文時代中期後葉の土器（1）
- 第17図 縄文時代中期後葉の土器（2）
- 第18図 縄文時代中期後葉の土器（3）
- 第19図 縄文時代中期後葉の土器（4）
- 第20図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（1）
- 第21図 縄文時代中期後葉の土器（5）
- 第22図 縄文時代中期後葉の土器（6）
- 第23図 縄文時代中期後葉（7）・後期前葉～中葉  
(2) の土器
- 第24図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（3）
- 第25図 縄文時代中期後葉（8）・後期前葉～中葉  
(4) の土器
- 第26図 縄文時代中期後葉（9）・後期前葉～中葉  
(5) の土器
- 第27図 縄文時代前期（1）・中期後葉（10）・後期前葉～中葉（6）の土器
- 第28図 縄文時代中期後葉（11）・後期前葉～中葉  
(7) の土器
- 第29図 縄文時代中期前葉（1）・後葉（12）・後期前葉～中葉（8）の土器
- 第30図 縄文時代前期（2）・中期前葉（2）の土器
- 第31図 縄文時代中期前葉（3）・後葉（13）の土器
- 第32図 縄文時代中期中葉（1）・後葉（14）の土器
- 第33図 縄文時代中期後葉の土器（15）
- 第34図 縄文時代中期後葉の土器（16）
- 第35図 縄文時代中期後葉の土器（17）
- 第36図 縄文時代中期後葉の土器（18）
- 第37図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（9）
- 第38図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（10）
- 第39図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（11）
- 第40図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（12）
- 第41図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（13）
- 第42図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（14）
- 第43図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（15）
- 第44図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（16）
- 第45図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（17）
- 第46図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（18）
- 第47図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（19）
- 第48図 縄文時代の彩色土器・ミニチュア土器・台付  
土器・器台・土偶など
- 第49図 縄文時代の土製円板
- 第50図 縄文土器底部（1）
- 第51図 縄文土器底部（2）
- 第52図 縄文時代・古代・中世の遺物（1）
- 第53図 縄文時代・古代・中世の遺物（2）
- 第54図 縄文時代中・後期の石器（1）
- 第55図 縄文時代中・後期の石器（2）
- 第56図 縄文時代中・後期の石器（3）
- 第57図 縄文時代中・後期の石器（4）
- 第58図 縄文時代中・後期の石器（5）

第59図 縄文時代中・後期の石器（6）  
第60図 縄文時代中・後期の石器（7）

第61図 縄文時代中・後期の石器（8）  
第62図 縄文時代中・後期の石器（9）

## 表目次

- 表1 縄文土器計測表  
表2 古代土器計測表  
表3 素材別の石器数  
表4 石器一覧表

- 表5 素材別の石器および石核・剥片の数  
表6 ピット・土坑一覧表  
表7 土製円板一覧表

## 写真図版目次

- 口絵1 小玉遺跡（中央）遠景 背後に妙高山  
石組・集石群全景（北より）  
口絵2 小型石器・剥片  
彩色土器・土偶・骨片付着の土器（左下）  
ヒスイ原石（右下）  
PL 1 遺跡近景（北東より）、石組・集石群全景  
(北より)  
PL 2 壺穴住居 SB 1、SB 1上層、SB 1石囲炉、  
壺穴住居 SB 2 深鉢（134）・埋甕（130）出  
土状態、SB 2埋甕（130）  
PL 3 石組 SH 1、石組 SH 2、石組 SH 3、石組 SH  
4、石組 SH 5、集石 SH 9、石組 SH 10、集  
石 SH 7・8  
PL 4 発掘区（下層）、土坑 SK 4・5（上層）、SK  
4・5、土坑 SK 7・8・9（上層）、SK 7・  
8・9  
PL 5 縄文時代中期の土器  
PL 6 縄文時代後期の土器  
PL 7 縄文時代後期の土器  
PL 8 石神類型とその周辺の土器（縄文時代後期）、  
注口土器（縄文時代後期）

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

### 1. 調査の目的と調査に至る経緯

平成12年秋に牟礼村小玉区で公民館の改築が行われることになった。建設場所は現公民館の跡地であり、そこは小玉遺跡の範囲内である。平成10年の遺跡詳細分布調査では付近から縄文土器、土師器、須恵器、石器と多くの遺物が表面採集されている。平成11年に村教育委員会では小玉区と遺跡保護協議を行い、平成11年12月8日には試掘調査を実施した。その結果、土器を密度高く包含する地下層に建設工事が及ぶことがわかり、本調査を村教育委員会が実施することとした。

調査は平成12年5月10日から6月22日まで行った。整理は平成13年より19年度まで途中中断しながらではあるが行った。

### 2. 調査体制

#### 発掘調査（平成12年5月10日～6月22日）

調査主体者	牟礼村教育委員会教育長	山田邦彦
事務局	総務教育課長	増田れい子
	係長	七屋龍彦
調査担当者	総務教育係	横山かよ子
	むれ歴史ふれあい館館長	町田清司
同 館	学芸員	小山丈夫
	庶務係	金丸真由美

発掘調査協力者	川口晃平	川口弘子	北沢昇	黒柳利雄	黒柳正子
	黒柳美智子	小山さよ子	小山トシ	近藤好子	宮岡麗子
	広田千代子	廣田三鶴	柳澤まち子		

#### 整理作業（平成13年～19年度）

整理・報告書作成指導者	笹澤 浩（平成18・19）
文化財調査資料整理員	富岡鹿子 柳澤まち子 鈴木千秋（平成19）

#### 整理事務局（平成17年10月1日飯綱町発足（牟礼村・三水村合併）により機関改革）

飯綱町教育委員会教育長	浜沢 清（平成17年10月～平成18年9月）
タ 教育長	相澤 勇（平成18年10月～）
タ 次長	北沢悦登（平成17年10月～平成19年3月）

生涯学習担当参事	近藤克彦（平成17年10月～平成19年3月）
	黒柳博仁（平成19年4月～平成20年3月）
生涯学習担当企画員	森 佳也（平成17年10月～平成19年3月）
	山浦克彦（平成19年4月～）
生涯学習担当主査	渋沢陽一（平成17年10月～平成19年3月）
	近藤久登（平成19年4月～平成20年3月）
生涯学習担当土壟	横山かよ子
いいづな歴史ふれあい館学芸員	小山丈夫

#### 調査協力者（順不同）

広田 勝 広田俊二 広田秀和 川口晃平 黒柳 正 黒柳利雄 黒柳利金 黒柳苦文  
綿田弘実（長野県文化財生涯学習課指導主事）  
谷藤保彦 関根慎二（群馬県埋蔵文化財調査事業団） 寺崎祐助（新潟県埋蔵文化財調査事業団）  
鈴木恆雄（本庄市教育委員会） 矢野恒雄 小柳義男 白沢勝彦 望月静雄  
助川朋宏 倉石和彦 寺内隆夫 中野亮一 青木和明 懿島哲也 山本賢治 中村由克 渡辺哲也

## 第2節 調査の方法

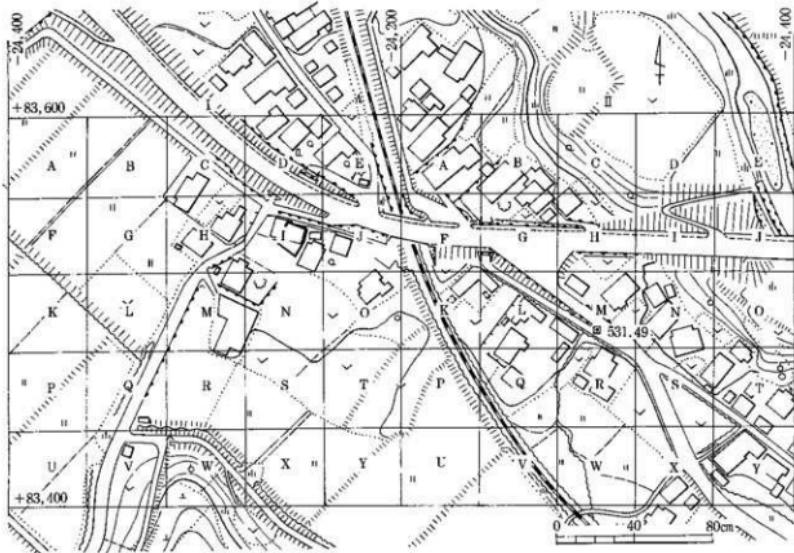
### 1. 遺跡の呼称と記号

本町では過去の調査に加えて、町村合併前の旧牟礼村と旧三水村の呼称の仕方にも差があり、統一がとられていない。例えば前高山古窯跡は7TMK、小野遺跡は2MONと四桁で表示し、上二桁は奈良国立文化財研究所の「遺跡名表示の項目別内分類表」に従った全国統一を目標とした表示方法である（奈文研 1962）が、必ずしも実態に合致せず、その後の調査では旧牟礼村では上二桁を略し、旧三水村では、三水の地区名を示すために下二桁の遺跡略号の前に「S」をつけていた。例えば、芋川氏館跡では「SHY」、上赤塙遺跡は「SKA」である。本遺跡では「KD」を用いた。

なお、今後は奈文研方式の上二桁を略した旧牟礼村従来の方法で統一してゆくこととする。

### 2. 調査区の設定

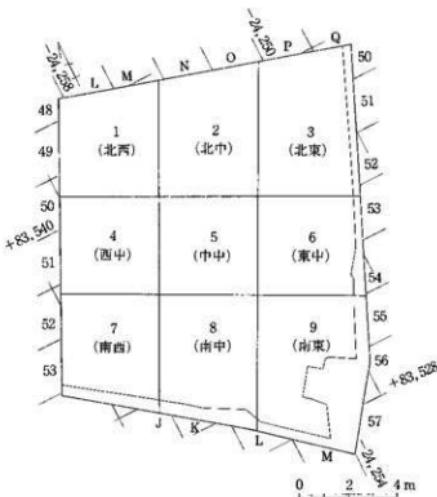
調査予定地は東側を底辺とする台形状であったため、東側及び南辺に沿って、重機による排土作業ののち、北側から調査を開始。この調査と並行して幅1mのそれぞれA・Bの小トレンチを設定して、地層及び遺跡の状況把握を行なった。その結果、遺物及び遺構が調査区全域に及ぶことが予想されたので、トレンチBから幅2mのトレンチを順次設定し北に向かって調査を進めた。しかし、実際には水田床土下から出現した礫群の検出や自然縫の存在によって、調査は全面に渡ることになり、グリッド等の小調査区の設定は行わなかった。しかし、調査の基本は、A・Bトレンチに沿った幅2mの簡易トレンチによって遺物の取り上げと記録をおこない、後にそれらの記述をもとに、調査区設定をおこなう予定であった。しかし、後日の石組・集石群の測量で、方位が調査区主軸と28度東に寄ることが判明したために、方位による調査区設定は断念せざるを得なかつた。従って、本調査に限って、発掘作業の進行過程に従った仮調査区で遺物の出土地区的記録をおこなつた。すなわち、幅約2mの東トレンチを設定し、以下西に向かって中・西のトレンチを、またそれらに直行して、同様に幅2mのトレン



第1図 遺跡グリッド配置図 (1:25000)

チをトレンチB側に南トレンチを、以下北側に向けて中・北トレンチを設定し、各地区グリッドはこれらトレンチの交点で、例えば、北東とか中中地区と呼称することとした。遺物の注記は原則これで行っている。しかしながら本報告の呼称では煩雑であるため、1~9地区とした(第2図)。ただし、調査区が台形のため各地区は2m方眼とならず、3(北東)9(南東)地区は最も面積が大きくなっている。

また、将来にわたって本遺跡が調査対象となった場合を考えて、予想される遺跡全域を座標に合わせた地区設定も同時に行った(第1図)。すなわち、国土座標第8系の(+83,600~-24,400)を基点として、長野県埋蔵文化財センターの地区割に順じ、200区画を大地区としてローマ数字で表し、さらに1辺40mで中地区として25区画に細分し、A~Yとした。大地区はI・II区画であり、中地区は北西から南東へ順次配布した。小地区(グリッド)は2×



第2図 調査区区割図 (1:200)

2m四方とし、大地区の北西地点を基点とし、北から南に算用数字を用いて通しとし、西から東へアルファベットAからTまでの20区画を配した。しかし、小地区は前述のとおり、今後の調査も視野に入れたものであって、本報告では仮地区名を使用している。したがって、本調査地区は大地区がI、中地区がCとなり、本来ならば地区名は小玉遺跡ICに小地区の例えばLA8と表記されるところであるが、仮地区名で報告している。

### 3. 遺構記号

遺構記号は時代に関係なく連番号で付与した。云うまでもなく遺構記号は発掘調査と整理作業を円滑に進めるためのものであり、遺構検出時に的確な判断のもとに付けられるものである。従って、可能な限り一度つけられた遺構記号は番号も含め変更は避けなければならないが、発掘作業の進行過程やその後の検討の中で変更せざるを得ない場合も多い。特に小玉遺跡の場合には水田床土直下から遺構の検出が始まったということに加え、縄文時代中・後期の少なくとも2時期の遺構がほとんど同一面にあることと、後期の石組・集石群や自然堆積の小疊群が調査区南西側にあり、どこまでが人工の構造物かの判断が容易でなかったことも一因で、遺構の検出については困難を極めた。したがって、発掘時の呼称にも検討が必要であろうが、変更是最小限にとどめ、不足な点については必要に応じて本報告の中で補った。また、注記についても発掘時の記録に基づいている場合もあって本報告と異なる部分があり、それぞれ明記した。

なお遺構記号は例言のとおりであるが、標高は海拔とし、H:~とした。

## 第3節 基本層序

### 1. 基本層序と遺構・遺物との関係

遺跡は信濃町方面から狭い谷間を南流した鳥居川と滝沢川との間に挟まれた狭い平地にある。背後には鳥居川沿いに北から伸びてきた丘陵の末端部がある。遺跡周辺は平坦な水田地帯で本来の微地形は窺えないが、発掘調査の所見では基盤層（V層）は円礫を交えた黄色砂質シルト層からなる水成堆積層であり、先述の兩河川に起因するものである。遺跡はこの水成堆積層を地山として、I層（表土、黒黄色を帯びた黒褐色土）、II層（水田耕作土）、III層（水田床上、鉄集積層を含む赤褐色土）とIV層（黒色土）がある。黒色土（IV層の一部）は床土を作る際に削平を受け、厚さは一様ではない。黒色土上層は黄色を帯びた黒褐色土（IV層上層）で古代以降の遺物の包含層であり、遺構の埋土であったため、ピット等の検出は比較的容易であった。IV層下層は黒色土であり、縄文時代中・後期の包含層である。

西南の7区では、西南方向から流れ込んだ砂礫の一群が認められたがこれらは縄文時代中期の堅穴住居SB1の埋土の一部であるとともに、縄文時代後期の石組・集石群を構成する疊群などの上にのる形である。つまり、水田造成時の工事がIV層上層に及んだこともあり、層序に一部混乱が認められたが、基本的にはこの自然疊は後期の石組・集石群が黒色土中に作られたのちに堆積したものである。また、発掘調査では石組・集石群より上部の黒色土をIV層上層とし、下部をIV層下層としたが、その識別は場所によって必ずしも鮮明なものではなかった。尚、堅穴住居、土坑などはいずれも地山（V層）を掘り込んでいた。出土遺物のうち平安時代以降のものはIV層上層に、縄文時代の遺物の大半はIV層下層の出土であるが、特に石組・集石群中からは後期の土器片が多く、石組・集石群下層からは中期後半の土器が主として出土した。この差が本遺跡の年代なり性格を物語るものである。また、中期中葉以前の土器は小片で少なく、調査区全域に点在していた。

以上から基本層序とするIII層とIV層上層の一部は古代以降の、IV層上層から下層の一部は縄文時代後期の、IV

層下層の大半は縄文時代中期以前の包含層とすることができよう。

なお、本報告で出土層位はできても出土地区を明示できない資料がある。特に注目しなければならない資料に多い。これは層位を重視した結果であるが、黒色土層中に構築された石組・集石群の時期決定や性格付けをする上で、やや慎重さに欠けていた。調査時には出土地区を記録していただけに備しまる。

## 第4節 調査経過

### 1. 作業日誌（抄）

平成12年度	6月1日	石組SH1実測
5月10日・11日 重機により表土剥ぎ	6月2日	県教育委員会総務課指導主事来跡指導。 石組SH4平面図作成。
5月12日 調査開始。北側調査区1・2・3区から 順に南側へと調査区全面の遺構検出作業。	6月3日	集石SH7・8平面図実測終了
5月15日 石組SH1・2検出し始める。	6月5日	石組SH6確認。炉周辺、石組SH3平面図 作成。
5月16日 調査区1・2・3区2順目掘り下げ。	6月7日	集石SH7・8断面図作成。土器集中箇所 SQ1の写真撮影。埋め戻しの協議。
5月17日 球群の概略検出される。	6月8日	SK4平面図、断面図作成。土器集中箇所 SQ1実測。炉を石組5としていたがダブ リのため以後「炉」とする。全体図SK 4・P10からP15、敷石、石組SH6記入。
5月19日 平安遺構検出、石組SH2写真撮影。石組 SH4掘下げ。	6月9日	球群の全体写真撮影
5月22日 石組SH2の実測、及び平安遺構SK1~3、 P2~4・6・7断面図作成 調査区6・9区検出	6月11日	現地説明会午後1時半より3時まで実施。 参加者90名。
5月23日 集石SH7検出。	6月12日	石組SH5の下層掘り下げ、実測。
5月24日 調査区8・9区検出。遺構検出状況につい て全体図をつくる。	6月13日	SB2埋甕実測。
5月26日 SK1・2・3掘り下げ。P1から4、6か ら9、SK1~3の平板測量、調査区7・8 区掘り下げ。炉の周辺を精査し、住居跡床 面、柱穴の検出。	6月15日	SB1炉の平面図作成。
5月29日 SH2・5・7実測。集石群測量のための基 準点測量（委託）	6月16日	集石下層遺構基準点測量（委託）。炉の平 面図、断面図作成、および炉内の遺物取り 上げ。
5月30日 トレンチA(SB2)縄文時代中期深鉢（加 曾利E）出土状況写真撮影。石組SH1実 測	6月19日	石組SH16平面図作成。
	6月22日	石組SH16断面図作成 調査終了。砂石を入れて転圧し埋め戻し。

## 第2章 遺跡の環境

### 1. 地理的環境

飯綱町は長野県北部にあり、長野市の北に隣接する。町域の地形には2つの火山が大きく起因しており、西端の飯綱山（飯綱山）（1,917m）から広がるゆるやかな裾野と、北端の斑尾山（1,381m）から続くなだらかな丘陵地帯に大別され、双方の地形の交錯する比較的平坦な地域は約50平方kmの小さな盆地状を呈している。またこの平坦面には矢筒山（566m）・鷲羅山（550m）など、いくつかの独立した円頂丘が点在している。

町域のはば中央を鳥居川が北西から南東に流下し、飯綱・斑尾に源を発したいくつかの支流が合流する。主なものに飯綱山から東流する八蛇川がある。斑尾山から南流する斑尾川は途中で北東へ向かい千曲川に合流する。人工的な河川には江戸時代に整備された用水路があり、鳥居川からの取水である左岸の芋川・倉井・普光寺用水（いわゆる「三水用水」）、同じく右岸を流れる小玉用水などが代表的で、小盆地の水田を潤す灌漑用水となっている。

小玉遺跡は、鳥居川右岸の河岸段丘上に位置している。このあたりは峡谷を抜け出てきた鳥居川が直接激しい侵食を及ぼすところで、河床から遺跡面までは10数メートルの急崖になっている。遺跡の北西は小玉山へ続く傾斜地、西と東は小玉用水による灌漑で水田化された低湿地であり、遺跡が立地する付近は若干高く、畠地と住宅地になっている（第3図）。住宅は江戸時代に開通した北国街道に沿って立ち並んでおり、街村形態をなしている。遺跡の南には独立丘の鷲羅山があり、遺跡との比高差は20mほどで、小玉神社がまつられている。

なお飯綱町域の周辺は、その起伏の少ない地形的特徴から、本州の内陸側と日本海側をむすぶ主要な幹線ルートでありつづけてきた。この交通の要衝ということを顕著に示す地理的特徴が小玉遺跡の立地に表れている。それは古代の東山道支路推定線（黒川大宮神社前から小玉山へ向かったと推定）、幸良宿から小玉山へ通じる近世の北国街道、近現代の鉄道信越本線、国道18号線の全てが小玉遺跡範囲内の1点で交差していることである。その近辺にはまた北国街道江戸ー金沢間の中間地点を示す「武州加州道中塙碑」も建っている。遺跡の立地場所が



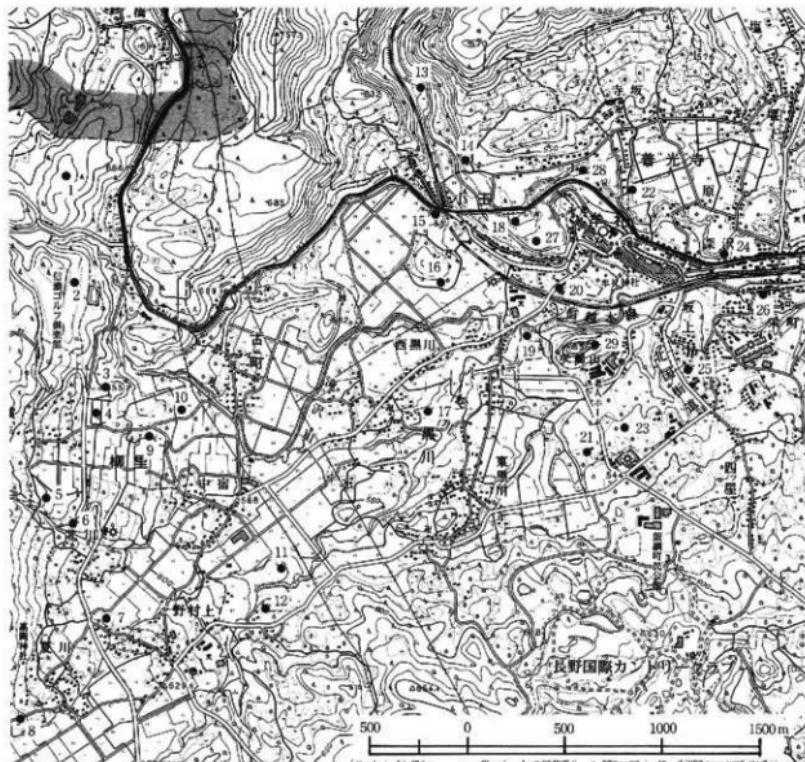
第3図 小玉遺跡位置図 (1 : 25000)

日本列島の結節点であることを端的に物語る証左といえよう。

## 2. 歴史的環境

飯綱町には、詳細分布調査の実施された旧半札村地域に112箇所、未実施の旧三水村地域で33箇所の遺跡が知られている。ここでは小玉遺跡の周辺範囲を中心として年代順に概観したい（第4図）。

旧石器時代の様相は不明な点が多いが、飯綱山麓の川上・柳里・古町地区、磐山麓の平出地区など比較的標高



1 宮津遺跡	7 菊池原敷遺跡	13 中川入遺跡	19 八幡社遺跡	25 東前坂遺跡
2 西櫛川遺跡	8 八蛇口遺跡	14 川入遺跡	20 裏町遺跡	26 橋詰遺跡
3 石原遺跡	9 大岩遺跡	15 小玉遺跡	21 七割遺跡	27 錦山遺跡
4 蟹原遺跡	10 下向山遺跡	16 飯塚遺跡	22 古城遺跡	28 岩袋遺跡
5 南遺跡	11 明尊寺遺跡	17 前田遺跡	23 表町遺跡	29 矢筒城館跡
6 横道遺跡	12 茅磨山遺跡	18 五輪塚遺跡	24 西原遺跡	

(注) 28、29は中世の遺跡である。

第4図 小玉遺跡周辺縄文時代遺跡分布図 (1:25000)

の高い地域に点在し、宮浦遺跡では後期旧石器時代前半にさかのほるスクリーバーが発見されている。小玉遺跡の東方台地にある裏町遺跡でも尖頭器が見つかっている。

縄文時代に入ると、草創期では下向山遺跡、前田遺跡、西原遺跡、早期でも宮浦遺跡、前田遺跡などわずかな資料が採集された程度で、遺跡の規模は小さく数もごく少ない。そのなかにあって、宮浦遺跡で検出された一例に並ぶ計画的で大規模な土坑群が早期段階の落とし穴造構と考えられており注目される。なお縄文時代の落とし穴造構は表町遺跡でも多数見つかっている。その他、縄文前期の町域では、高坂の丸山遺跡や芋川の小野遺跡で住居址をはじめとする良好な造構・遺物の検出がある。小玉遺跡周辺では中川入遺跡、前田遺跡、裏町遺跡、西樽川遺跡、西原遺跡などで遺物が採集され、西樽川遺跡では土坑と諸磯式期の遺物が検出されている。

縄文中・後期になると町域の遺跡数も増加し規模も大きくなる。中期で代表的な遺跡は赤塙の上赤塙遺跡である。中央部に広場を有し弧状に展開すると想定される集落遺跡で、13棟分の堅穴住居址が検出され、中期前葉から中葉を主体とした遺物が出土している。小玉遺跡もまた從来より中期からの遺跡として知られ、周辺では中川入遺跡、川入遺跡、古城遺跡をはじめいくつかの遺跡で遺物が採集されている。

後期の遺跡では、明尊寺遺跡から2棟の住居址や土坑が確認され、八蛇川を挟んだ対岸の茶磨山遺跡からも多數の土器・石器類が出土している。芋川の小野遺跡も後期が主体の遺跡らしく住居址や多量の遺物が検出された。小玉遺跡もまた後期の遺物が多く採集されてきた遺跡である。縄文晩期には遺跡の数は減少するが、茶磨山遺跡、橋詰遺跡（旧米の栄町遺跡を含む）からかなりまとまった遺物の出土がみられる。

弥生時代には、町域の遺跡は日立った遺跡があまりない。小玉遺跡周辺では中期栗林期の遺物が採集された前田遺跡、中期から後期箱清水期の土器などが出土した宮の下遺跡、橋詰遺跡などがある。

古墳時代にはさらに町域の遺跡は希薄になる。長野盆地を見下ろす高所に築造された古墳が平出南部に4基知られているが、集落遺跡や遺物の出土はわずかで、橋詰遺跡、大久保遺跡で若干の遺物が採集されている。つづく奈良時代の遺跡も少なく、橋詰遺跡、前田遺跡で採集された須恵器が奈良時代の所産とみられている。

平安時代になると町域の遺跡は急増する。小玉遺跡周辺で発掘調査を経た遺跡では、前田遺跡で堅穴住居址4・掘立柱建物址、矢筒城館跡で掘立柱建物址、表町遺跡で堅穴住居址が検出されている。また生産遺跡としての窯業関連遺跡が平出・牟礼地区に集中しており、前高山窯跡群では3支群からなる5基の須恵器窯と1基の製炭窯が、西浦遺跡では粘土探査坑とみられる土坑群が検出されている。

なお、平安時代に編纂された『延喜式』所載の官道東山道のうち、信濃国府と越後国府を結ぶ支路にある「多古」と「沼辺」の駅がそれぞれ長野市田子と信濃町野尻に比定され、飯綱町城は路線の通過地域にあたる。ルートには諸説あるが、通過地点として古代の官道の終点による「ミサカ」の転記とみられる小玉の「見坂（ミイザカ）」が重視されており、田子・平出の須恵器窯業地帯・東黒川・西黒川の大宮神社前へと通じた路線は小玉遺跡地点から近世の北国街道と重なり小玉山を越え、見坂から信濃町へ至るというのが有力視されている。

中世に小玉は太田荘小玉郷として文献に見え初見は1329年（元徳元）である。周辺では太田荘地頭島津氏の城館と伝える矢筒城跡、その城下であったという伝承があった表町遺跡が調査されており、とくに後者は県道用地の発掘調査で南北350mにわたる戦国期の大規模集落であったことが判明しつつある。また鳥居川対岸の鐘山遺跡、岩袋遺跡でも遺物が出土している。

近世には矢筒城廢城と表町遺跡の消滅、北国街道の制定に伴う牟礼宿の設置があり、牟礼宿に連なる小玉周辺は街村集落を形成。近世初頭に開削されたと伝える小玉用水により水田化が大いに進展したと考えられる。近現代には鉄道信越本線や国道の整備がおこなわれ現在に至っている。

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1. 壱穴住居・土器集中箇所

##### (1) 壱穴住居 SB1

###### 遺構 (第10図)

調査区7・8地区中心に検出された縄文時代中期後葉IV期の壹穴住居跡である。水田床土直下の黒色土(IV層)上部にある石組・集石群の検出中に石圓炉の上部が姿をあらわしたので、まず、疎群の検出をおこなったのち、住居の平面形・石圓炉ならびに床面を精査した。しかしながら、住居跡上部を覆う黒色土には多量の円礫が円形にほぼ6mの範囲内に認められた。これらの多くが石組SH10や集石SH11の存在から石組・集石群のものとすることはできようが、疎群の分布の在り方から一部には壹穴住居廃絶後の廃棄に伴うものと、石組・集石群廃絶後の西南方向からの砂礫の自然堆積も想定しておかなければならないが、調査途中では自然堆積層を除いてこれらの識別はできなかった。

住居に伴うと考えられる柱穴はP11~P19の10個である(表6)。うちP11、P14~P16、P18、P19が、ほぼ等間隔の円形配置であることとピット内埋土から、本住居に伴う柱穴とおもわれる。しかし、炉西北寄りには西南方向から伸びる砂礫層の堆積と石組SH10が、東北寄りには集石SH11が石圓炉とほぼ同一レベルに構築されており、したがって床面と思われる部分の多くが破損され、床面及び壁の立ち上がり等は明確には検出できなかった。加えて住居跡南側は調査予定区外であった。したがって、壹穴住居SB1は、砂礫土堆積による浸蝕及び縄文時代後期の石組・集石群の構築に加えて現代の水田造成による削平などを受けて、大部分は失われていたことになる。

想定する住居は一部疎群の在り方に加えて炉及び柱穴の位置等から、住居中央に石圓炉のある径6mほどの円形プランの壹穴と推測できる。

石圓炉(第10図2)は長さ50、幅20、高さ40cmの扁平な玉石を「コ」の字形に配置し、南側にはこれらよりもやや小ぶりな玉石2個を置き、方形の右開い炉としている。規模は内径で50cm四方である。炉内には口縁及び底部を打ちかいた火種深鉢(4)を斜位に埋設し、その周辺を大形深鉢(1)を割って敷いている。尚、石圓炉南側には縁石に接して平石2個があった。敷石住居に伴うものとするよりも、炉の構成施設であろう。また炉の北側縁石に接して数個の角のある安山岩玉石とともに半折した石皿が出土した(141)。炉の縁石はいずれも安山岩の玉石で、火熱を受けて多数のひびが入っていた。炉床の土器も火熱を受けていたが、炉内に焼土はほとんど認められなかった。

本住居跡の年代は炉体土器(1・4)から中期後葉IV期のものである。

###### 遺物 (第16~20・54~62図)

###### ①出土状態

多量の中期後葉IV期の土器片が少量の後期の土器片をまじえて、炉周辺から出土した。後者の上器片は石組・集石群に伴うもので、本住居の検出状況が遺物の出土状態からも知られる。しかし、中期後葉の土器群は型式学的にも炉体土器と時間的に大差は認められず、ほとんどが本住居廃絶後に廃棄されたものや本来的に住居に帰属していたものが、後期の石組・集石群の構築によって混乱したものと云えるので、本住居跡出土とした。

石器も土器同様であるが、石圓炉に接した石皿（141）や蜂巢石（R-367）がある。また集石SH11に接して、蜂巢石（R-368）がある。後者は集石SH11に伴うものとするか判断にまよう。その他礫群中から打製石斧9点（48）、凹石3点と磨石（102・133）が出土している。これらが石組・集石群の構成物であるかどうか不明であるが、打製石斧9点中8点が折半または小片であり中期に製作されたのものとしても石組・集石群構築時に礫として再利用されたことになる。

## ②中期後業Ⅲ・Ⅳ期の土器

圧痕隆帯文系土器（2・9～25）、口縁部が内湾または直立ぎみに立ち上がる大型の深鉢であり、縄文地文と指頭、またはヘラで圧痕された断面三角形の隆帯文を貼布して飾られる北信地域を中心に上越地方まで分布する在地の土器である。圧痕隆帯文は、通常は口縁に平行にはしらせた隆帯を胴部下半で垂下させその先端は半円を描いて終りとするとともに一方の端は口縁部に崩下と同様に円文を描いて収めている。しかし、2条1組の圧痕隆帯を用いたり（9・11・21・25）、圧痕隆帯の先端が渦巻文をとらずに収束させる（23・24）などの変化もある。

なお、石圓炉の炉底に敷いた1の土器には、器形、紋様モチーフは圧痕隆帯文土器と共通するが、隆帯上の圧痕は認められない。胴部上半は羽状縄文を下半は7本の櫛で縦方向に底部に向けて描くが、一部に弧状または波状として変化を持たせている。縄文、櫛描（条線）文ともに充填文である。土器胎土には白色の流紋岩片の粉末を多量に混入させている。櫛描文を持つ同様の土器が他に3点ある（69～71）。それぞれ別固体であるが、偽口縁が認められ粘土帯の幅は6cm前後である。

圧痕文を持たない隆帯文土器（1・26・27）は例えば長野市豊野町明神前遺跡（笠沢・佐藤他2001）や上越市山岸遺跡6号住居址（寺崎2003）にも認められる。圧痕を省いたものとして理解するのか別とするか課題として残るがここでは圧痕隆帯文土器の変種としておきたい。

加曾利E式系土器（4・5・42・43・46～50・52・56・58～61・63～65・75）関東系の加曾利E式土器はⅢ式後半になると、大木系や曾利・唐草文系土器などと影響しあい、折中型となり、各系別間の識別が困難となる。縄文地文のうち、大木系要素の少ない隆帯文あるいは沈線文を持つ土器群を一括した。

深鉢はキャリパー形を基本とする（4）。沈線文土器と隆起線文土器とがある。前者には逆「U」字文（48～52・58～61・63～65・75）やこれに蕨手文を加えたもの（4）がある。逆「U」字文は単位文としてあるよりも、連続した文様帶としてある。多くは口縁に平行した直線文の下に描かれる。縄文はほとんどが施文の最終段階に充填されるもので、単節がほとんどであるが、無節（4）や附加条（58～61）もある。後者は内湾ぎみまたは直立ぎみに口縁部が立ち上がる深鉢である。隆起線で方形区画とし、そこに無文と充填縄文を交互に配して文様構成をとる隆起線で逆「U」字文を描く（75）が数は少ない。これはキャリパー形で、断面三角形の隆起帯を貼り、逆「U」字間を附加条縄文で充填している。口縁部が短く外反し頭部がくびれ頭部が張る壺形の土器は1点がある（46）。隆起線で逆「U」字文を連続して描き、区画内には無文帯と無節の充填縄文を交互にした文様構成をしている。頭部には両耳の橋状把手（5）がつくであろう。

大木系土器（3・6・8・37～40・44・51・53～55・57）大木9式土器を基調とした一群であるが、これらも加曾利E式系土器との識別が困難である。蕨手文、楕円文、渦巻文などを組みあわせて低い隆線や幅広の沈線で描き、楕円文などの区画内には縄文を充填している。深鉢は波状口縁となるものには平突起（6）や嘴状突起（8）のつく例が多い。

曾利・唐草文系土器（28～36）出土量は少ない。いずれも深鉢で、口縁部に無文帯を残し、口縁に平行に一条の隆帯を施し、以下胴部に底部から口縁にかけて刺突した連続刺突文（30～32・36）や綾杉文（33～35）を描く。

口縁部の降起線には幅広の降帯として、指頭圧痕を施したり（29）、その下に「の」字状文を描いたのち縦杉文を描く例（28）もある。普利・唐草文系統杉文では最終段階に属するものであろう。

その他、大型の円形刺突文を垂下させた隆帯の左右に施した胴部破片（73）やおそらく縦文だけで飾る深鉢（72）がある。前者は压代遺跡群では压痕隆帯文土器などに認められる（水沢2000）が例は少ない。

### ③後期前葉から中葉の土器

住居跡の埋立から縦文時代後期初頭から中葉にかけての上器片が相当量出土した。前述したとおり、これは住居廃絶後、石組・集石群が構築されたことを物語るものであろう。なお、後期深鉢の分類はA～C類とし、A・B類は頸部がくびれるもの、C類はくびれのない朝顔形深鉢である。前者は口縁部無文をA類、胴部が無文のものをB類とした（綿田2002）。ただし、綿田氏は類別ではなく、群別としさらに細分している。

称名寺式併行の土器（109）深鉢の頸部片と思われるもので1点ある。半隆起線に大型の円形文を付与した、厚手の土器である。称名寺式土器のうちでも新しい段階に属するものであろう。

堀ノ内1式土器（78・80～88・93～95）2本の平行沈線で弧線文や済用文などを描き、そこを縦文充填した文様構成をとる。深鉢A類の胴部文様（80・81・84・86・87・88・93～95）とB類の頸部文様（85）などがあるが小片のため不鮮明である。78は太い「J」字文状の沈線と横描文が描かれている。

堀ノ内2式土器（79・96～108・110～112・114・115・120・123）深鉢B類（90～91）と朝顔型のC類（96・98・100～108）などがあるがはっきりしない。沈線は前代に比較して細く紐線文は背が高く大きめの刻目（101・102）と背が低く、「8」字貼付文が小型化した例（98）があり、後者は新しい属性であろう。一本の沈線を重ねて「コ」字形や三角形・菱形などを描く、いわゆる幾何学文を持つ例（112・115・123）はB類やC類上器の胴部文様帶として多い。111は半裁竹管具を用い、菱形状の空白部を残しており縦文時代前中期から知れない。堀ノ内2式土器の深鉢には丁寧にヘラで磨いた精製土器がある。前記した紐線文や弧線文（103・104・105）、幾何学文（112・115・123）などもそれにあたる。深鉢C類の頸部にある中央に沈線を配して横円文をもつ土器（114）も精製土器に属する。110は精製土器で口縁部内外面に、波頂部に縦位の重弧線文を基準に中央に沈線を施した横円文を配するものであり、口縁部と頸部の施文個所に違いはあるにしても、文様構成は共通する。120も口縁部文様帶の一部で内文の発達からみて110の口縁部片とともに堀ノ内2式のうちでも新しい段階の土器であろう。

注口土器（89・118）には胴上半部でおそらく2本の平行沈線を下部区画線として、その間に円文・弧線文を配したもの（118）と重三角形文を描くもの（89）とがある。内面は斜め方向にケズルか押さえ、外面は丁寧にヘラミガキを施している。

石神類型の土器（121・122・125・128）小諸市石神遺跡J19号住居跡出土の上器で石神タイプ（石瀬1996a）あるいは石神類型（秋田1996a・b、1997）と呼ぶ一群の上器である。深鉢は紐線文が変容して条線化し、逆「S」字を連続して左まわりに描いた連鎖状文や結紐文を持つことと炭素吸着させ黒色研磨された薄手の精製土器の存在を最大の特徴とするものである。連鎖状文は横位に条線文と組み合わされる場合と波頂部から縦位に区画線として描かれた場合とがある（125）。前者は2本一単位で「S」字を表現する連鎖状文A（122）と1本一単位の連鎖状文B（121）がある。条線文と組み合わせて朝顔形の深鉢A類（122・128）の主文様である。128の条線文には細縦文（LR）を添加している。連鎖状文Bも深鉢Aの頸部文様帶の一部として用いられ、下部に条線文が来るものと思われる。

縦位の連鎖状文を描く深鉢は1点ある（125）。内面文様に弧状の沈線がある所から、口縁部の一部である。縦位の連鎖状文は恐らく横位の連鎖状文から垂下させたもので、縦区画として描かれ、縦文地文上に斜位の短線文

が平行して描かれている。黄褐色の精製土器である。

加曾利B1式土器（113・116・117・119・124・126・127）深鉢と注口土器がある。深鉢は対弧文をもつと思われるもの（117・124）と区切り文（126・127）がある。前者は小片のためはっきりしない。後者は口縁部片で127は端部が欠損している。区切り文は平行沈線を描いたのち、上から下へと鍵形に施文する区切り文Aであり、斜繩文（LR）で充填する。119は深鉢の胴下半で2本の平行沈線で区画された中を右下がりの短線文で埋めている。

注口土器（113・116）は2点あり、116は暗黄褐色で白色細粒を微量に含んだ精製土器で内面はユビで押さえて成形している。細い沈線で、蕨手文と弧線文を組合させて描き、区画内に重複杉文で埋めている。113は平行条線と「S」字連鎖状文を描く、赤褐色の精製土器である。

#### ④石器

石鎌片1、石鎌2（40）、削器3、搔器2、打製石斧8（48・67・71・72・74）、磨製石斧1（91）、凹石5（123・127）、磨石2（102・133）、石棒1（128）、石皿1（141）、蜂巣石2点の総数28点出土した。うち、出土状態が把握できほほ本住居跡に伴うものは、炉内出土の削器1点、炉縁石に接していた石皿1と2点の蜂巣石に加えてP17に接して出土した石棒があり、他は住居跡埋土内出土である。打製石斧は小型品（48・74）以外はいずれも破損しており完形品はない。短冊形（A型）または撥形（B型）と思われる。72は斜刃であり、正面側に使用による磨耗が著しい。石材は凝灰岩質頁岩3点（67・72）硬質砂岩製（48・71・74）が5点ある。石棒は頭部破片で、蜂巣石とともに中期後半の所産であろう。

### （2）竪穴住居 SB2

#### 遺構（第11図）

調査区の東南隅で検出された、绳文時代中期後葉IV期の竪穴住居跡である。トレンチAを調査中に、断面に石囲い炉と思われる平石2個を検出した。このため住居跡検出に力点をおいて精査した。その結果床面と思われる面から埋甕（130）と3箇所から完形を含む深鉢が出土した。埋甕の西北東150cmの地点で3個体（129・132・133）、P33に接して1個体（134）、南側に1個体（131）である。しかし、ここでも埋土の大半は水田造成時の掘削によって失われ、壁および床面の確認はできなかった。ただし、埋甕とその付近に黄色粘土が見られる所からそれらと完形土器の出土レベルを床面のレベルとする黑色土下部に粘土による貼り床があったものと思われた。しかし、貼り床は他に認められず、竪穴住居のプラン確認はできなかった。なお、その後の検討で断面の石にも炉としての痕跡が認められなかったので、本住居の大半は炉跡も含め本調査地の東側に存在していることになる。

したがって、本住居の遺構としての属性はほとんど不明である。僅かに、竪穴住居SB1の西にあって、埋甕のある竪穴住居跡であるということになる。住居内と思われる範囲内からP22、P33のピットがあるがP22は浅く除外され、P33のみ推定床面から18cmと深く、本住居に伴う柱穴とすることができる。

埋甕は底部を欠き、正常位で床面下の砂礫土を20cm掘り下げ埋設されていたが土器は約3割失われていた。

#### 遺物（第21図）

中期後葉III期後半からIV期の土器 同一レベルで想定床面出土の一括土器群であり、他に少量の小破片もあるが省いた。また、石器は見られない。土器は完形または半完形でいずれも加曾利E式系統の深鉢であるが、変容が著しく末期的様相である。唯一132がキャリバー形の器形で4ヶ所に突起を持つ加曾利EⅢ式の属性をとどめる。129は平口縁で「H」字形に連続して文様帯とし、無筋の繩文を充填している。他は波状口縁の深鉢で、縦位格円文（131）や逆「U」字文と蕨手文を組み合わせている（130・132・133）。134は胴部上半の文様帯のみ波

状口縁に合わせて波状を山形に配したのち逆「U」字の先端を渦巻文として収め、その間に蕨手文を加えている。ただし、文様構成には規則性はみられるものの乱れも認められる。すなわち、文様帯は上、下に分け、それぞれを8分割し上部文様帯は逆「U」字形とし、その先端を蕨手文同様に半円渦巻文で閉じ各区画内も同様に半円で閉じる直線を配している。しかし、下部文様帯も同様であるが、底部に近いためか直線に終わるものもある。「U」字文末端の半円の閉じ方には左右半円を逆に対峙させるが一部に左向きに統一して変化をもたせている。区画内充填の沈線も1箇所は省略している(134-2)。縄文土器の文様の規格性を知る好資料であり、背後にモデルとなった土器があったことを暗示している。129を除き單節縄文で施文の最終段階に施文している。

### (3) 土器集中箇所 SQ1

#### 遺構（第11回）

堅穴住居SB1の北寄り、石組SH3の間にある。石組・集石群の西辺にあり、少量の円礫層の下部にある。埋甕とそれに接して焼土塊（長さ40cm）があったが、他に床面、壁等は認められなかった。しかし、壇甕周辺には縄文時代中期後葉の土器片が多量に集中出土している所を見ると、埋甕、焼上の存在も鑑みると、堅穴住居の存在は否定できない。しかし、発掘時の所見で埋甕としたものも、その後の検討で土坑の可能性もあり、確定的ではない。したがってここでは、埋甕と焼土を含めた中期土器片の集中した地区を、土器集中箇所とした事由である。

埋甕は恐らく 80×40cm 深さ30cmの楕円形状の土坑の埋没後に、径30cmの土坑を深さ10cm程度掘り窪め、口縁と底部を欠いた深鉢胴部を正位の状態で埋め、甕の上は径15cmの安山岩の丸石がおかれた状態であった。土坑は存在を確認したにとどまったため、細部は不明である。壇甕周辺には後期の石組・集石群の西辺部にあたり、礫群の一部があった。中期後葉Ⅲ期後半からⅣ期の遺構とおもわれる。

#### 遺物（第22・54・55回）

中期後葉Ⅲ期後半からⅣ期の土器 埋甕とその周辺から出土したものである。埋甕(137)は背の低い降帯で渦巻文と弧線からなる文様帯を胴部にもつ。135の口縁部片も同一個体であろう。充填縄文されている。大木系の土器であろう。胴部部分の約70%が現存している。加曾利E式土器には2種がある。141・143はヘラによる2本の平行沈線で振幅の大きい「U」字文で胴部は1本の沈線で「U」字文を描いて飾るもので連結「U」字文対向型と呼ぶものである（水沢2000）。波状口縁の波頂部には大型の山形文を配し、その空間には楕円文を付加しているが、胴部下半にはない。いまひとつは、1ないし2条の沈線を垂下させて、その空間に逆「U」字文または楕円文を配置したものである。口縁部を欠くので、全体の文様構成は不明である。恐らく胴部上半には蕨手文も加えられているものと思われる(139・140・144)。この他、越後系の馬高式土器後半の把手がある(138)。突起（把手）外面は2箇一対の渦巻文を上に描き、内面には逆三角形に配した渦巻文を描き、これらの中心に穿孔がある。外面の下部渦巻文間に剥離痕がある所から、ここから口縁端部にかけて橋状の把手が付いていたかもしれないが、端部が欠損のため、確かなことは云えない。波状部から口縁にそって、2本の沈線を施文し、その間の空間部に斜行平行沈線を施文している。明黄褐色の色調で、胎土は他と異なる。他の土器群にやや先行するものと思われる。142は器台と思われ、円孔がある。

石器 石鎚1(1)、打製石斧2(47・58)搔器1点がある。

## 2. 石組・集石群

### (1) 石組・集石群

遺構（第8・12・13図）

調査区1・4区を除く、ほぼ全域にわたり、表土下60cmの黒色土（IV層）中に検出された。遺構は多数のこぶし大の円礫からなる4基の集石と、主として30~50cmの平石からなる6基の石組、およびこれらの周辺に散在する多数の円礫からなる。しかし、調査の初期段階では散在する礫群の中でも石を積んだと思われる小規模な礫のまとまりや一個ずつ散在している部分があり、それらが自然の堆積なのか遺構とするのか判断が容易ではなかった。その後同じ円礫の広がりのなかに集石や石組が検出されるに及び散在する礫群も含めて、ひとつの遺構群のまとまりとして調査を実施した。つまり特に礫が密集している遺構を集石とし、大きな平石の集まり、または明らかに意識的に組み立てられたものを石組と呼称した。石組、集石とその周辺の散在する円礫群を含めた全体を石組・集石群としてとらえることとした。この石組・集石の検出時には縄文土器に混じって上師器や須恵器などの古代の遺物や骨片が出土した。この層（IV層）は昭和40年代まで耕作されていた水田底土の下層にある。水田造成時や古代において下層の石組・集石にある程度影響を与えており、石組・集石群が完存した状態でないことは十分に銘記しておかなければならぬ。

石組・集石群は調査区のやや東寄りにあり調査区1から南東方向にかけてある。南北15m東西8m前後である。一見弧状にも見え、環状石組・集石群の南東周辺にあたると見られなくもないが本調査区が多く断続はできない。集石は石組・集石群の北辺に集中し（SH7~8）、石組はそれより南側にある。

石組は大形の安山岩の平石を2ないし3列の列状に配石した長方形形状のA類と箱式石棺状のB類がある。ともにこぶし大の円礫を添えており、敷石住居の残存とは異なる。なお、石組としたものなかには配石と呼ぶべきものもあるが、遺構の残存状態も踏まえて石組に統一した。

遺物の出土状況（第15図）

多量の土器片が出土しているが多くの遺構検出時に取り上げられ、遺構に伴うと明記し、取り上げた土器は多くはない。それらも多くは括り上げであるため、出土地点の判明できるものはごく僅かである。他方、石器とくに大型石器類の多くは出土地点を明記した上でとりあげをおこなったため、出土状態がほぼ分かる。

ここでは各石組・集石内出土以外で、石組・集石群内出土遺物についてのみ述べる。なお、遺物の取り上げは石組・集石群の中にあって礫内から出土したものは石組・集石群とし、礫群を取り上げた後の黒色土下部（IV下層）は石組・集石群下層としてある。

石組・集石群出土遺物（第23~25・59・60・62図）

中期と後期の土器があり、主体は後者であり、中期土器は省く。後期土器は前葉の土器が中心でとくに堀ノ内2式土器が多い。前葉前半には堀ノ内1式の深鉢B類（172）、堀ノ内2式深鉢C類（177）と北陸の要素の強い後期中葉の深鉢C類（179）がある。172も胸部に斜縄文を持ち南三十番場式土器と関係が深い（田中1989・2002、品田2002）。177を除いて半粗製土器の一部であろう。小型の精製土器群（173~182）は小型深鉢（175）、注口土器（180~182）、台付土器（178）がある。173も注口土器の口縁部片であろう。175は鋭角度で折れるが器種は不明である。175、181は黒色研磨の土器である。また180は三十番場式土器の注口土器であろう。

石器は凹石5点（120・124）、蜂巣石1点（139）がある。いずれも石組・集石群の東辺で土坑SK4に近接した列状の集石内から出土したものである。

石組・集石群下層の遺物（第25・26・61図）

中期後葉Ⅲ~Ⅳ期（221~223、228・247）、後期称名寺式併行（224・225・227・233）堀ノ内1式（229・

230・242・251)、壠ノ内2式(231・234・236~241・245・246・249・250)、越後系の三十稻場式(244・248)と繩文をもつ粗製土器(235)、櫛描文土器(243・253)に無文粗製土器(254~257)がある。口縁端部に円形列点文をもつ粗製土器(257)や繩文をもつ粗製土器は越後系上器と関係があろうか。また、櫛描文土器は中期末の可能性もある。238の深鉢はBまたはC類で梢円形状の大きな烈点文をもち縦線文はない。壠ノ内2式でも新しく北陸地方との関係があろう。無文の粗製土器3点のうち、254は口縁端部に、255は内面に太い沈線がある。硬質で3点とも内面はヘラでケズルかナデている。

石器は石棒1点がある(131)。

石組・集石群下層の後期の遺物の多くが、これら遺構との関係について十分に調査時に検討してないため不明である。しかし石組・集石群の下部にSK4など一部を除いて上坑等が検出されていないところを見るならば、後期の遺物は石組・集石群構成時に係わった遺物が大半であろうという予想はあらかたつく。中期の土器片があることは中期の包含層を削って石組・集石群が作られたとすれば矛盾はしていない。

### (2) 石組SH1

#### 遺構(第12図1)

調査区2・3区、石組SH2と集石SH8との間に検出された。N51°Wと東西に長く2.6m、幅1.2mの規模であり、30cmから50cmの大いな平石と伏せた石皿2個体を配石したものである。石組はA類である。しかし西側に4個、東側にもやや小ぶりの平石が5個あり、中央部が抜ける。南側にも円窪を含む平石があり、「コ」字形の配石とするならば上部の石積を失なった箱式石棺墓とすることも可能である。この場合には石棺の内法の残存幅は東西で0.7m、長さは南北方向にあり、0.5mまで確認できることになるが、これ以上の判断は不可能である。石の上面はほぼ半らに並んでいるが敷石とはならない。石組の下層(黒色土)を20cm掘り下げたが掘り込みなどは認められなかった。

#### 遺物(第23・56・62図)

石組内から若干の土器片(161~171)と石皿2点(142・143)、使用痕のある剥片、下層より打製石斧(64)と叩き石各1点が出土した。土器片は中期後葉Ⅲ~Ⅳ期の土器片(166)と後期前葉の壠ノ内1式土器(162~165、167~171)である。161も後期上器と思われるがはっきりしない。石皿は伏せた状態で出土しており、石組の一部として転用されたものと思われる。142の磨面は僅かに凹み注口部が認められる。143は上部を欠損。磨面に凹石への転用痕跡が5箇所に認められる。

### (3) 石組SH2

#### 遺構(第12図2)

調査区のはば中央に位置し、南側に石組SH5がある。大小の円窪群の中に50×50cm、厚さ約5cmの扁平な石と、50×30cm、厚さ10cmの石を底石として平に敷き、40から50cmの長方形の石4個を各辺2組ずつ側石として立てていた。石組B類である。ほぼ1m四方の正方形をしており、側石の上面から底石の上面までの深さはほぼ10cmである。箱式石棺墓を想定し、平石は蓋なのか、底石なのかなど根拠を探すこと試みたがはっきりしなかった。石組の下層に掘り込みは認められなかった。石組脇から上器が出土地(917)。この遺構の年代と性格を知るひとつの根拠となろう。底石の1個はほぼ水平に他は東側にせり上がった状態で検出されたが本来は水平に組まれていたものであろう。この遺構はもっと西に続いていることも考えられる。底石の下層の一部分に小さな円窪が認められた。底石を水平にするための一種のひかえみであろうか。幅は内法で50cm長さは残存長として1m、高さは20cm弱となろう。主軸方向がN24°Eとする箱式石棺とすると全体に規模が小さい。これの理解も今後の課題となろう。

#### 遺物（第25・48・49・61図）

少量の後期の土器片と石錐（136）、磨石1点が出土した。土器はいずれも小片である。壠ノ内1式（190・191・194）と壠ノ内2式（192・193・197・198・201・202）、粗製土器（195・196・199）と注口土器（200）および上偶（917）・土製円板（953）がある。

#### （4）石組 SH3

##### 遺構（第12図3）

石組SH15の南に位置する。扁平な径40cm前後の大石を一部入れ子状としながら水平に組み少量の凹縫を混じている。N70°E方向に1.8×0.3mの長方形プランでA類である。石組は平坦な石を用いているが40×30cm、厚さ20cmの大きな角礫も使用している。

##### 遺物（第25・49・59図）

ごく少量の土器片と石錐1、凹石3点（116）が出土した。土器は壠ノ内2式（203）および上製円板（921）がある。

#### （5）石組 SH4

##### 遺構（第13図1）

石組・集石群の南端にあり、下部に土坑SK5を伴う。主軸方向がN63°Eの東西に長い3.0×1.5mの長方形の石組A類である。土に平面的な石のなかに20cmと厚手の石も含まれる。石組西側には現代のゴミ穴があつて組まれていた石が抜かれていた。土坑SK5は西側をトレンチ調査時に掘り抜いたため、全体長は不明であるが1.3×1.13m深さ40cmの指円形状のプランのもので北側にやや浅い掘り込みがある。

##### 遺物（第25・49図）

石組除去後の土層から土器片30片と凹石と叩石各1点が出土した。出土状態の記録がないので、石組や土坑SK5との関係は不明である。中期後葉の土器も少量ある（216・217）が、後期土器が土体であるので、何らかの関係はある。壠ノ内1式（211）は少なく、壠ノ内2式新段階（204・209・210）が多く、加曾利B1式土器（207・212・215）も少量ある。その他に土製円板が1点ある（940）。

#### （6）石組 SH5

##### 遺構（第12図2）

調査区の中央部にSH2と接している。東西に長く2.5×1mの長方形プランである。他の石組とは異なり、主に大小の凹縫で構築されていた。中には30cm角の大きな石も用いている。石の並びの上面の高さはほぼ水平である。また、石組SH5の北側は小規模ながらも石の集積が見られる所から、これをひとつとすることもできようし、これを切り離して集石としてSH2の構成要素とすることもできよう。

##### 遺物（第59・60図）

凹石4点（114・121・125）が縫中から出土した。

#### （7）石組 SH6

##### 遺構（第12図4）

調査区の北東隅に検出された。70×70cmのほぼ正方形で小規模である。平石の平坦な面を上にして置き、その三方に20cm大の石を「コ」の字形に縫に組んでいる。側石上面から底石までの深さは20cmである。石組B類であり、主軸方向はN27°Wである。このSH6はSH2と同様に人為的に組まれた石であることは一目瞭然でわかりやすかった。蜂巣石も側石として利用している。

##### 遺物（第25・61・62図）

中期末葉の土器片（220）とともに、石錐・削器・石皿（135）蜂巣石（138）各1点が出土している。

#### （8）集石 SH7

##### 遺構（第13図2）

石組・集石群の北辺にあり、集石SH8と東で、石組SH2と南で接している。主軸方向はS67°Eで東西方向に長く、楕円形で4×2.5mである。こぶし人の円礫を主体に集積したものであるが、集石西側や東側には小円礫を特に集めている。このように集石内部には場所によって礫の大きさによる相違は認められるものの、それらをもって小単位の集石としてとり出すことはできなかった。集石は一部数段にわたる石の積上げによる山形の盛り上げが認められるが大部分は一段である。集石内からは凹石4点（115・104）が出土した。礫の代用としてか、意図的に配置したのか明らかにできなかった。また集石下部には土坑などは認められなかった。自然地形を利用し、そこへ集積したものと思われる。

##### 遺物（第23図）

凹石以外では中期後葉の土器2点と壙ノ内2式新（149）などが少量みられた。

#### （9）集石 SH8

##### 遺構（第13図2）

主軸方向N55°Eの楕円形のプランをもつ2.5×2mの集石で、南辺で集石SH7と接する。礫はSH7と同様にこぶし人の円礫が多く、一段に集めている。集石下部に土坑などは認められなかった。SH7との新旧関係は不明である。

##### 遺物（第61・62図）

蜂巣石（137・140）が集石縁より出土している。

#### （10）集石 SH9

##### 遺構（第8図）

石組SH3と西辺で石組SH4と東辺で接し、2基の石組の間に検出された。10~20cmの円礫が2、3個づつまとまって直径1.5mのほぼ円形に配石している。重なりあってはおらず一段である。

##### 遺物（第23図）

集石内から後期前葉の土器がまとめて出土した。壙ノ内2式後半と石神類型の深鉢がある。156はC類の深鉢で充填縄文された孤線文が描かれている。縦線文をもつ深鉢B類あるいはC類は内文の発達が著しい（157）。石神類型の深鉢（158）は顎部に縦位の「S」字連鎖状文が描かれる。152も石神類型であろう。151は中期後葉の加曾利E式系上器深鉢で混入である。このほかヒスイの原石（口絵2）が出土している。

#### （11）石組 SH10

##### 遺構（第8図）

堅穴住居跡SB1内の床面と思われるレベルに検出された。十分に確認はとれなかつたが、SB1の床面を切って構築されたものと思われる。東西に長く1m、南北に50cm、深さは20cmの長方形であり、側辺に20cm大の石を並べている。底には調査区南西に広がる砂礫が流れ込んでいる。後期の石組遺構の一部と思われる。

#### （12）集石 SH11

##### 遺構（第8図）

堅穴住居跡SB1内に検出した集石である。調査の初期段階では1.3×1mの範囲に大小さまざまな円礫と30cm大の平石の集石である。SB1の石圓い炉の北東に位置する。敷石住居残存の可能性を想定し、相当数の円礫を除去し、結果的に90cm四方にひろがる平坦な面を上にした石だけが残ることになった。しかし石が不ぞろいで

凸部分も多く敷石の残存ではないと判断した。また集石の下部にP16が検出された。SB 1 の柱穴である。

### 3. 土坑

#### (1) 土坑 SK 4

遺構（第14図1・2）

洞企区の東端で石組・集石群の東辺部に検出された。東西に長く、長径2.14m 短径1.6m 深さ27cm の楕円形である。IV層黒色土を掘り込んでいる。土坑の東側はトレーナ A により削られ木確認であるが、東西から緩やかな傾斜で掘り込まれている。上層には北東から南西の方向に幅80cm でこぶし大の円礫が列状に集積しており、その一部が土坑の北西端にかかっている。円礫と重なる部分が少なかったため、調査の初期段階で土坑を検出した。土坑埋土内から後期前葉末の土器が出土し、石組・集石群と時間差が認められないところから、石組・集石群構築過程で掘られた土坑と思われる。

遺物（第28図）

土器片のみで、整理箱（30×40×10cm）1箱分が埋土下部から出土したが、中田新式（285）を含む少量の中期後業（284）及び壺ノ内1式（286）上器片を除くと、後期前葉末の壺ノ内2式の系譜にある新段階及び石神類型の土器である。

壺ノ内2式新段階の上器は深鉢・注口土器・蓋がある。深鉢は精製土器に縦線文（287・288・291・317）と沈線の区画に充填縄文施文（294・296・297・302）がある。前者の紐線は細く、それに応じて「8」字文も小さい。317は深鉢Bで、口縁部に紐線で縦位に区画したのちに横帯文を描き、胴部に重圓文と数条からなる懸垂文に複合鋸歯文をたくみに組合せている。292は4条からなる微隆起線上に細かな刺突を連続して施している。308～311は上述の深鉢の深鉢胴部片であろう。297は4条の沈線を描き斜縄文を施文している。これは292とともに黒色研磨され、石神類型の柔軟文と密接なつながりのある土器と云えよう。294は端部に細かい刻目をほどこした黒色研磨の土器である。口縁部の文様区画内縄文充填は壺内2式的であるとともに、薄手精製の土器胎土と端部文様は石神類型と共有するところから、これもまた壺ノ内2式と石神類型の両属性を併せ持つ土器と云える。

粗製または半粗製の深鉢（299・300・303・305）は口縁部に4条または無文で内面に1条以上の沈線を描く。器面をヘラでミガク（303・305）かナデる（299・300）など比較的丁寧に調整され硬く焼き上げられている。303の外面上には煤が付着している。暗褐色から黒褐色である。

注口土器（312）は頸部片で、橋状把手部分であるが、細部は不明である。内面は口縁部はミガキ、胴部は指オサエである。褐色で、石英・長石・杏母など少量含んでいる。

蓋（295）は充填縄文をもつ弧線文で明褐色の精製土器である。

石神類型（289・293・298・301・302・306・307・313～315）には朝顔形の深鉢C（293・298・314）と、頭部がくびれる深鉢B（313）がある。ヘラミガキされた精製土器で黒色研磨の土器が多く（293・298・302・307），他も明茶褐色など明るい色調の精製土器である。口縁部には横「S」字文突起（293・298）や「8」字貼付文のつく3単位の波状口縁の深鉢（313）である。これらの突起は口縁端部から内面にかけての文様帶としており、器外面上に付せられる「8」字貼付文からの発展した文様であり、端部に細かい刻目を付すものもある（298）。文様帶は大きく3類がある。A類（293）は口縁部に沈線を引くことによって得られた10条の微隆起線上に細かい刻目を付し、1本描きの「S」字連鎖状文を密に描く。胴部は破損のため判然としないが、2本で描く「十」字結縄文を中心にして縦線文を配した文様帶を描く。B類（289・302・307・313～315）は口縁部突起下に縦位の「S」字連鎖状文を描き、以下胴部にかけて、菱形または三角形状の結縄文を描く。縦位の「S」字連鎖状文の間に

5条の沈線を右まわりに描き、最下段の中間点には逆「の」の字または「S」字文を付加している。各々の沈線には斜繩文RLを充填している。尚、各組紐の結びは右まわりに描かれている。つまり、縦位の「S」字連鎖状文から、まず右下がりに描き結び部で反転したのち左下がりの沈線と結んで反転している。この結ぶ描き方は本遺跡で確認しうる資料に共通しており「十」字結びも同様である(314)。ただし289は逆である。C類(298・306)は平行沈線の間に「S」字連鎖状文を横位に描くもので、3条まで確認できる。上下2段は1本沈線で、中段は2本沈線で描く。1本沈線の各「S」字の間隔が空き、入組状とはなっていない。306は1本単位で描かれた連鎖状文にふさわしい描き方となっている。

以上の土器群は少量の堀ノ内2式土器最終段階の系譜に連なる上器群に一定量の石神類型の土器群が共存した一括としてのあり方を示していると思われるが、これらについては後に述べるが、石組・集石群の年代と性格を知る上で、鍵となるものであろう。

石器は叩石1点がある。

#### (2) 土坑 SK5

遺構(第14図3・4)

調査区の東端に検出された。東西に長く、 $1.3 \times 1.13m$ 、深さ35cmの楕円形である。北側に浅い掘り込みがある。土坑の東側はトレンチにより削られ未確認である。土坑の南西端は石組SH4東半分の下層にある。SH4とSK5の新旧関係は、SH4の搅乱はこの部分には認められず、SK5の埋土の上部にSH1があることを踏まえると、両者には時間差はなく一体のものと考えられる。

遺物(第27・56・60図)

上器片20片と石器がある。上器は少量の中後期後葉土器(273)、後期初頭(272)以外は後期前葉の堀ノ内2式土器である。深鉢(274・275・278)がそれであり、粗製深鉢土器(276・277)もこの時期であろうか。280は石神類型の深鉢であり279は綾杉文と思われるが、細片のためはっきりしない。あるいは加曾利B2式上器の可能性もある。

石器は定角式磨製石斧(78)1点と凹石2点(126)がある。

#### (3) 土坑 SK6

遺構(第14図5・6)

調査区の東端、SK5の北側に検出された。石組SH1の、東側1mにある。東西に長く $1.6 \times 1.08m$ 、深さ59.2cmの楕円形である。上層にはこぶし大の円疊がまとまって広がっている。石組・集石群の一部をなすものであろう。検出面は石組・集石群の下部から検出した。

遺物(第29・60図)

土器と石器がある。土器はいずれも小片で20片と少ない。

中期後葉(319・324・325)、後期初頭(318・322・323)、前葉(320・329・330)と堀ノ内2式新段階の注口土器(326~328)がある。土器には混在が見られるが、近接するSK4・SK5と同様に埋没時期は堀ノ内2式最終末であろう。

石器は凹石1点(122)がある。

#### (4) 土坑 SK7

遺構(第14図7)

調査区の西側でトレンチCを調査中に集石SH7の西側下層に検出された。 $1.26 \times 1.25$ 深さ26.8cmでプランは隅丸方形である。集石SH7の下部遺構というよりも石組・集石群の外周となる。埋土は黒色土で断面は箱型

である。土坑群のひとつとなろうか。

#### 遺物（第27・56図）

堀ノ内1式の深鉢2点と磨製石斧1点（79）がある。281は平口縁で「く」の字口縁端部に縦位の短縫13本を中心文様とし、その左右に2条の沈縫を描く。観察しうる限りでは上部沈縫を引き、縦に下ろした沈縫を「L」字形として先に描いた下部沈縫に合わせて右まわりに描く。描き方としての一例を示しているものとおもわれる。以下底部まで横方向にヘラでナデて仕上げている。外面は全面に、内面は頸部以下に煤が付着している。282は小形の深鉢で円文を中心に弧線文を左右対称に描く。ヘラで磨いた精製土器である。

#### （5）土坑SK8（第9図）

トレンチCの南端に検出された $2 \times 2\text{m}$ の楕円形で東側はP8で切られている。深さ20cm以上に達すると思われるが諸般の事情で全掘していない。時期不詳であるが、縄文時代中期ないしは後期の土器片が少量ある（第29図）。

#### （6）土坑SK9

##### 遺構（第14図8）

調査区7の西側でSK7とSK8のはば中に検出した。 $1.5 \times 1.17\text{m}$ 、深さ30cmの楕円形であり、中期前葉の土坑である。砾群の分布域にはない。

#### 遺物（第29・49図）

中期前葉の恐らく五頭ヶ台II式から新道式併行と思われる大形深鉢1点（331）と上層から中期後葉（332・333）後期前葉細片（334・335）2点がある。大形深鉢は胴部上半を欠損のため、法量は推定で口径44.5、器高62cmである。口縁部に4単位の突起を持ち頭部にめぐらす2条の圧痕縫帶に「ハ」字状に断面三角形の隆帶を垂下させている。胴上半部は不明であるが、胴部中央に口縁部同様の2条の隆帶が3箇所認められる所から口縁部とほぼ同じ位置か、若干ずれて、口縁部と逆の形で懸垂文を垂下させているものと思われる。斜縫文（RL）を横位に施している。胎土内には小豆大の白色粒（流紋岩片か）を多量に含ませ、このため胎土はよくない。器形、文様のあり方から圧痕縫帶文土器とは異なる。類例は新潟県上越市山屋敷I遺跡18号住居址（守崎2003）などと類似するものと思われる。他に土製円板がある（942）。

## 第2節 包含層出土の縄文土器・土偶・土製円板

### 1. 前期中葉の土器（第30図）

胎土に少量の纖維を含む、羽状縫文で口縁端部に刻目がある（336）。黒浜式土器である。1点のみ出土した。

### 2. 前期末葉の土器（第30図）

諸磯C式土器（338～340）と十三苔堤式併行期（337・341・342・346・347）の土器がある。前者は結節浮線文土器で、半裁竹管工具による条縫を地文とするもの（338・339）と縄文地文（340）がある。

十三苔堤式併行の土器は浮線上の結節が密であるもの（337・341・342）と連続した三角形印刻文を施したもの（346）、ソーメン状の細い粘土縫を先に描いた斜行沈縫文上に張り付け格子目文としたもの（347）などがある。337は浮線の表現が弱く、口縁端が内傾するなど、中期初頭の要素も見られるが、ここに一括した。346は円文や弧線にそって印刻文を配し、それらの間に平行短縫で充填している。類例は少ない。

### 3. 中期初頭の土器（第30・31図）

前期末の諸碳 C 式土器に続く五領ヶ台式併行の松原式土器（上田1998）とそれと併行関係にある梨久保式・九兵衛尾根式・睡場式土器などの土器群をまとめた。

半裁竹管工具を多用した沈線文土器群である。A・B・C 類がある、A 類は強く外反する波状口縁の深鉢で、口縁にそって数条の平行沈線を描き、波頂部からの縱区画線を中心に、数条の沈線によってレンズ状に描く（343～345・398）。B 類は格子目文を主体としたもの（348～353）、C 類は縦文地文に平行沈線を描く（354～356・359・360）。口縁部には一定間隔で垂線を描き、頸部に数条の平行線、そして胴部下半に垂線を平行沈線やそれに三角形文と組合せたものなどと描いている（354・359・360）。また、垂線には弧線などで区画文としたものもある（355・356）。

この他に、撲糸文を主体とした D 類がある（386～391）。いずれも半裁竹管による沈線文と組合せられたもの（391）もあり、これらの大半が中期初頭に属し、B・C 類の胴部破片と思われるが細片のため不明である。このことは B・C 類についても云える所で、B・C 類の組合せもあり得る。

以上の土器は更埴市屋代遺跡下層・長野市松原遺跡下層や妙高市和泉 A 遺跡をはじめ、本遺跡に近接した飯綱町赤塙遺跡や長野市豊野町上浅野・長野県上水内郡小川村後遺跡などに好資料があり、後述の中期前葉の土器群とともに、今後一層の検討がまたれる。

### 4. 中期前葉の土器（第30・31図）

北信の初頭に続く在地土器群は深沢系土器（高橋1989）でこれに広域の五領ヶ台式系土器や、北陸・越後系が加わる（寺内2000）。本遺跡では、明確に深沢系土器とするものは少なく1点のみ認められた（396）。

続く中葉にかけての土器群である後沖式（寺内1996）や諏訪地方の猪沢式や藤内式などいわゆる勝坂式土器に併行する土器群が少量認められる。列点文（373）は猪沢（勝坂1式）、角押文（378）や竹管工具による刺突文（371）は後沖式である。縱区画文のうち椿円文（361・362）は藤内式に、他の区画文（363・364・370）もほぼ前葉のうちに含められる。隆帯上の連続爪形 C 文（365・366）や連続刻目文（382）なども前葉の上器群となろう。連続刺突文（369・376・379）のうち369はやや古相をとどめるがほぼ前葉に属するものとしてよい。

一般に中期初頭から前葉の上器群は焼成が良く赤褐色から茶褐色系で、胎土内に雲母（342・352・354・359・363・368・380・383・391）や高温石英（水晶）を含めたもの（337・347・357・373・374・380・382）が日立つ。

### 5. 中期中葉から後葉 II 期の土器（第31・32図）

井戸尻編年の中戸尻式土器から曾利 II 式土器に併行する唐草文系上器は仮称役式土器と呼ばれる。これらは森嶋稔氏によって上水内郡小川村後遺跡出土品で形式設定された（森嶋1991）ものであるが、北信地域では後遺跡以外断片的でまとまった資料は極めて少ない。この他には越後の馬高式や北陸の上山田式土器系列の土器もあるがこれらも、総量は多くない。

#### 曾利・唐草文系土器（401～422）

小片が多く判断にまよるものも多い。役式土器を含む、主として曾利 II 式と唐草文系土器からなる。しかし、曾利・唐草文系土器としたものもかなり変容している。

相互刺突で表現された「連続山形文」と沈線からなる内区文様帶を太い隆帯で開む区画文は唐草文系上器の深鉢の口縁部文様帶のひとつであり（401・405・406・408・410～413）、刺突を欠き粘土紐（404）や沈線（407）で表現したものもある。後者、特に402については、唐草文系土器としてよいか判断がむずかしい。曾利系土器

(402・403・409・414) はむしろ筏式土器とすべきものかも知れない。なお414は浅鉢の口縁部と思われる。また、417・419・420は曾利・唐草文系土器としては一時期下がるであろう。他の土器片の位置付けはむずかしい。

#### 北陸系土器 (392・395・397・400)

392は四ヶ所の波頭部に円形突起を置く波状口縁・キャリバー形深鉢である。頭部に満巻突起を持つ隆帯で上・下文様帯を区画し、各文様帯は、隆帯とその左右に半裁工具に描いた数条の平行線で構成する単位文様を描いている。上部(口縁部)文様帯は突起部を起点として、4単位の右下がりの「C」字状文を描いている。しかし、すべてが企画的ではなく、波底部には小形の「C」字状文を加えたり、「C」字の空間部に三角形刺突文を描いた渦巻文で充填したりしている。そして各「C」字状の接する部分には区画の三角形印刻文を描いている。下部(胴部)文様帯も同様であるが、区画文様は満巻突起から始まる隆帯を垂下させ、各文様帯との接する部分には三角形印刻文を加えて、文様構成全体を落ちさせている。ただし、欠損部分も相当あり、これ以上のこととは不明である。茶褐色で焼成が良い、胎土内に多量の白色粒を含むSQ1付近出土であるが遺構には伴わない。北陸の上山田式の特徴が文様構成にあると云ってもよい。他の破片もほぼ同様である。類例は上水内郡小川村筏遺跡23号住居址にある(森鶴1991)。より北陸的であり、上越市山屋敷I(寺崎2003)遺跡にもいくつかみられる。

#### 6. 中期後葉III・IV期の土器 (第33~36図)

堅穴住居SB1・SB2・土器集中箇所SQ1同様に、包含層出土の大半の繩文土器は中期後葉III期からIV期のものが大半であり、本遺跡のピークの一端がこの時期にあったことを示している。しかし、後期初頭の称名寺式併行の土器への移行を示す直接的資料はほとんど見当たらず、中期最終末の土器様相を示してはいないように思われる。

#### 圧痕隆帯文系土器 (443・444・454~469・471~476)

中期後葉土器群の主体的土器であり、SB1と大差ない。大型梯形の深鉢である。口縁に並行に1ないし2条の圧痕隆帯を施し、ここから先端が満巻文でとまる垂下文をもつもの(444・459~461・469・475・476)と逆「U」字文を沈線で描くもの(443)があるが後者は少ない。444は無節の繩文帯の上に、口縁部及び胴部に2条の列点文を横位に施文しているが、口縁部のものははっきりしない。更埴市屋代遺跡群(水沢2000)に類例があるが量は少ない。富士山形の突起を持つ深鉢474は内屈する口縁部の473とともに、キャリバー形深鉢で、圧痕隆帯文系土器の中では別器種で類例はない。屋代遺跡群SB5345(水沢2000)や長野市豊野町大明神遺跡(笠沢・佐藤他2001)に類例がある。470は波状口縁の深鉢で「ハ」の字文を連続して斜位に施文している。SK4埋土出土の出田新式(285)の影響を受けたものであろう。

#### 加曾利E式系 (445~452・482~495・497・499・516・518・519)

ここでも大木系土器との峻別は難しい。特に加曾利E式系土器には大木系要素を多く取り込んでいるからである。加曾利EII式古段階(445)もあるが、大部分は新段階から加曾利EV式である。452は壺状突起である。

#### 大木系土器 (453・480・481・514・515)

嘴状把手は大木9a式(453)、大型の渦巻文を持つ深鉢(480・481)は大木9a~9b式であろうか。山形突起(500・503)も恐らく大木系に近い土器であろう。

#### 渦巻多連文系土器 (498・499・501)

内済する口縁部に渦巻文を横方向に連ねたものである。501は口縁部が直立ぎみで渦巻文も指頭でナデつけて描くなど、最終末のものであろう。出土量は少ない。

#### 曾利・唐草文系土器 (479)

出土量は少ない。口縁隆帯の下に短線文を連続して描いたものである。

隆帯文を持つ土器 (477・478・502・504・505・507・511・517・518・520)

圧痕施文のない低い隆帯を持つ一群と、隆帯上に繩文施文のあるもの (511・520) をまとめた。加曾利E式系または圧痕隆帯文系土器に近い一群である。

櫛描文で飾られた土器 (423~442)

多くが圧痕隆帯文土器の脇部文様帯として用いられるが、口縁に沿った沈線の下方に施文されたり (423~425)、口縁直下から羽状 (427・428・430)、縦位波状施文 (429)、波状文 (435)、縦位のレンズ状文 (436)、格子状文 (439) など単独または組合せた櫛描文が相当数ある。なお、これらが中期後葉のみならず、後期の粗製土器にも見られるが、小破片のため区別が困難であるところから、ここでは中期土器として一括した。

繩文のみの土器 (506・508~510・512・513・521)

確実に本類と云えるものは521のみであり、加曾利E式系土器の一部となるものもある。512は付加条である。

## 7. 後期初頭の土器 (第37・40・41・43図)

称名寺式併行の土器 (568~572・574・577・580)

称名寺式土器もI・II式と細分されているが、出土量も少なく、小片のため一括して扱う。「J」字文を主文様とする一群であるが、堀ノ内1式(古)の可能性のあるものも含む (572・574)。なお575は中期末の可能性もあり、今後の検討が必要である。いずれも深鉢である。

茂沢類型の土器 (523・525・530・538・623・640・641・703・704・734・738)

称名寺式土器の最終末のもので堀ノ内1式土器直前の土器群であり、北佐久郡軽井沢町茂沢南石堂5群土器をもって呼ばれる(鈴木1999)。頭部のくびれる深鉢で、波状の口縁に4ないし2単位の環状や「C」字状の把手(突起)がつくもの (523・525・530・538・703) などが挙げられよう。なお口縁突起に大型の円形刺突を三角形状に配したり (704)、深い円文と円形刺突文を描くもの (623) や、頸部に深い沈線と円形刺突文をもつもの (734) もある。

口縁に沿って並列させた深鉢 (640・641) も茂沢類型としてあげられようか。いずれも文様は深く施文され、明褐色の明るい色調で焼成の良いものが多い。

## 8. 後期前葉の土器

堀ノ内1式土器 (第39~41・43・44図)

堀ノ内1式土器も最近では5段階または3段階に分けるなど細分化が進んでいるが、ここでは一括して扱い、必要に応じて新旧に分れる。また、地域性の研究もめざましいものがあるが、明らかに他地域の土器と思われるもの以外はその指摘にとどめるだけとした。

深鉢 A (565・588・591・616~618・620・629・630・632・635~637・642~644・647~649・779) 茂沢類型に系譜がたどれるものも含めて、口縁部から頭部にかけて文様のない深鉢であり、出土量は多い。ただ、破片のため、深鉢Bと識別できないものもある。口縁部の文様帯にはaとbがある。口縁部文様帶aは多くが4単位の波状口縁で「く」の字形に鋭く折れ、突起部に描く渦巻文や円文を軸に左右に一条の沈線をめぐらし、屈曲部には斜行刻目文を連続して施している (616~618・620・629・630)。口縁部文様帶bは屈曲部の斜行刻目文を欠き、紐線を垂下するもの (591・636・647) である。退化した文様帶と内文の存在から、堀ノ内1式土器の中で

も新しいものであろう。

**深鉢B** (583~585・619・622・633・634・646) 頭部にも文様帶のある一群である。小片のため胴部文様帶は不明のものが多く深鉢Cの口縁部も一部含んでいる可能性はある（例えば583~585）がここへ含ませた。繩文は充填繩文であり、内文もみられる（633・634・646）。

**深鉢の頭部と胴部文様 満巻文** (603~609・611)、円文 (610) 懸垂文 (613) 弧線文 (612・614・615)などを描く。これらは浅鉢の胴部文様でもある。また紐線文を頭部に持つもの（592・593・597・598・601）は深鉢Aで堀ノ内1式の中段階以降であろうし、紐線による垂下文の602もほぼ同様であろう。

「ハ」の字文または大形の列点文を口縁部文様とする深鉢（586・587・624・638・639） 破片のため器形、文様構成は不明である。「く」の字口縁の深鉢A（586・587・638）と深鉢B（624）が予想される。624は「ハ」の字の間に太い沈線がある。中野市栗林遺跡や信濃川流域の遺跡に類例があり、越後との係わりが考えられる。639の三角形状の列点文もまた越後系の深鉢であろう（田中2002）。

繩文のみの「く」の字口縁の深鉢（589・590） 斜繩文を口縁部に、胴部には方向を変え、羽状とした土器で2点がある。後期前半と思われるが型式は不明である。

**隆線文をもつ深鉢** (578・579) 山形頂部に円形刺突を入れ、刻み目のない隆線を「8」の字貼付文に垂下させた波状口縁の深鉢（578）と、口縁に平行した隆帯に小さな橋状突起を貼付した（579）がある。前者は堀ノ内1式でも古い段階のものであり、後者の型式は不明である。

**浅鉢** (522・594・595・599・625・626・738) 522は既出資料である。口径22器高12.8cmの口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、平底である。約3割を欠損する。口縁部に1条の太い沈線をめぐらし、その下に起点とした円文の下に満巻文を4単位描き、そこから、近接して描いた三角形文にそって弧線を連続させて、胴部文様帶としている。満巻文は上から下へと、横方向へは反時計まわりに描く。三角形文もまた垂線をついで右方向と長辺は右上がりに下から上へと描く。しかし、三角形文を描いた後に満巻文から派生させた弧線文を描くか、後から三角形文を充填するか、施文手順は不明である。繩文は斜繩文（LR）を充填したものである。胎土には流紋岩の小片を混入させている。

594も波状口縁の半球状の浅鉢で渦巻弧線文に刻目文を描く。この他、内傾または直立ぎみの口縁部が屈折する浅鉢がある（625・626・738）。恐らく4単位の波状口縁の浅鉢であろう。類例は少ないが、小諸市石神遺跡（花岡・綿田1994）や岡谷市栗久保遺跡（会田他1986）に類例がある。口縁部文様帶は円形列点文で充たした梢円並列文を描く。北村遺跡に同様の文様をもつ例があるが器形は異なる（平林他1993）。なお599や屈曲部に低い隙帶で梢円文を描き、その上に列点文を施す595はむしろ深鉢かも知れない。

#### 堀ノ内2式土器（第37・39・42・43・45~47図）

**紐線文をもつ深鉢** 口縁に1条（732）あるいは2ないし3条の紐線文をもちおそらく4単位の突起部を持つ、波状口縁のもの（534・535・557・650・668・669~672・709・732）と平口縁（542）がある。内文の発達が著しく、中心文様に刺突文を書き左右に描く3本の沈線のうちの中央沈線を刺突の所で「ハ」の字状に止めているもの（542）や、中心文様に重渦巻文を書き左右に梢円文と思われるもの（650）や複合鋸歯文（659）を描く。また、内外面とも同一意匠で描く場合もある。557は中心文様に重平円文を、左右に梢円文を描き、外面のみ中心文から「8」の字貼付文を2個連続で3条の紐線文を結んでいる。666の7条の集合線を内文とするものは集石下層出土の236・237と同一であろう。656・657も同一の文様構成をとるものと思われる。また中心文様に4個の刺突文を四方向に描き、それらを結んで五角形とした中を2重円文で充填するもの（651）や逆「S」字文を小突起（668・702・705・706・709）として、逆「S」字文や梢円文を粘土に貼り付けて陽刻風としたもの（668）

や「8」の字陰刻文(670)などがある。全体に小片のため十分に文様構成は明らかとしない。

紐線のうち、幅が狭く微隆起線状で細かな刻目をつけるもの(668~674・676~678・709)はその紐線が多条化し、そのうえ「8」の字貼付文が小さく、貼付するというよりも2点を刺突することで「8」の字を表現したり(531・670~673)、円文を上下2個付す(668)など省略化が著しく、本来の「8」の字貼付文から逸脱している。紐線文を一条廻らし、退化した「S」字貼付文や「8」の字貼付文を口縁端部に付し、内外面に2本の平行沈線で描く区画内に充填紐文を描く例は、紐線文の刺突か円形で小さく(535)、これらも上記と同様、細かな紐線(細紐線)の仲間に属するものと云える。後者のうち、535は口縁部に縱区画の貼付文は見られず、口縁端部に恐らく4単位の2個1対の「の」字くずれの突起と「8」の字小貼付文がつき充填紐文は無節である。これらは2式でも最終末に近く、別項で再度ふれる。

胴部文様の分かれる例は少ない。半口縁の深鉢Bでは紐線文の下の胴部上半に2本一単位の充填紐文帯の区画横帯間に、偏行渦巻文と半円文からなる文様構成がある(542)。また、区画横帯を設けずに、それと連続して文様構成とする557・665がある。また、沈線で区画された充填紐文帯で弧線文(682・683・686・688・689・690・731・735)や三角形文などの幾何文(680・681・684・685・691・692)などが描かれる胴部は、一部は後述の紐線文のないものもあるが、多くが紐線文を持つ深鉢の胴部であろう。小片のためはっきりしないものもあるが多くは長野市村東山手遺跡の堀ノ内2式中段階とされたものに類例が求められる(阿部1999)。また、充填紐文帯の区画内にヘラミガキの重三角形文(691~693・695)重台形文(694)重菱形文(696)などをみたす文様構成も村東山手遺跡等の堀ノ内2式土器に多く認められるところであろう。尚、692は底部屈曲の深鉢である。

紐線文をもたない深鉢 充填紐文で埋められた数条の平行沈線を口縁にそって2段廻らす深鉢BまたはCは一定量があり、充填紐文区画帯で幾何学文(679)を描く。胴部は渦文(735)や幹状文(729・736)などがあるが、前者の深鉢の胴部文様の可能性もある。

注口土器 出土量が少ないうえ、器形の判るものは少ない。短頭で双耳(528・533)、無頭で双耳(529・758)の注口土器がある。胴部文様は最大径より上部に、渦巻文、雷文、格円文などを単位文とした文様構成としている。中には粘土帯を貼り付け、その両側を沈線で描いた低い隆帯を用いて区画線(帯)としている(555・757)。それらは胴部最大径に1条の隆帯を横区画とし、一定間隔をあけて、横区画に直交して、3個の渦巻文を連続して(縦連続渦巻文)描いて縱区画としている。縱区画内の空間は隆帯で描いた格円文を3個連続して描く縦連続格円区画文と縱区画の格円文にそわせた沈線区画文を交互に配置している。破片のためはっきりしないが、おそらく区画は6区画と思われる。区画内の充填文は細い刺突文で区画線にそわせるとともにそれらの内部を縦横に配している。この刺突文が描く文様構成は不明である。尚、格円文および横帯上には斜縞文が施し、横帯文下部にも沈線文があるが、これも細片のため不明である。外外面とも黄黒色で内面は丁寧にミガいでいる。胎土は黄白色で白色細粒を多量に含む精製土器である。細い刺突文で描く細刺突文とも呼ぶべき文様は類例は知らないが、特異な文様である。系譜も含めて今後の検討課題である。重圓文と雷文(560)、渦文と弧線文(561・752)は堀ノ内2式新段階の注口土器としては、湯倉洞窟(綿田2001)に類例がある。黒褐色から明褐色の精製土器で内面も丁寧にヘラでナデる(560)かミガいでいる(561)。胴部上半部はおそらく、横描条線文が描かれるであろう(741・750)。これら以外に短頭で無文の注口土器(550)がある。外外面ともこきざみなヘラでミガいた精製土器で黄褐色である。

浅鉢(842・843・853) 口縁内面に4条の沈線と弧線文を持つもので、外表面は丁寧にミガく。いずれも黒色の精製土器である。堀ノ内2式新段階であろう。853は口縁部欠損のためはっきりしない。あるいは深鉢とすべきかも知れない。2条の細い紐線文と沈線で外表面を飾り、内面に深い沈線がある。

**粗製・半粗製土器** 粗製土器の大半は無文深鉢上器であり、後期初頭から現われると云われる（綿田2001）。しかし現状では無文土器は型式として分離ができないため、別項でまとめ、ここでは有文の半粗製土器について述べる。

沈線文土器は口縁部に2ないし数条の集合沈線、内面に多くは1ないし2条の沈線を持つ一群であり（564・790・791）、集合沈線帯に充填繩文を付加したものとがある（564・793）。内外面ともにヘラでナデて仕上げ（564）たり、外間にケズリを横方向に入れたものもある（793）。

繩文のみの深鉢（838・839）は、斜繩文を外面に内面に1条の沈線を入れた、粗製土器とされるもので、量は少ない。

#### 石神類型の土器（第38・39・43～45図）

包含層出土の後期の土器の中で出土量は整理範囲に2箱程度で決して多くはない。しかし、薄手で黒色研磨された精製土器が大半を占めるだけに存在感はある。

深鉢B（553・711）と深鉢C（543～546・551・558・708・710・712～722・725・727・728・730・775・786・787・792・794・797・816）があり、546はあるいは前者であろうか。単位文は条線文、連鎖状文、結紐文、半円文、重圓文、渦巻文等があり、これらが組合わされた文様構成で飾られるが、深鉢BとCでの文様の使いわけはなさそうである。

深鉢B（553・711）は4単位の波状口縁で、口径に比較して器高が低く浅鉢に近い。口縁から胴部上半までは1本単位の「S」字連鎖状文を上に描いて区画した中を条線文で埋める。つまり2段の文様帯を描くが上段の条線文では口縁突起の下方に中心文とした重半円文を描いている。胴部文様帯は「S」字連鎖状文間に4本単位の斜行櫛描条線文を左まわりに埋めている。「S」字連鎖状文は1条の沈線を上に入れ、それにそって左まわりに描くが上位文様帯の下方の「S」字連鎖状文の下の沈線は省かれている。内面文様は2本を密に1本をやや離して描く。全面ヘラでミガイタ黒色精製土器である。

深鉢Cは横位の「S」字連鎖状文をもつA類（543・544・558・710・712～722・728）とないB類（551・708・725・727・730・789・795）がある。A類は充填繩文条線文を2本単位の「S」字連鎖状文で区画し口縁部文様帯としたもの（543・544・558・713）と、充填繩文条線文を欠き、沈線または条線文と「S」字連鎖状文とを組合させて口縁部文様帯としたもの（710・712・714～722）がある。胴部では充填繩文された2本沈線による上下の区画内に同じく充填繩文された横走連続渦巻文を唐草文風に描く（543・544）か、縱位の「S」字連鎖状文の区画内に2重の重圓文を描く（558）。「S」字連鎖状文は3本の、重圓文は沈線が8本で、おそらく4本単位の櫛を使用したと思われるが確定できない。なお、544の充填繩文は無節繩文（L）である。口縁部に充填繩文条線文を欠く深鉢は沈線文と「S」字連鎖状文との組合せ文を口縁部文様帯としているが、胴部に「十」字状結紐文をもつもの（717・718）以外は細片のため不明である。「S」字連鎖状文は1本または2本あるが、沈線と組合せて多段に渡る場合には使い分けがみられる（716）。また櫛描条線文との組合せでは1本としている（710・722）。

口縁部に繩文条線文、胴部に枠状文と「S」字連鎖状文を描くものもある（728）。ここでも「S」字状結紐文は区画帯として用いられている。

B類の深鉢Cは、A類と同様に口縁部文様帯は充填繩文条線文（551・725・727・730）と多条化した糸線文（708）とがあり、胴部は結紐文や「十」字状結紐文で飾る（551・759）。胴部下半ははっきりしないが、縱位の連鎖状文（545）や円文を「S」字連鎖状文で結ぶ土器（546）が候補となろう。

ただし、これらには胴部文様として「S」字連鎖状文が来ないという保証はない。

789は795と同一個体で、頸部でわずかにくびれる深鉢Cである。7本1単位の充填縄文条線文を少なくとも3段は組み、それらを縦位の「S」字連鎖状文で切る文様帯を持つもので、胴下半には幾何学文が予想され、横位の「S」字連鎖状文は欠く。

また、波状口縁の深鉢で縦位の「S」字連鎖状文を中心文様として左右に4条の沈線と縄文で横帯文をめぐらし、以下無文帯を経て胴部中位で同様の文様帯がくると思われる1群がある(775・786・787)。破片のため定かではないが、縄文帯を持たず数条の平行沈線からおそらく縦位の「S」字連鎖状文を垂下する(792・794)か縄文帯の中に平行沈線と縦位「S」字連鎖状文を垂下させたもの(797)もこれらに含ませてよい。

石神類型の深鉢は口縁端部の調整もかなり齐一性がある。おそらく2ないし4単位の突起または小突起を持ち退化した「8」の字小突起(543・544・551・708・715・725)がつけられ、端部に刻目を付すものもある(544・710・719)。「8」の字小突起は2個を連続したり(543・544)して、刻目とともに新たな意匠としている。底部は網代底で、胴部との接点は鋭い(545・551)。

なお、816は内文が発達し、刻目条縄文に加えて「S」字連鎖状文がある。浅鉢かもしれない。

## 9. 後期中葉の土器

精製土器には区切り文、逆「の」の字文・斜行短線文をもつ深鉢、浅鉢と注口土器があり、粗製または半粗製の深鉢がある。いわゆる加曾利B1式土器の一群である。ただし、石神類型の文様を持つ注口土器は、山内清男氏以来加曾利B1式土器の注口土器とされてきた(山内1967)。別項で問題点として指摘するが、ここではB1式として括して述べる。

### 加曾利B1式土器(第37~39・44・45・47図)

深鉢(554・760・763・764・769・770・772・782) 区切り文を持つものは、量は少ない。区切り文はA・B・CとDがある。区切り文A(554・760・763)は左から右へ階段上に連続して描くもので、石神類型の「S」字連鎖状文の描きかたと共通する。Aには右から左へと時計まわりの例もあるが、これらは手の運転に従えば、土器製作者は左向きとなる(佐原1974)。区切りBは上下の平行沈線を斜行短線で区切って結ぶものである(769・770)。Aの省略型で型式的にはAより後出的である。769には逆「の」の字文が区切り文の上に付加されている。563は注口土器と思われるもので、前例とは逆に区切り文の下に逆「の」の字文がつけられる。区切り文CはAと同様に左まわりに階段状に描くが、上下の沈線を区画とする意識が欠如したものである。782は階段状とはするものの、曲線化をしている。区切り文Dは平行沈線を区切り手法で結ぶものの階段状とならないもので、区切りの始点と終点に円文を付している(772)。区切り文を持つ深鉢は内文の発達が著しく、口縁端部が嘴状に尖り、内面沈線内に椭円列点文が付加される場合が多く(763・769・770)、後述の浅鉢と共通する。小片のためはっきりしないが764もこの類であろうか。

口縁端部が小さく内傾し嘴状で内文の発達した深鉢(762・764・766・768・771・774・776・788・806・817・818)は小片のため胴部文様が不明であるが、口縁端部と内文の発達程度から加曾利B1土器とした。椭円列点文(764・771)を内文沈線内に、また、端部に刻目(817・818)がある。区切り文と沈線を入れ子状としたり(768)、外面を無文とし内面に堀ノ内2式土器の内文と共通する椭円文を配している(766)。前型式より内文が簡素化されている点からB1土器としたほうがよいと思われる。同様の内文は774にあるが外面に対弧文状の文様がある。この他、788は波状口縁の深鉢で、内外面に3条の沈線を配し波頂部には刻目を入れ、さらに隆起線を向き合わせに貼り付けている。806もこの類であろう。

斜線文(537・796・807~810)は2条の沈線間に右下がり(796・809)、左下がり(537・807・808)と上下の

沈線を欠き斜線文のみのもの（810）がある。深鉢の胴部文様であろうが類例も少なくはっきりしない。537の胴部文様は壠ノ内2式的な三角形文を基調とした幾何文で充填縦文される。石神類型の基準とされる、小諸市石神J19号住居址や加曾利B2式とされる羽状沈線文上器の中に散見する程度である（小林・百瀬1981、百瀬1996a・b）。

552は4単位の波状口縁で、波頂部に「S」字状小突起をつけ、「8」の字貼付文の名残である円形刺突文を基準文として6条の条線を左まわりに描き、刺突文下に半円を付している。加曾利B1としたが今後の課題である。

浅鉢（812・814・815・819・845～852・854）　浅鉢としたが一部に深鉢もありうる。浅鉢も含む精製深鉢形土器の口縁端部は内文の発達段階に応じて変化する。端部が丸まるものから、端部外部が内傾した嘴状の断面形と変遷する（秋川1996b）。①端部が丸まるもの（812・814・815）、②小さな面をもって内傾する（845・846・849～851）、③大きな面で内傾する（819・847・848）などがある。①には端部内面に刻目を、その下に4条の沈線を施し、4条の平行沈線の中央に深い刻目を施しているもの（812）と、端部に深い沈線を以下4条の平行沈線を施ししその最上段に刻目を施している（814・815）。なお、815は黒色でヘラミガキされている。②は内面の沈線間に3条に刻目（845）があるほかは口縁直下の沈線文に列点文（846・850・851）、端部に列点文（850・851）がある。また846は外面に4条の沈線と充填縦文帯がある。③は外面に1段の横文帯と2条の沈線からなる文様帯をもって端部に刻目がある（848）。819は端部に刻目、沈線内に列点文を、848は内文の沈線のみである。

以上の他に852・854は口縁部を欠損する胴部上半の破片で、沈線区画による縦文帯を外面に、内文に刻目が加えられている。また、854の内文は沈線間に斜縦文を充填している。

注口土器（547～549・559・562・563・566・567・723・724・739・740・742・744・746～748・753・755・756）　先述した区切文を持つ（563）ものと石神類型を特徴づける「S」字連鎖状文や結縫文を施した2種がある。後者は加曾利B1式の注口上器の典型（山内1967）とされて以来今日に至っている。562は胴部上半に逆「の」の字文の付加された「S」字連鎖状文と、太い沈線で三角形状に区画された内部を構成線文で埋めている。注口部のうち559は無文、566は「十」字状結縫文である。567は文様が不鮮明であるが、566と同様であろう。566は剥離痕があり、胴部へ貼り付けてあったものであろう。胴部との接着部は下部から上部にかけて右まわりに粘土紐を巻き上げた痕跡が明瞭に残る。また、注口上部でも凹の偽口縁が一層するところから注口端部はさらに粘土を添えて形成したものであろう。一方、559・567は円筒の表面に粘土を盛った痕跡が明瞭である所からあらかじめ作成しておいた円筒ソケットを胴部上半に差し込んだのち、粘土を盛って胴部との接着をおこない、さらに円筒の上に粘土を加えて、注口を完成させている。以上2点から注口部の接合に2種あった可能性がある。湯倉洞窟では壠ノ内2式土器の注口はこのソケット式である（総田2001）。549・755・756は底部である。また、547・548は黒色研磨された小型の注口土器である。注口土器に見る「石神類型」の文様は「S」字連鎖状文としては、1本施文が多く、「石神類型」より後出的とも見られるが、小片のため定かではない。

## 10. 無文土器

粗製土器としての無文土器の出現は後期になってからと云われる。小玉遺跡の後期土器は初頭から中葉までであるところから、ここで云う無文土器はこれらの時期にほぼ、あてはまるものである。後期無文土器は総田氏が指摘するとおり形態上の変化とともに器面調整の相違によって、細分が可能であろう（総田2001）が、それら機能面の追求や編年研究まで高められるかは今後の課題として残されている。

調整はヘラまたはユビによって、ミガキ、ケズリ、ナデがあり、縱・横または斜め方向とおこなっている。ヘラケズリのうちにミガクもの（824）もあるが大半は一次的な調整にとどまっている。また、内外面とも同一の

調整と異なる場合があるが、前者が多い。内外面ケズリ（820）、外面ケズリのちミガキ（821）、またはケズリのまま（835）、内面ケズリ（823・827）とケズリ手法は以外に少ない。ミガキも内外面（821・832）は少なく、外面ミガキ（823・827・829）が多い。またユビナデは内外面（834）、内面（826）とこれも多くはない。ヘラナデは内外面（821・825・831）は少なく、外面（828）内面（825・829・831）と比較的多い。ただし、これは調整の最終段階を示すにすぎず、オサエなどの初期調整はほとんど表面に痕跡は残さないのが一般的である。

器形は直統的に底部から口縁にかけて立ち上がる平口縁の深鉢が一般的であるが、波状口縁の深鉢もある。頂部に刺突文を持つ深鉢（828）や突起を持つもの（832）は内面に1条の沈線を入れるが、ないもの（827・829）もある。口縁部が内湾しながら立ち上がる例もある（826・830・831）が、830は中期の可能性もある。また口縁端部が短く内屈し平底となる（837・838）ものは堀ノ内1土器であろう。825は焼成後の穿孔が口縁部にある。全体に小破片が多く、細部は不明である。

### 11. 越後系の土器（第47図）

越後と北信とは千曲川一信濃川と烏居川一関川で旧石器時代以来人々の往来があり文化・物流の主要なルートであった。縄文時代後期も同様で土器にもその痕跡が著しい（田中1989）。後期初頭とされる刺突文を最大の特徴とする三十稻場式土器や前葉の南三十稻場式土器（品出2002）が北信地方中心に分布することはそのあらわれである。しかし、残念ながら、信州備のこれら越後系またはその影響を受けた土器の検討は皆無に等しい点も事実として受けとめなければならない。

#### 三十稻場式土器（855～861・886～896）

刺突文または刺穴列点文を器面に横方向にぎっしりと施した文様モチーフを主とする一群である。細片が多く器形の分かることは少ない。886は肩部に刻目のある凸帯の付く典型的な三十稻場式土器の小型の深鉢で、硬く焼められている。

#### 南三十稻場式土器（871・882・884・897・898）

ほぼ確実に三十稻場式土器に統くものである。もともと堀ノ内式土器と南三十稻場式土器とは互いに影響関係にあり、北信地方においても、例えば中野市栗林遺跡の堀ノ内式土器とされるもの（中島・岡村他1994）でも、この点が指摘できる。いわゆる列点文を持つ土器の一群（862～881）がそれである。白灰色で焼成が極めて良く、北信地方と明らかに胎土の異なるもの（867・889・897）は三十稻場式や南三十稻場式土器にしばしば認められる所であり明らかに越後からの搬入土器であり、今後の検討が望まれる。

### 12. 北陸系の土器（第5図）

北陸系の土器には後期前葉の気屋式土器がある（米沢1989）。僅か3点の出土であるが、今後注意すれば資料は確実に増加するものと思われる。太いヘラ抜きの波状沈線を1ないし2条抜き、縄文充填している。胎土は白色粒を少量含み焼成は良い。

### 13. 彩色土器・器台・ミニチュア土器（第48図）

赤彩土器（899～901）と黒色の塗料を塗装したと思われる土器（903）がある。前者は恐らくベンガラを塗装したものと思われる。いずれも中期後葉IV期の土器である。899は低く粘土組を貼り付け、ヘラで丁寧にミガイした赤色顔料で塗装したもので器面に部分的に残っている。無頸壺型の注口土器かとも思われる。類似は原代遺跡群SB5319に1例がある（水沢2000）。SB1炉周辺からの出土でSB1出土品の一部かとも思われる。900は

口縁内面にミガキのうちに赤色顔料が付着したもので、SQ1出土である。901は加曾利EⅢ式系の深鉢の口縁部内面に縱方向のヘラミガキされ、赤色顔料と炭素が吸着している。包含層出土の903は加曾利E式系土器の内面に油煙状の炭素が二重に吸着されている。黒色部分には濃淡があり特に筋状部分は濃い。人為的か自然に炭素が吸着されたものははっきりしない。

器台（905・906・910～912）は中期後葉の器台で、焼成前の円孔のあるもの（906・910）と斜繩文（905）沈線文（911）をもつものなどがあるが小片のため器形は定かではない。

ミニチュア土器（902・904・907～909・913）は後期のもので、深鉢（902・904・907・908）蓋（909・913）がある。902には連弧文、909は櫛で集合沈線を描いている。いずれもユビオサエの痕跡が著しく、手づくね土器である。913は蓋で紐に円孔透かしがある。口径6.5cmで、ヘラで丁寧にミガイしている。ミニチュア土器というよりも小型土器の蓋とすべきであろう。



第5図 北陸系後期土器（1：3）

#### 14. 繩文土器底部（第50・51図）

繩文中期後葉、後期前葉の出土した土器底部314点のうち、網代底を中心とし木葉痕など整形に特徴のある底部は網代底が232点、木葉痕2点、跑状工具ナデ痕1点、網代痕と木葉痕が重複しているもの1点、無文が69点であり、なんらかの圧痕が残るもののが全体の78%を占める。時期別にみた圧痕の種類は中期66%、後期92%と圧倒的に多いのが網代編みの圧痕である。また無文底部については後期になると8%と非常に少なくなる。

網代の編み方について観察した。圧痕が不鮮明であったり、小破片であったりするため、編み方のわかる物は132点である。編み方を絆の糸（たて糸）に対する縫の糸（よこ糸）の超えともぐりの数、縫の糸（よこ糸）の送りによって分類した。（須賀1997）

A 2本越え1本もぐり1本送り 102点 77%	C 3本越え2本もぐり1本送り 2点 2%
B 2本越え2本もぐり1本送り 3点 2%	D 1本越え1本もぐり1本送り 25点 19%

A（第50図）996～1001は中期深鉢、1002・1003・1006は後期精製土器である。集石SH1出土の1010と1011は絆と縫の原体の種類が違い、幅が異なる。この2本越え1本もぐり1本送りの編み方は全体の77%を占め圧倒的に多い。長野市村東山手遺跡の後期住居址（阿部他1999）、高山村湯倉洞窟（総田2001）の資料も同じ傾向を示している。B（第51図）は全体で3点確認できた。1030・1033は中期深鉢であり、1033は2本一組の原体で編んである。Cは2点確認できた。D（第51図）1017～1020・1023・1032・1035・1038は後期精製土器であり、原体の幅が細い。1017・1026・1029は絆と縫の原体の種類が違い幅が異なる。1035は後期精製土器であり、底部周縁部のナデにより網代痕が消されている。この例は全体で8点あるがすべて後期土器である。網代痕以外では木葉痕（1032・1036）が3点出土している。1点のみの出上であるが、1032は網代編みと木葉痕が重複しており、網代痕が先に、木葉痕が後についている。網代編みの原体は断面が丸く細い。後期精製土器である。1036は中期の深鉢である。1037は箋状工具によりナデ調整され、工具痕が残る。中期深鉢である。1034は中心線が浅く不均一であるため、原体が2本のようにみえるが1本が割っているものと判断した。1038・1039は原体を2本一組にし

て編んでいる。

原体の幅を158点につき計測すると1mm以下が18点、2~3mm 122点、4~4.5mm 16点、5mm以上が2点となつた。2mm以上は扁平な角張ったものが9割であり、1mm以下は植物のつる状の断面の丸い原体である。植物の繊維が筋状に確認できるものもあるがそれぞれの植物の特定はできない。時代による相異はないが、重量のある中期深鉢、後期粗製土器は広い原体を用い、後期精製土器は細い原体が多い。

観察対象の土器は、胴部を欠いた底部破片のため、またほとんどが中期、後期が混在している遺物包含層第IV層からの出土のため、時代の正確な分類は困難で、誤認しているものもあるとおもう。

今回は時期、器種の違い、原体の植物の種類など検討が不十分である。また、観察資料の時期細分も含め、網代の時間的変遷や他遺跡との比較検討を加えるとともに、何故縄文時代中期後葉から網代底が多いのか、その時代的背景も含めて今後考えてゆきたい。

### 15. 土偶（第48図 600・915~920）

頭部片1、肩部片1、腕部片2、脚部片3の総数7点出土している。遺構に伴っての出土は917のみで、他は出土位置を特定できない包含層からの出土である。

915は円筒形中実の右脚部であり、足先が欠損し、O脚である。縱方向にヘラミガキされ、正面、背面とも縦に沈線が施されている。現存長7.4cm 直径2.8cm 重さ76gである。916は脚部下方で足首は沈線で表現されている。指押さえ痕が残る。長さ3.5cm、直径2cm、重さ19gを測る。917は頭部と腕を欠く中実土偶の胴部であり、脚部は不明である。石錐SH2の線石脇から出土している。全体に黒色研磨の土器と同様に煤を吸着させ丁寧にヘラミガキしている。正面、首から下に沈線により正中線が描かれ、乳房は沈線で画されているが剥落している。背面も沈線で「S」字連鎖状文が施されている。中実で粘土の芯材がわかる。器面調整と背面文様から石神類型に伴なう時期のものであろう。長さ7.8cm、幅6.1cm、厚さ1.7cmを測る。918も中実土偶であり安定を必要とする大型の立像形全身像と考えられ後期の土偶の断面が四角形の右脚部片である。前面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。上端、下端に横方向に沈線で画し、細かい縦文を充填している。上端は欠落しているが斜めハの字状に沈線が見える。施文は丁寧である。背面は、表面が粘土芯材との接合面から剥離している。内側はヘラナデ、ヘラミガキされてはいるが正面より難であり、施文もない。現存長さ9.2cm、幅および厚さは4×3.2cm、重さは147g ですっしりと重い。ほかの脚部の重さは残存部分だけではあるが、915が76g、916が19gと残存部分の大きさに違いはあるものの、かなりの差がある。920は腕部片である。正面、背面とも沈線で施文され乳房が張り出している。中期後半の中実土偶である。600は頭部顔面で後頭部は剥離している。Y字状の隆帯に刺突し組紐文として眉と鼻を表現し、目をつり上げ、口は丸く穿孔している。堀ノ内2式期の土偶である。

この他、中期前葉の土製品（914）がある。土偶の腕部とも思われるがはっきりしない。

また、大正11年（1922）に小玉の土中より発掘された土偶がある（信濃教育会上水内部会1924）。確かな出土地点はわからないが、いずれにしても小玉遺跡のうちである。資料は現存していないが、掲載された写真によると頭部と脚部を欠く。首から腕には沈線による渦巻文、胴部正面には正中線を境に左右対称に「コ」の字状の施文がある。乳房は剥落している。縄文中期の土偶である（小柳1992）。背面については不明である。

### 16. 土製円板（第49図・表7）

921~955の35点出土した。土器片を再調整して土製円板としたもので、使用土器の時期は縄文時代中期18点、縄文時代後期17点である。破片の調整方法の相異から以下の3種類がある。A類一破片を打欠き、その後に周囲

を擦って成形。B類一打ち欠いた後、一部分のみ擦る。C類一打欠きのみ。法量は1.9cm、2.8g (955) から大は6.2cm、41.8g (948) である。

A類 (921~925) は5点のうち中期上器片 (922・923) 2点、後期土器片 (921・924・925) 3点である。それぞれ周囲を丁寧に擦って、形を円形に整えてある。

B類 (926~934) 9点のうち中期土器片 (926~928、933・934) 5点である。926は周囲3分の2を擦っている。外側は化粧土を施し赤色である。927は周囲3分の1のみ擦ってあり、成形途中であろうか。928はほぼ全周円形に整えられている。特に4分の1は丁寧に擦ってある。933は5分の1ほど、934は細かく打ち欠き円形に整えているが周囲は一部分のそれぞれ擦りである。後期土器片 (929~932) は4点ある。929は5.3×4.7cm、29.4gと大きく、不定円形である。930は壺ノ内2式土器片で、外形は逆台形であり、成形は大変丁寧である。931は1.2cmと厚い土器で壺ノ内1式の土器利用である。932は加曾利B1式土器で崩辺の成形は丁寧である。

C類 (935~955) 21点のうち中期上器 (935・936・938~942・944・946・947) の10点、後期土器 (937・943・945・948~955) は11点である。943は無筋の繩文を施した後期破片を利用し厚さ0.6cmと薄い。成形は丁寧である。947も成形は丁寧である。948は6.2×5.4cmの四角形で壺ノ内1式土器を利用している。950は壺ノ内1式土器を利用している。黒褐色、砂質で全周を丁寧に打ち欠いて成形している。954・955は後期の精製土器利用で中央部に穿孔途中的孔がある。

遺構内出土は4例あるが必ずしも遺構の時期と土製円板の使用土器の年代とは一致しない。石組SH2 (953)、石組SH3 (921)、石組SH4 (940)、土坑SK9 (942) で各1点出土し、SK9を除く各遺構が後期の所産とすると、土製円板の使用土器と年代の相異がある。しかし、SH3、SH4は後期の土器の可能性もあり一概に矛盾とは云えないし、後期における中期上器の再利用もありえないことではないであろう。型式学検討や用途も含めてこれらは今後の課題である。

### 第3節 包含層出土の石器

#### 1. 包含層出土石器と遺構出土石器の様相 (第54~62図、表3~5)

遺跡の性格上出土した石器が多くが確実に遺構に伴う例は決して多くない。そのうえ一部器種を除いては、むしろ包含層出土の石器がはるかに遺構内出土よりも多い。例えば石鎚に至っては95パーセントが遺構外である。これは豊穴住居の残り方が良好でないうえに石組・集石群の構築という遺跡の性格がある。したがって、本来であれば別稿で論ずるべきであろうが、包含層出土石器とともに本遺跡の石器の概略についてまとめておきたい。尚、各遺構ごとの石器については別稿で説明を加えてある。

##### 石鎚 (1~34)

佐原真氏の分類に順じた (佐原1964) 諸訪市十二ノ后遺跡に従って (小池・宮沢他1976)、A型一凹基式、B型一平基式、C型一円基式、D型一凸基式、E型一尖基式とした。十二ノ后遺跡分類では縁辺や抉りとかえりの形などを細分の要素 (属性) としているが、ここでは省いた。全出土量は119点で、うち遺構内出土は7点である。内訳は上器集中箇所SQ1が1点(1)でA型、土坑SK3が1点A型、石組SH3が1点A型、集石SI9が2点でA・C型、SB1・集石下層の型式不明の小片2点である。A・B・C型は無茎石鎚で本遺跡出土石鎚の大多数を占め、D型は有茎石鎚で1点のみであり、E型も1点である(34)。完形品は僅かに剥離痕のあるほぼ完形も含めても29点で、全体の21%余りで、大部分は脚部を欠損(21%)か先端欠損(21%)または先端と脚部欠損(18%)などで欠損品が多い。

素材別ではチャート50点、黒曜石48点、無斑晶質安山岩3点その他である。

A型72(1~22)、B型22(23~33)、C型7点(24~26)で器種の分る全石器は98%を占める。近隣の後期前葉の遺跡と比較するとA~C型の占める比率は中野市栗林遺跡では全出土量128点のうち、無斑石器は124点で96.8%、長野市村東山手遺跡では84点中無斑石器は76点で90.4%である。栗林遺跡は中期後葉の、村東山手遺跡では早期末葉の遺跡と重複しているので、出土石器にこれらの時期のものも含んでいる。同様に小玉遺跡の石器もまた、中期後葉を中心とした中期全般にわたる石器も含んでいようが、土器の出土量と一般に中期の石器の出土量が少ないと合わせると、大半は後期のものとしてよい。したがって当地方の後期前葉の石器の大半は、無斑石器が主体であったことになる。このほか、未製品が3点ある。

#### 石匙

横型の2点がある。無斑晶質安山岩製は小型のつまみを持つ、縄文時代前期のものと思われる。チャート製はつまみ部分のみで他は欠損して不明。いずれも包含層出土である。

#### 搔器(37)

母指状の搔器であり、22点がある。チャート製が大半(19点)で他に硬質砂岩2点と黒曜石製2点である。チャート製はラフな剥離により、先端を母指状としたものである。このほか規則性に欠けるものも少数あるが、この中に含めた。遺構内では竪穴住居SB1から2点、土坑SK3と土器集中箇所SQ1から各1点の計4点である。

#### 削器(38)

17点がある。縁辺に剥離を加えて刃部としているが、搔器同様にチャート製は剥離が大きい。チャート13、頁岩3、黒曜石2点である。竪穴住居SB1から2点、石組SH6から1点で他は包含層出土である。

#### 石錐(39~43)

棒状(39~42)のA、幅広のつまみをもつB(43)と肩状の大柄のつまみに小さな錐部をもつCがある。Aは9点、Bは7点、Cは1点の合計17点である。素材は珪質凝灰岩、無斑晶質安山岩、黒曜石の各1点を除きチャートである。遺構別では竪穴住居SB1が2、石組SH6が1、集石SH9が1の計4点である。

#### 石槍形石器(35・36・76)

大型の石槍形石器である。5点出土した。36は剥片を利用し先端に加工を加えて槍先形としている。遺構に係わるものは土坑SK1の1点(76)である。

#### ビエス・エスキュー(44)

両側に打撃痕のある黒曜石製剥片で、縁辺に使用痕が認められる。9点あり包含層出土である。

#### 使用痕のある剥片(45・46)

19点ある。1点のみ珪質頁岩製で他は黒曜石製である。いずれも小剥片の縁辺の1ないし2個所に使用痕がある。土坑SK2から1点出土し、他は包含層出土である。

#### 打製石斧(47~74)

総数74点がある。うち、完形品は17点であるが、一部欠損するもほぼ型式が判断可能なものを含めると38点となる。短冊形をA型(47~51)、撥形をB型(52~59)、分鋸型をC型(60~65・68)、その他をD型(69・73・74)とすると、A型は14、B型は12、C型は9点、D型が3点である。

本体の欠損率が5割以下の石斧は34点で総数の46%に及ぶ。うち、刃部が欠損したもの(67・70)は11点、上部欠損(66)が13点、上、下端ともに欠損したもの(71)は10点である。欠損面は本体に対して直角に折れているものが多く、大部分が使用中に破損したことが伺える。使用痕は刃部に多く認められるが、正面とした面より

も背面の方が著しい。また、本体中央の両側にも緊縛による摩滅が認められる例が多く、これらは打製石斧の使用方法を示すものとしてよい。

素材別では凝灰岩質頁岩30点、ついで硬質砂岩26点で、他に凝灰岩9、頁岩5、粘板岩4点であり、全て堆積岩類である。

なお、打製石斧D型とした小型の石器(73・74)は、土掘具としての機能を考えるよりも、別の用途を考える方が妥当かもしれない。

遺構別では堅穴住居SB1から8点(48・67・71・72・74)ともっとも多く、SQ1付近で2点(47・58)石組SH1が1点(64)と集石SH9から1点、土坑SK3で2点、ピット1(66)、ピット23から各1点出土した。SB1の8点はA型でうち7点は欠損していた。

#### 横刃型打製石器(75)

横剥ぎされた剥片の縁刃に加工を加えたもので6点があるが、これらは必ずしも定型化していない。硬質砂岩4、凝灰岩質頁岩と粘板岩各1点で、打製石斧の素材と共通する。

#### 局部磨製石斧(77)

緑色凝灰岩の縦長の円錐を用いて、打ち割りながら短冊形に成形をし、縁辺及び正面の一部は敲打したのち軽く磨いているが、刃部は丁寧に斜位に磨いて両刃を作り出している。また背面は自然面を残し、一部を磨いている。1点のみである。

#### 磨製石斧(78・79・84~93)

いわゆる定角式磨製石斧で21点あり、うち閃綠岩(78)、緑色凝灰岩(89)、玢岩(91)を除いて純紋岩製である。定角式は側辺を平坦にして、身との接点を直角に仕上げているが、閃綠岩、玢岩と蛇紋岩製の1点(87)は丸みを帯びている。これらは擦り切り技法によらなかったからであろう。また、85は側辺と頂部と刃部の一部を敲打により再成形をしている。閃綠岩製の78の刃部も正・背面二方向から磨いて再整形している。完形品は少なく、身中央で折れたものが多い。

遺構別ではSB1が1(91)、SK2(95)、SK3、SK5(78)、SK7(79)各1点がある。

#### 小型磨製石斧(80~83・94~96)

小型(80・81・94~96)と極小(82・83)がある。後者は道具というよりも装飾品であろう。素材はいずれも蛇紋岩であるが、94は緑色凝灰岩製であり、側辺に敲打痕があり、先端の破損面にも磨き痕がある。破損後再整形を試みたものであろう。小標品もまた、中途破損例が多い。

#### 石冠(97)

硅化した硬質の凝灰岩製。石冠の先端部分のみである。全面を丁寧に磨き上げている。町内では茶磨山(旧茶臼山)遺跡で縄文時代晚期の石冠が2点出土している(森・島田1980)。

#### 不明石器(99・100)

小片のため器種ははっきりしない。正面の一部は剥離している。全体にラフに磨いている。99も器面を研磨した石製品の小片である。

#### 石製有孔円板(紡錘車)(98)

砂岩製素材を磨いて作っている。円孔は一方に偏している。

#### 凹石(101・103~127)

68点出土した。凹石は磨石や叩石と兼用される場合が多く、小玉遺跡でも同様であるが、明らかに兼用されたと思われるもの以外は下記の器種分類の中でそれらを示した。

凹石の器種分類は平面形、研磨や叩きによる成形の有無、凹の数を記号で組み合わせて示し、断面形は概略の形で示した。尚、器形成形以外の磨面または敲打面のあるもののみを磨石または叩き石の兼用とした。

「素材の加工の有無」

- A 自然礫を使用
- B 両端に叩痕または磨面
- C 側刃または全面に敲打または研磨

「平面形」

- I 石礫形
  - II 楕円形
  - III 円形
- IV 不定形  
V その他

「凹みの数」

片面	両面	3面以上
a 1個	d 1個ずつ	h
b 2個	e 1と2個	
c 3個以上	f 2個ずつ	
	g 3個以上	

総数68点のうち、半塊以上で型式分類のできないものを除くと、62点が検討の資料である。自然礫使用のA型は35点、叩痕または研磨痕のあるB型は24点、全面加工のC型は3点で、A型が半数を越える。B型のうち、叩き石兼用は4点(104)、磨石兼用は1点(119)であるが、B型の多くは叩痕が認められるのでそれらもまた叩き石としても使用されたものと思われる。平面形ではI(石礫形)3、II型(楕円形)36、III型(円形)8、IV型(不定形)20点で、圧倒的にII型が多い。

凹数は片面に1個または2個あるものは少なく(aは3例、bは4例)、両面に1個ずつ(d)はA型に16例あり最も多いが、B型では1例と少ない。このほか両面に1と2個(e)のものがA・B型とも4例ずつ、両面に2個ずつ(f)がA型で6、B型で3、3個以上(g)がA型で2、B型で8例である。一般に凹石は両面に同数の凹を配している場合が多く、小丘遺跡でも特に例外ではない。特に平面形が長楕円形状で長径が16cmを越える場合には3個以上の凹みを持ち、1ないし2個の凹みを持つものは当然のことながら、素材は小さい。また、断面三角形(121・122)または厚さのある凹石(125)とC型(101・126)では3面以上に凹みがあり、凹みが深い。

凹石の素材は角凹石を含む飯綱山産の安山岩礫であり、IV型は多孔質の安山岩である。このように凹数とそのあり方には素材と形態などと因果関係が認められるので、叩痕や研磨痕も含めてそれらの用途が決定されるであろう。

凹石の一部は出土状態について記録がある(第15図)。石組SH2から1点、石組SH3から3点(116)、石組SH4から1点、石組SH5から4点(114・121・125)、集石SH7から4点(104・115)であり、このほか石組、集石群からのものも含めると総計16点が出土したことになる。

また竪穴住居SB1から5点(123・127)、土坑SK5から2点(126)、SK6から1点(122)が出土している。蜂巣石(137~140)

径20cm前後の断面形が台形(139・140)または三角形(137・138)の不定形な塊石に多数の凹みのあるもので、安山岩製であり、総数は7点がある。前者は上下の平坦部分に凹みを多数穿ち、安定性がある。後者は平坦部と他2辺に凹みを持ち、不安定であるが、凹み部分を平坦にして使用する場合には下端を土中に固定すれば安定性が得られる。集石SH8から2点(137・140)出土している。2面に計23個(137)、3面に計130個(140)の凹みがある。なお、前者には凹みのある一部分に研磨痕がある。石組SH6のものは多孔質の安山岩製で2面に計41個の凹みがある(138)。竪穴住居SB1から2面29個、1面7個の凹みをもつ2点が出土している。研磨痕の

ある例は6地区出土例にもある。2面に計34個の凹みがある(139)。他に一部を欠損した蜂巣石があり、3面に70個以上の凹みがある。蜂巣石の年代は堅穴住居SB1・石組SH6・集石SH8から縄文時代中期後葉IV期から後期前葉と云うことができよう。ただし後期については造構の性格から中期のものを再利用したこととも考えられ、今後の課題である。

#### 磨石(102・132・133)・叩き石

安山岩製の比較的薄手の円錐の平坦部に研磨痕が見られる一群である。8点認められる。あるいは砥石かもしれない。叩き石は凹石以外に明晰な叩きの痕跡のあるもので4点に認められた。

#### 石皿(135・141~143)

石組SH6出土の小型石皿(135)と、通常の石皿が堅穴住居SB1の石器炉に接して1点(141)、石組SH1から2点(142・143)出土した。142は石組の一部を構成していた。143は半壊し取り出し口側が残存、石皿面に凹みが6個ある。石皿破損後に凹石に転用されたものである。尚、135・141の取り出し口は上端に、142は下端にある。

#### 石棒(128~131)

いずれも破片である。有頭石棒(128・129)のうち、128は有頭部で、堅穴住居SB1出土であり、蛇紋岩製、129は白雲母片岩でいずれも大北地方産の素材を用いた縄文時代中期後葉のものであろう。131は安山岩製で断面三角形、各面に縱方向の不規則な沈線が数条認められる。砥石を兼ねた中期後半の石棒としておく。130は断面円形に研磨によって成形した後期前葉の石棒片である。安山岩製。

#### 砥石(134)

3点がある。1点は断面三角形の携帯用砥石で、5面の砥面がある。古代のものであろう。また、小片のため定かでないが、凹状の磨面がある。小型の石皿かもしれない。134は板状の軟質の砂岩製で凹状の磨面がある。磨製石斧用砥石であろう。蜂巣石(137)には凹状の磨面があり、砥石兼用であろう。同様に凹石や磨石も砥石としての機能を兼ねた例がある。

#### 石錘(136)

小型の板状円錐を打ち欠いて石錘としたものである。安山岩製で1点のみである。半分を失っている。

#### ヒスイ原石

集石SH9下層から出土。長さ5.7、幅5.3cmの台形状で直部3.7cmと厚く基底部にあたる部分が薄くなる。断面形は三角形の角のとれた川原石であり、剥離痕が基底部と頂部にある。

重量153.9g、比重は3.3457でヒスイ輝石である。やや深みのある緑色である(図版2)。

#### 原石・剥片類

小丘遺跡で出土した原石を含む剥片類は総数2,132点である。うち、原石・石核は黒曜石16とチャート10の計28点で他は剥片類で、全体の中での占める比率は小さい(0.1%)。

地区別では第5区が164点で他地区的81から110点と比較してやや多い。第8区では包含層として取り上げた点数は8点と少ないが住居跡埋土としたものが73点あり、合計するとほぼ他地区と肩をならべる数値である。総じて石組・集石群の分布域に第8区も含めて多い傾向にあると云えるが、剥片類の細かな出土地点の記録を欠くのでこれ以上の追求は不可能である。

## 2. 石器・剥片類の素材別検討(第6図・表3)

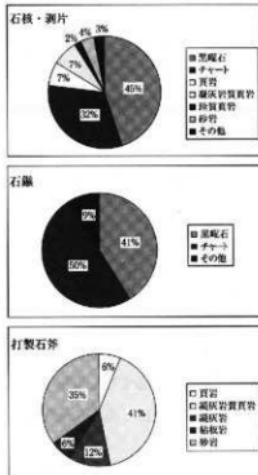
次に石器および剥片類を素材別に検討し、小丘遺跡の石器の在り方についてまとめてみる。ただし、伴出して

いる土器から、これらの石器と剥片類の時期はいくつかの断絶期はあるものの縄文時代前期中葉から後期中葉という長期間のものである。確かに土器の出土量と遺構から、小玉遺跡の最盛期は中期末から後期中葉にあり、石器や剥片類の大多数は限定された時間幅に収まるが、それでも限られた時間帯の中における石器の動態などを知る上では限界がある。しかし、逆に小玉遺跡という地域の中での石器や剥片類の在り方やそこから導き出せる石器生産や生活実態を知る資料には十分になりうる。ただし、黒曜石などの原産地比定のための有力な科学的分析は行っていないので、今後の課題も多くある。

原石や剥片類は黒曜石が45%、チャートが32%と全体の8割近くを占める。これらは石鎚など小型石器の素材である。いっぽう小型石器を素材別にみた場合に、石鎚の50%がチャート、41%が黒曜石で、残り9%は凝灰岩、無斑晶質安山岩、硬砂岩、メノウ、鉄石英である。チャートと黒曜石がほぼ半々ということである。石鏃・搔器・削器・石匙・石槍形石器はチャートが大半(80%)で黒曜石製は少ない(8%)。また、砂岩等の使用例が少ない点は石鎚と共に通する。以上、原石・剥片類と小型石器類の素材量を比較した場合に、前者では黒曜石がチャートをやや上まわる量であるのに対して、石鎚ではほぼ同数、それ以下の小型石器ではチャートの量が上まわる。トータルすれば、小型石器の素材は小玉遺跡では、原石・剥片類の示した数値、つまり黒曜石45%、チャート32%に近いものとなるがこれは見せかけのことと、少量とは云え、無斑晶質安山岩・メノウ・鉄石英や水晶などが素材として加わることになる。製作途上の石鎚の存在も加味すれば、小玉遺跡では器種に応じた素材を各地に求めて小型石器の製作がおこなわれていたことになろう。

剥片類のうち、凝灰岩質を含む頁岩は16%、凝灰岩は1.3%、硬砂岩は4%、蛇紋岩は1%である。硅質化した頁岩や凝灰岩の一部は小型石器の素材でもあるが、上記の岩石とともに石斧の素材である。打製石斧(横刃形石器も含む)は素材別では凝灰岩質も含めた頁岩製が47%ともっと多く、ついで硬砂岩が41%、粘板岩6%である。磨製石斧は蛇紋岩が82%と圧倒的に多く、ついで緑色凝灰岩などが少數ある。しかし、石斧の素材のうち、原石あるいは石核と思われるものは硬砂岩が少數認められるものの極めて少なく、蛇紋岩には認められない。

一般に小玉遺跡をとりまく飯綱町内は第三紀層をベースに飯綱火山に起因する岩石帶にある。したがって第三紀層中に含まれるチャート等小円礫などを除いて石器の素材には恵まれてはいない。逆に石皿や凹石など飯綱火山に起因する安山岩の円礫は豊富にある。小型石器や石斧の素材の大半は町外に求めたことになる。打製石斧の素材のひとつである硬砂岩は千曲川川床に求められようが、蛇紋岩は大北地区に、黒曜石は和田岬を初めとする諏訪・小県・南佐久地方の信州産黒曜石原産地からのものであろうし、チャートが鳥居川川床に求められるかどうかの検討も今後に残されている。しかし、打製石斧や磨製石斧の素材である硬砂岩や蛇紋岩の剥片類の出土量は原石も含めて石器数に比較して少ない。打製石斧に使用途中における破損例が多いこともあって、硬砂岩等の剥片類は破損石器の再調整によって生じたものが大半と思われる。だとするならば、打製・磨製石斧は遺跡での製作はほとんど行われず、主として製品として搬入された可能性がある。素材が近くに得られない遺跡のひとつのパターンかも知れない。ただ、まちがいなく、石皿、凹石の素材は遺跡周辺で拾得したものである。



第6図 石器の素材別グラフ

## 第4節 古代・中世の遺構と遺物

水田底土直下の黒褐色土（IV-上）層で、黒色土を埋土とする複数のピット群を検出した。この黒褐色土層には平安時代の土器と縄文土器が混在して出土した。黒褐色土の上部は水田造成時に部分的に削平を受けており、その上部ははっきりしないが、ピット内からは平安時代の遺物が出土するところから出土遺物と埋土の状況からこの黒褐色土面で検出されたピット及び土坑を平安時代の遺構とした。

### 1. 遺構

#### ピット群（第9・52・56・57図）

主に調査区の西側に検出された。黒色土（IV層）を20cmほど掘り下げたところで検出された。ピット1～ピット9まである（P.5は欠番）。ほとんどが黒褐色粘質土までの掘り込みである。なお、若干の遺物が出土したが混入と考えられ必ずしも遺構の時期決定に必要な遺物の出土があったわけではない。

ピット1 調査区1北西に検出した。17×15cmの小穴である。深さは未計測である。打製石斧（66）が出土した。

ピット2 調査区北西隅ピット1の東側に近接して検出した。69×47cm、深さ38.9cmである。縄文中期後葉（1040）、後期前葉（1041）と土師器壺口縁部片（1042）、黒色土器壺（1043）が出土した。1042は砲弾形壺の口縁部である。端部が面をなし、内面はカキ目調整された越後系土器である。

ピット3 調査区、トレンチC調査時に検出した。60×50cm、深さ16.6cmである。縄文後期壺ノ内2式土器（1044・1048）と磨製石斧（94）が出土している。

ピット4 調査区2（北側）、ピット1～ピット3の東側に検出した。73×57cm、深さ18cmである。黒褐色粘質土を掘り込んでいる。遺物は縄文中期後葉（1045）後期前葉（1046・1049）が出土している。

ピット6 調査区7（南）、堅穴住居跡SB1北辺の上層で検出した。1.17×0.3m、深さ9cmで細長い梢円である。北側半分は未調査である。遺物は出土しなかった。

ピット7 調査区4（西）、SK9の東側に検出している。32×30cm、深さ15.5cmであり、黒褐色粘質土のみ掘り込み、炭化物も混じる。

ピット8 調査区7（西）SK8の上層で検出する。28×25cmで深さは未計測である。

ピット9 調査区7（西）SK9の上層で検出する。73×58cmで深さは未計測である。

#### 土坑（第9・27・56図）

SK1 調査区7（西南）に検出した。SB1の西側にある。56×35cm深さ37.2cmである。埋土は黒褐色粘質土の薄い層と黒色土である。黒色土には石、骨片が混じる。SK1付近に広がる砂礫は埋土に含まれない。縄文時代前期（258）、中期後葉（259）、後期（260・261）と不明（262）、石椎（76）がある。

SK2 調査区7（南）、SB1の北隅に検出した。1.03m×0.8m深さ15cmである。中期後葉（263・264）、後期前葉（265・266）、磨製石斧（95）と使用痕のある剥片が出土している。

SK3 調査区7（南）、SB1内、石窯炉の東側に検出。1.3×0.77m 深さ6cmの梢円形である。黒褐色土の浅い落ち込みである。土坑としたが、自然地形の単純な窪みであることも考えられる。埋土およびSK3直下の黒色土IV層から石錐、搔器、打製・磨製石斧、土器片などが出土している（267～271）。

## 2. 平安時代の遺物（第52・53図）

黒褐色土器（IV層）で出土した平安時代の土器は小破片のみであった。同一個体もあるであろうが土師器334点、須恵器308点と同じ割合で出土し、合計642点を数える。器種では壺、塊、壺蓋、壺、壺があり、壺と壺が主となっている。壺では224点のうち須恵器が154点と70%を占める。土師器では27点、黒色土器塊が43点と黒色土器が多い。

### 土師器

壺（1063・1064・1065・1071・1075）ロクロ整形された北信型の砲弾形壺の口縁部片3点（1063～1065）と小型の武藏型壺（1071）がある。北信型壺は粘土紐巻き上げ成形のうちに胴部上半はロクロで器面調整されるが、口縁部内面にカキ目調整されたものもある（1064）。胴部下半はヘラ削りされる（1065）など北信型壺としては一般的である。胎土は大粒の砂粒を含ませ粗い。武藏型壺は直径13cmで、口縁部はコの字形であり、肩部に最大径がくる。肩部から体部の外面はヨコ方向にヘラ削りされている。1075は小型壺の底部で糸切底である。底径は5.4cmである。

鍋（1066・1067）土師器鍋が2個体出土している。ともに口径は40cmでロクロ整形され、体部下半は幅2cmほどのヘラによりタテ方向に削り、内面はカキ目調整されている。北信地方ではしばしば見られる（赤塙他1994）が、越後系土器である。

器台形土器（1076）高壺の脚部状の土器である。粘土の巻き上げ痕が内面に残る。胎土に石英を含み、黄褐色である。外面は縦方向にヘラで磨いている。器台形土器としたが器種不明である。長頸壺かもしれない。

### 黒色土器

壺・塊（1070・1072・1073）1070は体部から内済しながら口縁部まで立ち上げている。底部は横方向に手持ちヘラ削りで調整されている。底部は欠損している。口径12cm。1072は底径5.4cmで底部は回転ヘラ削りが胴部から下半まで及んでいる。1073は塊であり、底径7cm。糸切り底に高台を付けている。

### 須恵器

壺（1069・1077～1080）すべて破片での出土である。法量は1069が口径13.2cm 器高4.3cm 底径7.4cm、1077は口径11.8cm 器高2.8cm、1078が口径13.2cm、1079が口径12cmである。底部の切り離しは回転糸切りである。1069は黄白色を呈し、焼成も軟質である。

壺蓋（1074）折り返し部分が1点出土している。小破片であるため径が捉えにくいか、口径14.4cmである。口縁部はやや内側に傾く。灰黒色である。

短頸壺（1068）小破片である。口径12cmを計り、頸部を強くナデ、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸みをおびる。外面はカキ目調整される。器壁は厚い部分で1cm、薄い部分で3mmと均一ではなく、整形は雑である。

長頸壺（1083・1085）1083は頸部片である。胎土は白色砂粒が多く粗い。色調は赤茶色である。1085は壺の底部であり底径は7.8cmを測る。灰黒色を呈する。

壺（1084・1096～1098・1100～1103）口縁部は断面三角形の端部で頸部に波状文をもつ（1098）底部径は13.4cmを測る。外面をタタキ整形している。底部立ち上がり部はヘラ状工具でロクロナデ、底部はヘラ状工具で削って平滑化し、T工具が残る。色調は灰色で、胎土は砂粒が多く粗い。

壺頸部はタタいて仕上げている。北陸地方に通常に見える菊花文状タタキ目である（1096・1097・1110・1101）は本町の前高山古窯跡群（笹沢他1986）や岸岸窯跡（横山他1998）の出土品にもある。この他同心円文（1102）と無文の当て具痕（1103）がある。

四耳壺（1081・1082・1099）いずれも凸帯付四耳壺の凸帯部分である。1081の胴部径は21.8cm、ロクロ整形で

ある。1082は胴部径25.2cm、外面にタタキ目が残り、内面は丁寧にナデられている。1099は凸帯が剥離し、外面にタタキ目、内面に同心円文の當て具痕が残る。

#### 灰釉陶器

把手付瓶 1点、碗・皿は破片数46点、うち口縁部が20点、底部が5点出土している。いずれも小破片である。実測可能だったものは8点である。また、碗または皿の口縁部20点のうち、同一個体は約7個体分となる。後述のとおり大半は東濃・光ヶ丘1号窯式に属するが、一部に大原窯式もある。

把手付瓶 (1086) 口径は8cmで、口縁部は頸部からゆるく外反してのび、端部でさらに強く外反する。光ヶ丘1号窯式である。

塊 (1087・1089・1091) 1087は底径5cmを測る。底部は回転ヘラ削り調整され、高台は内側の先端が接地する三月日高台である。釉は内面にハケ塗りされている。1089は口径16cm、1091は口径12cm、口縁端部は丸みが強い。光ヶ丘1号窯式である。

皿 (1088・1090・1093) 1088は口径15cmで、内面はロクロナデされている。光ヶ丘1号窯式。1090の底径は6.4cmを測り、外面が回転ケズリ調整されている。高台の断面形は嘴状で内面端で接地する。釉は内面にハケ塗りされている。1093の底径は7.8cm。内面はハケ塗りされ淡緑色の釉がかかる。重ね焼き痕が残る。光ヶ丘1号窯式。

刻書土器 (1104) 黒色土器高台付き皿で、体部に焼成後の刻書がある。刻目が細く、先の鋭利な工具を使用している。字体は不明である。

皿は口径13.4cm、器高3.9cmを測り、灰釉陶器の器形を模倣している。底部には糸切り後の高台接合工程で付いた爪あと状の刻み目がみられる。

墨書き器 (1105~1109) 須恵器坏1点 (1107)、黒色土器坏3点 (1105・1106・1109)、黒色土器高台付き皿1点が出土している。いずれも水田床土下のIV層上面で出土し、遺構に伴うものではない。いずれも判読不能である。

### 3. 中世の遺物 (第53図)

中世の遺物が包含層から2点出土したが遺構は検出されなかった。

内耳鍋 (1094) 底部の小破片である。底径23.6cm。底部から外反して胴部へ続く。トレンチBより出土。

白磁碗 口径15.2cmを測る。小破片である。灰白色の胎土に白釉がかかる。口縁端部を外側へ折り曲げ肥厚している。白磁IV類の12世紀の所産である。水田床土下のIV層上面で出土した。

## 第4章 調査の成果と課題

### 第1節 いわゆる「石神類型」をめぐる2.3の問題

#### 1. 東北信地域の後期前半の土器研究と「石神類型」の認識

ここ10数年の間に後期前半の土器資料は飛躍的に増加し、長野県史の編纂（平林1988・綿田1988）や各種のシンポジウム（百瀬1996a・b・綿田2002）あるいは報告書作成時の論文（平林1993・阿部1999・綿田2001）などで後期土器について注目すべき研究が多い。とくに縦年研究では型式の細分と土器の持つ地域性について精緻を極めて来ている。

小玉遺跡出土の後期縄文土器は大半が包含層出土で造構に伴う括遺物はほとんどない。僅かに土坑SK4出土の上器群があるにすぎない。しかし、後期初頭から中葉に至る資料は「石神類型」を始めとして好資料が相当数ある。

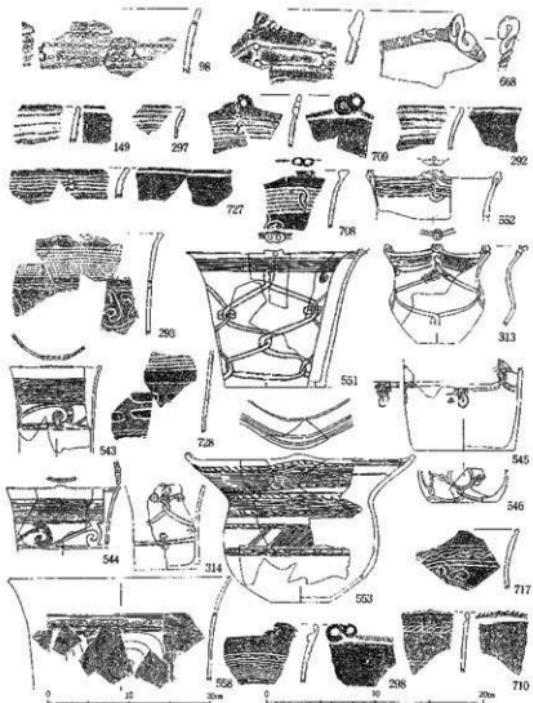
ここではこれらについて詳細に検討する紙幅もないし、筆者自身後期土器は専門外であるので、後に委ねるとして、東北信地域の後期の遺跡で必ずと云ってもよいほどに出土する「石神類型」について、先学の主張を整理したうえで、SK4出土土器について門外漢なりに問題点を抱きながら若干ふれておきたい。

「石神類型」とは小諸市石神遺跡J19号住居址出土の土器（綿田・花岡1994）について百瀬長秀氏が第9回縄文セミナーの会で「石神タイプの精製深鉢」として取り上げ（百瀬1996a）同じシンポジウムで秋田かな子氏がそれを「石神類型」と呼称した（秋田1996a・b）ことにはじまる。百瀬氏は石神遺跡の資料は山内清男氏が加曾利B1式土器の古い部分とした注口土器（山内1967）と文様が共通するところから、「石神タイプ」と呼称して加曾利B1式土器古段階とし、明斜町（現安曇野市）北村遺跡SB555（平林1993）を傍証資料にあげた（百瀬1996a）。この考え方の根柢は長野県史（平林1988）以来の考え方方に立脚したものである。これに対して秋田氏は石神遺跡に加えて南関東西部域の資料との比較検討のうえ、「石神類型」は堀ノ内2式終末の土器であるとして、異をとなえた。

以降秋田氏は「石神類型」とそれに関連した注口土器に関する論考を相次いで発表し、氏の考え方を補強しつつ「石神類型」に係わる問題点を提示して来た（秋田1997・1998・1999）。氏は嚴選した用語を駆使して論を展開しているだけに難解で問題提起に係わる部分が多く、型式論としては十分に読み取れないが、石神類型は要約すると以下のとおりとなろう。

- (1) 堀ノ内2式終末に併行し、同式と密接な関連を示しながらも形態上、装飾上区別される特徴をもつ。
- (2) 分布は関東東西部、中部中信越（一部群馬西部域）から北陸地方まで広域にわたるがどの地域に本貫を持つか不明で、したがって地域的系譜は特定できない。
- (3) 石神類型文様は注口土器や深鉢などに文様の置換えという形で波及した浸透力のある土器である。
- (4) この土器の成立ちは「かなりの部分、地域的伝統のなかで理解でき」「多条沈線による連鎖状文、入組文は漸次的に生成」したというよりは「短期間の内に主に文様の抽出手法が置換えられ」たもので広域間でおこっている。さらに氏はこうした現象を「石神類型の現象」とし「社会的動向」としてとらえ、「石神類型」を型式としての認識を超越したより高い次元でとらえようとしている。

したがって、秋田氏の認識は石神類型を型式として、加曾利B1式古段階に設定した百瀬氏とは、認識の上で大きな隔たりがあると云える。秋田氏の論考は「石神類型」の成立の背後にある歴史事象を探ろうという意味で



第7図 石神類型とその周囲の土器（実測図1:6、拓本1:4.5）

から、構築期間は後期初頭に始まり、後期中葉の加曾利B1式期までであることは明らかとされている。加えて、石組・集石群は墳墓とそれに係わる葬送儀礼の祭場とされるものであるとするならば、土坑SK4もややずれて上部に検出された石組・集石群との関係は時間差も含めて検討されなければならない。同様に近接するSK5・SK6についても云えることである。しかし、他の石組・集石についてはこのような土坑の検出は認められていない。堀ノ内1式の大型深鉢片（281）を出土した土坑SK7は石組・集石群に近接してはいるもののややずれている。したがって、後期に属する土坑群は石組・集石群と関係はあるものの、個々の石組・集石群との関係を直接知りうる資料は発掘からは得られておらず、SK4と石組・集石群は時間的前後関係で云えば、SK4が先行して石組・集石群構築に係わる儀礼に伴い作られたものであろうということになる。土坑の形態上のバラツキと数の少なさから、墓地とするよりは祭祀用の土坑である可能性の方が強いものと思われる。

次にSK4出土土器の一括性について述べる。残念ながら出土状態の記録を欠くのでこの点での検討はできないうが、SH4下層に検出されたことと、若干の中葉及び後期前葉の上器片（284～286）を除いて石神類型と堀ノ内2式土器の系譜に連なるものである。少量の後期以前の土器片は土坑掘削時の混入であろうが、それら以外が一括性と云えるか、土坑埋土の生成によって異なる結論がでる。しかし、石組・集石群とSK4との関係ならばにSK4の性格が前述のとおりとすれば、土坑埋土の形成は短期間のうちに起こされたと考えてよい。恐らく

は極めて示差に富むもので興味つきないが、土器型式としてどうなのかという点では明言をさせていく。百瀬氏の主張の根幹である石神類型の文様と加曾利B1式の古い方とした山内氏が示した沢口土器との関係について、直接的説明がほしかったところである。

## 2. 土坑SK4の性格と出土土器の一括性

土坑SK4は長径12m 短径8.1mあまりの弧状に検出されたいくつかの石組・集石と多量の砾群からなる石組・集石群と呼ぶ石造構造物に付属する土坑のひとつである。石組・集石群の東辺部にあり、土坑SK5・SK6とともにこの下部に構築されたものである。この石組・集石群はすでに述べたとおり、調査範囲内では全体像が確定できない。しかし、中期後葉のSB1などの住居跡との切りあいと石組・集石群内から出土した土器類

SK 4 の土器は葬送儀式用に使用された土器類を一括り納あるいは遺棄したものと考えられるのである。

### 3. 土坑 SK 4 出土土器の様相

すでに述べたとおり、SK 4 出土土器は精製深鉢に限れば、石神類型の土器と紐線文（刻目のある細隆文）土器からなる。後者は充填繩文された弧線文や三角形文などを胴部文様とする壠ノ内 2 式土器に系譜のある土器群であり、前項では壠ノ内 2 式新段階あるいは最終末の土器として扱った。問題はこの壠ノ内 2 式土器に系譜のある上器と呼び、それらが石神類型と共伴するか否かである。換言すれば石神類型が壠ノ内 2 式土器を母体として成立して来たとすれば、石神類型の原初的姿はこの系譜のある土器群に求められる可能性がある。以下、石神類型を構成する文様をこの視点で SK 4 中心にその不足を小毛遺跡出土土器で補いつつ検討してみる（第 7 図）。

(1) 口縁部文様帯を構成する条線文 これには刻目（293・708）、繩文施文（313他）と多条沈線のみ（553）があり、繩文施文が多い。この 3 種の存在は、壠ノ内 2 式土器の紐線文の発展系として理解が可能と思われる。すでに阿部氏によって明らかにされているとおり、壠ノ内 2 式土器内における紐線文の多条化（阿部 1999）の延長にあるものであり、それに立体的文様から平面的文様への流れが加わる。紐線文の多条化は細隆線化と刻目の省略（292）、あるいは集合沈線化して口縁部文様帯を構成する 3 種の条線文成立となったと考えられる。刻目から繩文施文そして条線文のみとなる過程は紐線文の多条化と沈線化の中で文様手順の省略化と新しい文様の創出という流れの過程ではごく自然である。

(2) 縦区画文単独の単位文と文様帶構成の起点となる 2 種 縦区画単位文には縱位「S」字連鎖状文（313・558・786・787）、入組文（551・708）、半円文（552・553）と縱連円形刺突文（552・727）がある。これらは口縁部文様帯では波状口縁の 3 単位（313）、または 4 单位突起（552・553・786）の下に施文され横帯文を区画する。胴部文様帯では条線文や横位「S」字連鎖状文などの口縁部横帯文下部で重圓文を区画する（558）か、口縁部文様帯から連続して新紐文の起点となる（551）。また、後者の結紐文は、口縁部文様帯の区画文を起点としている（313）。こうした文様構成は石神類型の特徴のひとつと云えるもので、前型式とは一線を画するものである。ただし、縱連円形刺突文は条線文とともに、「8」の字貼付文を母体とするもので、文様の平面化のひとつであろう。つまり「8」の字貼付文は紐線文を結ぶ文様へと変化し（98・667）、それが縱連円形刺突文への流れ、つまり区画文へと変遷したと理解されるからである。

(3) 「S」字連鎖状文 縦位または横位があり、ともに区画文として用いられる場合もある（553・710）。この連鎖状文が「8」の字貼付文を母体とすることは容易に察しがつくが、具体的にその過程を追溯することは現段階では不可能である。しかし、間接的ではあるが、傍証資料がある。ひとつは口縁端部の小突起にあるねじれ「S」字文（668）と「8」の字文（298・709）である。小突起が山形に付着された結果、斜位で立体的な文様となる。いまひとつは頂部を平坦とした小突起の「8」の字文がある（313・535・543・544・708など）。これらも壠ノ内 2 式土器の小突起には認められず、新しい要素で前型式の小突起に「8」の字貼付文が採用されたものと思われる。したがって、「S」字連鎖状文や人組文の成立も「8」の字貼付文を母体として発展したものとして理解が可能と思われる。なお、これらの小突起は区切文をもつ深鉢の小突起に受け継がれていく（554）。

(4) 胴部文様帯にみる横走連続渦巻文・棒状文・重圓文 横走連続渦巻文（543・544）や棒状文（728）そして重圓文（558）は壠ノ内 2 式に系譜が求められるものであるが、いずれも規格化が著しい。

(5) 紐線文および弧線文・三角形文 弧線文（304・308・309）と三角形文（310・311）は恐らく紐線文を口縁部とする深鉢（287～291）の胴部文様であろう。これらは重圓文や垂下文と複合鋸齒文を胴部文様とする紐線文土器（317）とともに壠ノ内 2 式土器と親縁関係が強い土器である。

#### (6) 数条の太い平行沈線を描く半粗製土器 恐らく石神類型の半粗製の深鉢と思われる (299~301・303・305)。

以上の結果、SK 4 の上器は石神類型を主としてこれに少量の堀ノ内 2 式土器に系譜のある土器群からなり、これらは基本的には堀ノ内 2 式土器の中から生成されたものであることを明らかとして来た。しかしながら連鎖状文や入組文と枯縦文の成立過程は以上では説得力を欠く。秋田氏が石神類型は「かなりの部分、地域的伝統の中で理解でき」るが連鎖状文、入組文は「短期間に内に主に文様の抽出手法が置換された」(秋田1997) と論じたが、置換のモデルが石神類型であれば、広域にわたって分布することの説明はできても、石神類型成立の根拠とはなり得ない。

石神類型は東北地域を中心に中南信地域に及ぶ後期の遺跡から量の多少に限らなければ、多くの遺跡で認められる。東北信では石神遺跡 東御市古屋敷(堀田・小池他1986) 上田市深町(塙入他1979) 長野市村東山手(阿部他1999) 吉田古屋敷(綿田・飯島1997、宿野他2008) 高山村湯倉(綿田2001) 野沢温泉村岡ノ峯(塙原・金井他1985) 飯山市東原(高橋他1995・望月他1998)などがあり町内には明寺寺遺跡(森・島田他1980)などがあり、東北信を中心に分布していそうである。遺構出土資料は小諸市石神遺跡 J19号住、北村遺跡 SB55、松本市坪ノ内遺跡490号上坑(新谷他1990)などごく少量しかない。しかしいずれの遺跡でも SK 4 出土土器と共通する様相が認められる。阿部氏が松本市坪ノ内遺跡例などから堀ノ内 2 C 式土器として堀ノ内式土器最終末に位置付けたことも、石神類型と堀ノ内 2 式土器に系譜のある土器とが共存したことにあろう。百瀬氏が「石神タイプ」呼称の際に石神・北村遺跡の住居址資料のうち堀ノ内 2 式土器に系譜のある土器を混入として除外した(百瀬1996a)が、検討が必要と思われる。先入観にとらわれずに、とりえず一括出土とした上で検討することが、この場合必要であろう。本稿では他の遺跡に比較して、石神類型が多く出土したため、一遺跡内での検討に終始し他の遺跡との検討は後日にした。ただ、石神類型の精製土器の多くが、内外面黒色でヘラで削いた薄手の土器である。本稿では九州地方の「黒色研磨土器様式」(島津1969)と誤解をさけて「黒色研磨の土器」などの用語を用いてきたが、これもまた今後の大きな課題である。

#### 4. 「石神タイプ」か「石神類型」か

本稿をしたためるためにあたって、常に念頭にあった点は山内清男氏が加曾利 B 1 式土器の古い部分とされた注口上器 3 点(山内1967)の文様が石神類型の深鉢と共通するのに、何故石神類型の深鉢が新型式とされずにいるのかという点にあった。この点は百瀬氏が「石神タイプ」呼称とした出発点であった。秋田氏はいくつもの論文でこの点を意識しつつ、注口土器の持つ特殊な性格を論じるも、直接この点についてふれられていない。共通する文様を持つ土器が、器種が異なればいかに注口土器が特別に用意された器種であっても、新旧の二型式に分離することができるか、はなはだ疑問に思ひながらも、本稿でも石神類型の文様を持つ注口土器を資料不足もあってあえて山内編年に従って加曾利 B 1 式として來た。

そもそも土器型式は何をもってするのか、堀ノ内式土器と加曾利 B 式土器との境界をどこにおくのか、土器型式の細分化によってその境界を線引きすることに困難さが伴う。かつてこの点について鈴木正博、人塚達郎両氏で論争があった(鈴木1981、人塚1983)が、新しい大きな展開を持って、新型式の開始とすることが許されるとするならば、石神類型を持つ全ての器種を百瀬氏説の主張のとおり、加曾利 B 1 式の古段階に置くことの方が合理的と思われる。石神遺跡 J19 号住居址出土の 3 点の注口上器片の中に 1 点の石神類型深鉢と共通するもの(花岡・綿田1994第180図2)があるからであるとともに堀ノ内 2 式土器の系譜に連なる土器も加えて何らさしつかえないものと思う。しかし、本稿では堀ノ内 2 式及び加曾利 B 1 式と直接に係わる点については触れなかった。別の機会としたい。

## 第2節 石組・集石群の時期と性格

調査区の北西から南東にかけて検出された石組・集石群は、核となる7基の石組と4基の集石ならびにそれらの周辺に雜然と置かれた多数の小砾からなる。石組は角のある板状の安山岩を用いて長方形状に配石したA類と、両側壁からなる箱式石棺状のB類ならびに梢円形の円砾を石棺状に配したC類からなる。A類には石組SH3、SH4、B類には石組SH1、SH2、SH6、C類には石組SH10がある。集石は2~4mの範囲に梢円形状にこぶし大の円砾を集積したものでSH7~9、SH11の4基がある。このほか、石組SH5はSH2に隣接して、こぶし大の円砾とともに板状の大形角砾を集積したもので、石組や集石とした遺構と趣を異にしている。これらの石はいずれも安山岩の自然礫で、主として飯綱火山に起源をもつもので、遺跡周辺で多量に得られるものである。

石組・集石群の全体像は調査区内では南北15m東西8mの範囲で南北に弧状または環状に石の分布が見えるが北西側には石は認められないで調査区内で石組・集石群の全体像は判断できない。

石組B類は板石を立てて側壁としているが、いずれも「コ」字形である。恐らく、箱式石棺状とした配石の一部残存と考えられる。SH2には床石が一部に認められた。SH6は幅は内法で30cmと小さく石棺墓とすれば小児用のものであろう。以上、3基の石組B類は石組・集石群の北辺部にあり、集石SH7・8と石組SH5の間にあって、石組B類と集石が一体化されているものと思われる。

石組A類は板状集石からなり、発掘当初は敷石住居の一部とも思われたが、その平面的あり方や石圍炉の欠陥などから石組としたものである。長方形形状の半石の配石状況から、側石を抜かれ、床石のみが残ったものと考えられなくもないが、側石を設置した痕跡が、認められないところから、石棺墓とすることの根拠はない。石組・集石群のいずれも南側にある。

以上から石組B・C類のみ石棺墓（配石墓）としA類は不明と云うことになる。

石組・集石群と他遺構との関係では、中期後葉の2棟の竪穴住居SB1、SB2と土坑群がある。うち竪穴住居SB1とは切り合い関係にあり、住居床面と思われるレベル上に石組SH10と集石SH11が検出され、これらはすでに述べたとおり、住居廃絶後に構築されたものである。ここでは石組・集石群が中期後葉まではさかのほり得ないことを示している。

土坑群との関係ではSK4についてはすでに前項で述べたとおりである。小玉遺跡で検出された縄文時代の土坑はSK4~9の6基である。いずれも比較的大型で、うちSK9では中期前葉の大型深鉢（331）の出土から、石組・集石群より古い。残りの土坑SK4~8は中期後葉から後期前葉までの土器片を出土し、SK8、SK9以外は石組・集石群の縁辺にあって下部に検出されており、SK4と出土土器との関係で前述したとおり、これら土坑群が後期のもので石組・集石群の構築と深い関係があったと云えるものである。

以上から石組・集石群は竪穴住居SB1と土坑群との切り合い関係等から縄文時代後期初頭から後期中葉の加曾利B1式土器の時期までの間に構築されたと推測できる。石組・集石群及び集石直下の土層から出土した土器類（146~182・190~257）からも云えることである。ただし、遺構の性格上決定的ではない。石組・集石群からの土器の出土量は堀ノ内2式土器がもっとも多い。構築のピークがこの時期にあり、以降加曾利B1式期をもって構築を休止したものと云える。このことは縄文時代における小玉遺跡の魔鏡である。

縄文時代中期後半から後期にかけては関東地方から中部高地にかけて、敷石住居が作られ、併せて敷石住居に付設されたさまざまな石造構造物が作られた。特に後期になると居住域とは別に特別な空間として配石・石組・集石などと呼ばれる石造構造物が構築される（山梨県考古学協会他1990）。東北信地域では後期のこうした石造

建造物がいくつか調査されているが、全体が分かる例は少なく、千曲市円光房遺跡が唯一のものである（森崎・原田1990）。ここでは千曲川左岸の段丘上にあり、石造構造物は、恐らく馬蹄形に囲むと思われる敷石住居を主体とした居住地の中央空間部にあり、立石を伴う配石墓群・弧状列石址などからなる。居住域は中期後葉から晩期、配石墓（石棺墓）は後期後半から晩期のものである。配石墓群は400m<sup>2</sup>の範囲に多量の砾石群の中に17基構築されていた。野沢温泉村岡ノ峯遺跡は配石墓群と集石群が地区を異にして検出された。居住域との関係は明らかとされていないが集石群が祭域とするならば墓域が祭域から分離した形態と云える（金井・壇原1990）。飯山市宮中遺跡（大原他1993）や長野市宮崎遺跡（青木他1988）は配石墓からなる墓域が検出されているが祭域は不明である。

以上後期から晩期の数少ない例ではあるが、小玉遺跡を理解する上で参考となる。円光房遺跡と共に通する点は居住域を離れて多量の砾群を伴う石棺墓群からなるということである。円光房遺跡では多数の立石を伴いより完成した配石墓からなる。小玉遺跡では立石は1点、それも倒れた状態であったが認められている。後期後葉の円光房遺跡より早く、後期前葉にすでに円光房遺跡の原形が明らかとされたことになる。だとするならば、小玉遺跡の居住域は、石組・集石群の外周域にあることになろう。

石組・集石群からは多量の土器片以外にも多くの石器やヒスイ原石と土偶なども出土した。また焼けて細片となった獸骨片が出土した。後者は遺跡全体に炭化物片とともに出土し、一部は中期後葉の土器に付着しており（図版2）石組・集石群に伴うか明らかにしないが、両者の関係はあながち否定しない。

中期後葉から始まる石造文化とも云うべき石造構造物は後期の段階で墳墓と祭祀構造物が一体となった形態をとり、祭域（集石群）と墓域の分離に至る一連のプロセスがたどれるかも知れない。小玉遺跡の調査成果の一端を示しているものと思われる。ただし、宮中遺跡は後期、宮崎遺跡は晩期であり、居住域と墓域からなり祭祀域はあるいは欠陥していたのかもしれない。今後の課題である。

#### 引用・参考文献

- 会田進他 1986『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会  
青木和明他 1988『宮崎遺跡』長野市教育委員会  
秋田かな子 1996a『南関東西部の加曾利B式土器—構造の理解に向けて』『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会  
秋田かな子 1996b『南関東西部の諸様相』『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相—記録集—』縄文セミナーの会  
秋田かな子 1997『「石神類型」覚え書き』『東海大学校地内遺跡調査班報告7』東海大学校地内遺跡調査委員会  
秋田かな子 1998『伊勢原市三ノ宮・下谷戸遺跡出土の注口土器—「石神類型」と注口土器の問題—』『東海大学校地内遺跡調査班報告8』東海大学校地内遺跡調査委員会  
秋田かな子 1999『注口土器の系統変化』『季刊考古学』69 雄山閣  
阿部芳郎 1999『村東山手遺跡出土の堀ノ内2式土器の型式学的検討』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8－長野市内その6－村東山手遺跡』長野県埋蔵文化財センター  
上田典男 1998『前期末葉～中期初頭の土器群について』『松原遺跡・縄文時代』長野県埋蔵文化財センター  
大塚達郎 1983『縄文時代後期加曾利B式土器の研究（1）—最近の成果の検討と新たなる分析—』『考古学研究室研究紀要』2 東京大学考古学研究室  
大原正義 1993『宮中遺跡』『飯山市誌』飯山市志編纂委員会  
小池孝・宮沢恒久他 1976『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4』長野県教育委員会

- 小林秀夫・百瀬長秀 1981『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市、原村その3』長野県教育委員会
- 小林行雄・佐原真 1964『紫雲出』諏訪町教育委員会
- 小柳義男 1997『牟礼村のおいたち』『牟礼村誌』牟礼村
- 笠澤 浩・佐藤慶二他 2001『農野町誌 農野町の資料（一）』農野町誌刊行会
- 佐原 真 1974『弥生土器製作技術に関する「、三の考察－繩文と回転台をめぐって－』『私たちの考古学』5-4 考古学研究会
- 塙入秀敏・児玉卓文他 1979『深町』丸子町教育委員会
- 品川高志 2002『新潟県における縄文後期前葉期の土器群－柏崎市十三本塚北遺跡を中心にして－』『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』縄文セミナーの会
- 信濃教育会上水内部会編 1924『上水内部及長野市資料写真帳』
- 島津義昭 1989『黒色磨研土器様式』『縄文土器大観』4 小学館
- 宿野隆史他 2008『浅川層状地遺跡群 吉田古墳敷遺跡（5）』長野市教育委員会
- 新谷和孝他 1990『岸ノ内遺跡』松本市教育委員会
- 須賀博子他 1997『池之元遺跡発掘調査研究報告書』富士吉田市編さん室
- 鈴木徳雄 1999『称名寺式関沢類型の後裔一堀之内式期における小仙塚類型群の形成－』『縄文土器論集』六  
-青房
- 鈴木正博 1980『加曾利B式精製土器様式（概説）』『大田区史資料編考古Ⅱ』大田区
- 鈴木正博 1981『加曾利B式（古）研究序説』『取手と先史文化』下巻 取手市教育委員会
- 高橋桂他 1995『東原遺跡Ⅲ』飯山市教育委員会
- 高橋 保 1989『県内における縄文中期前半の関東・信州系土器』『新潟県考古学談話会会報』4
- 田中耕作 1989『三十稻場式土器様式』『縄文土器大観』4 小学館
- 田中耕作 2002『新潟県における縄文時代後期前葉の土器群』『後期前半の再検討』縄文セミナーの会
- 坂原長則・金井汲二 1985『岡ノ峰』野沢温泉村教育委員会
- 鶴田典昭他 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8－長野市内3の6－村東山手遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 寺内隆夫 1991『長野県上水内部三木村・上赤塙遺跡出土の縄文中期土器について』『長野県考古学会誌』61・62合併号 長野県考古学会
- 寺内隆夫 1996『斜行沈線文を多用する土器群の研究』『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
- 寺内隆夫 2000『成果と課題、中期の土器、中期前葉の土器』『更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・津河原遺跡）－縄文時代編－本文』 長野県埋蔵文化財センター
- 寺崎裕助 2003『山屋敷遺跡』『上越市史資料編2考古』上越市
- 中島庄一・岡村秀雄他 1994『栗林遺跡』『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』長野県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター 1987『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1岡谷市内』長野県教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 2000『貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15』長野県教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1962『平城宮跡発掘調査報告書』II

- 花岡 弘・緒田弘実 1994『石神遺跡群 石神』小諸市教育委員会
- 平林 彰 1988『後期中葉土器群』『長野県史考古資料編全一巻(四) 遺構遺物』長野県史刊行会
- 平林 彰他 1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11 -明科町内-北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 平林 彰 1990『シンポジウム 繩文時代屋外配石の変遷-地域的特色とその画期- 長野地区』山梨県考古学協会
- 緒田雄二・小林真寿他 1986『古庄敷遺跡群の調査』『不動坂遺跡群Ⅱ・古庄敷遺跡群Ⅱ-緊急発掘調査報告書-』東部町教育委員会
- 水沢教子 2000『成果と課題、中期の土器、中期後葉の土器』『更埴条里遺跡、屋代遺跡群-繩文時代編-本文』長野県埋蔵文化財センター
- 望月静雄他 1998『東原遺跡-築堤地点-』飯山市教育委員会
- 百瀬長秀 1996a『長野県の様相』『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 百瀬長秀 1996b『羽状沈線文系土器群の様相-長野県・山梨県の縄文後期中葉の土器-』『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相-記録集-』縄文セミナーの会
- 森 尚登・島田忠子 1980『明寺寺・茶臼山遺跡』牟礼村教育委員会
- 森嶋 稔・原田政信 1990『円光房遺跡』戸倉町教育委員会
- 森嶋 稔 1991『後遺跡の唐草文様土器とその課題』『後遺跡-北信濃中央山地における縄文中期集落址の研究-』小川村教育委員会
- 山内清男 1967『日本先史土器図譜』再版 先史考古学会
- 山梨県考古学協会他 1990『シンポジウム 繩文時代屋外配石の変遷-地域的特色とその画期-』山梨県考古学協会
- 米沢義光 1989『気屋式土器様式』『縄文土器大観』4 小学館
- 緒田弘実 1988『後期前葉土器群』『長野県史考古資料編』全一巻(四) 遺構・遺物』長野県史刊行会
- 緒田弘実・飯島哲也 1997『浅川扇状地遺跡群 吉田古庄敷遺跡』長野市教育委員会
- 緒田弘実 2001『中期末葉から後期』『湯倉洞窟』高山村教育委員会
- 緒田弘実 2002『長野県の縄文後期前葉土器群Ⅱ』『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討』、同『記録集』縄文セミナーの会

## あとがき

小玉遺跡は戸隠に源流をもつ鳥居川河岸段丘上に東西280m 南北150m に広がっている。昭和49年の県下一斉分布調査により周知となる。小玉遺跡の東側に西屋敷遺跡があったが、さらに旧牛札村分布図作成に向けて行われた平成9・10・11年の詳細分布調査で両遺跡を合わせて「小玉遺跡」とした。公民館建設に伴う180m<sup>2</sup>という小面積の調査であったが、その成果は大きいものであった。疊群が検出され始めたときは、自然石、列石、立石、集石、配石、石組、敷石などのことばのなかでかなり困惑した。そんななかで、意図的に組まれたとはっきり判断できる石組SH2と、縄文中期後葉の豊穴住居SB1の石臼炉出土は少しの光明となった。遺物は石器、土器とともに多量に出土した。縄文中期土器と後期土器のなかで遺構に伴うものは少なかったが、土坑SK4では、他遺跡にはないほどまとまって出土した「石神類型」（小諸市石神遺跡J19号住居址出土）と呼ばれる縄文後期土器は今後さらに注目をあびるだろうと思われる。

飯綱町には縄文後期の遺跡として明專寺遺跡、橋詰遺跡（旧栄町遺跡）、西樽川遺跡、小野遺跡がある。明專寺遺跡は昭和54年県営圃場整備に伴ない調査され、敷石住居址が検出されている。その上層はおびただしい疊でおおわれていたという。小野遺跡は住居址と配石址が検出された。また北信地方の主な縄文後期遺跡としては長野市では宮崎遺跡・吉田古町遺跡・平柴平遺跡・明神平遺跡、飯山市は宮中遺跡・東原遺跡、上高井郡山ノ内町の伊勢宮遺跡がある。宮崎遺跡、宮中遺跡ではそれぞれに側石、床石とも明らかな石棺墓が複数まとめて出土し、墓域を示している。信濃町では仲町遺跡、仁之倉A遺跡など、7遺跡と数が多い。いずれも鳥居川水系、千曲川水系に分布している。そのなかで小玉遺跡の調査成果も重要な役割を果たすと思われる。

今回の調査区域は小玉遺跡の西端の一角であるが、このさらに西側であり、すでに圃場整備された水田にも広がっていたのではないかと推測される。今後は東側の畑地耕作、あるいは住宅の建設など土地改変の際に地元の皆様のご協力で小玉遺跡の詳細を検討していくことが必要となる。

最後に本報告書の作成にあたって中村由克氏には石器石材鑑定、締田弘実氏には縄文土器、遺構について格別なご教示をいただき心から感謝申し上げる。

（横山かよ子）

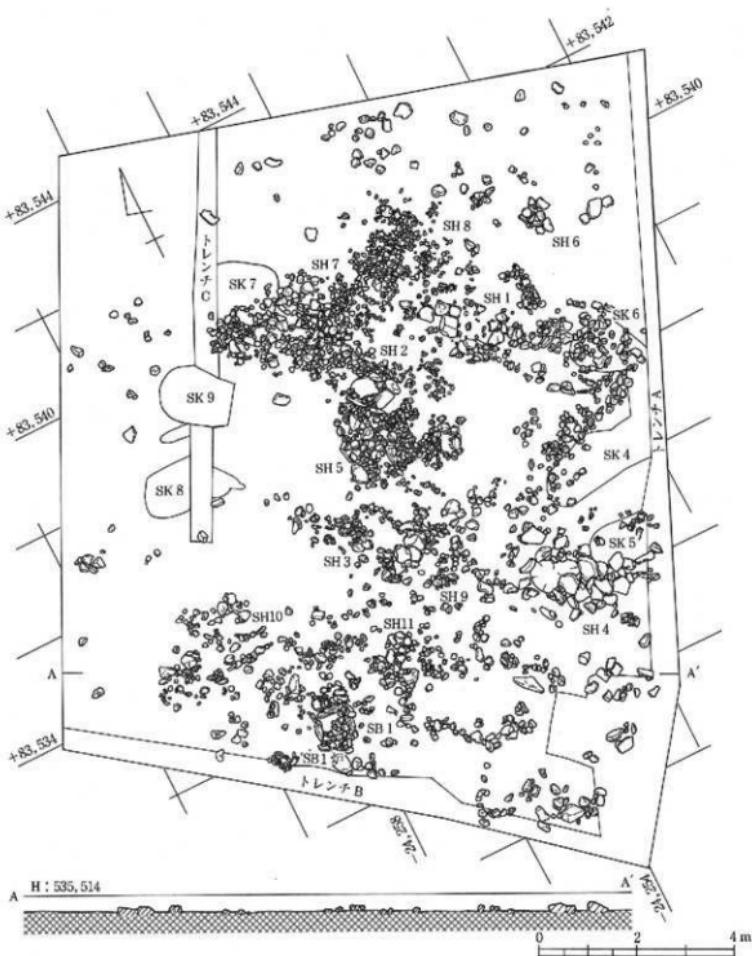




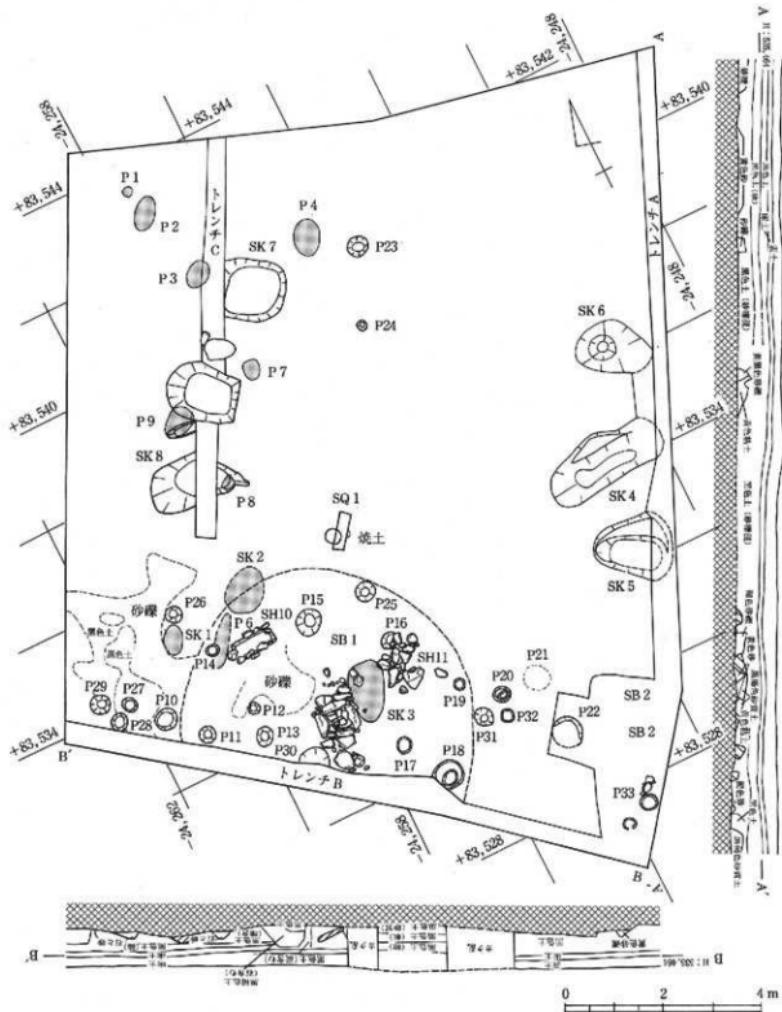






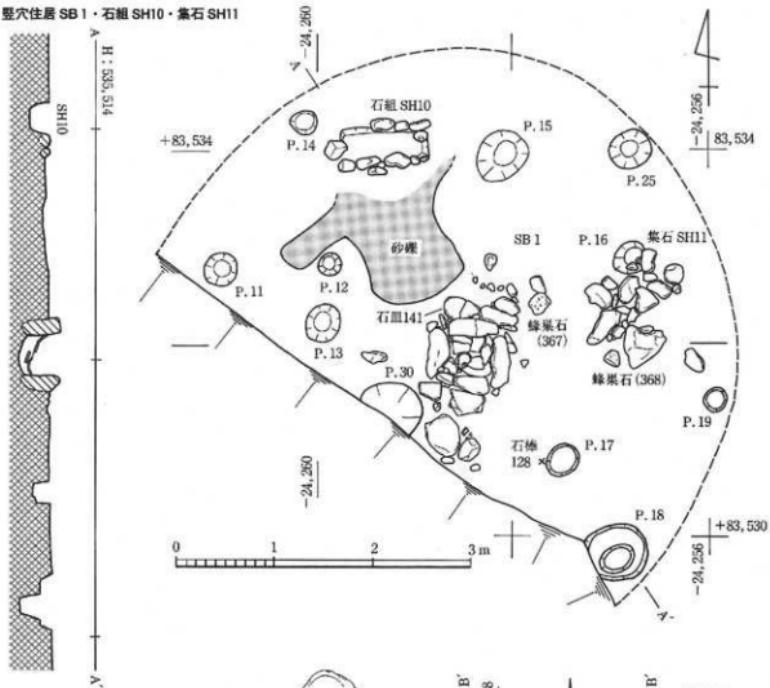


第8図 発掘全体図(1)、石組・集石(1:100)

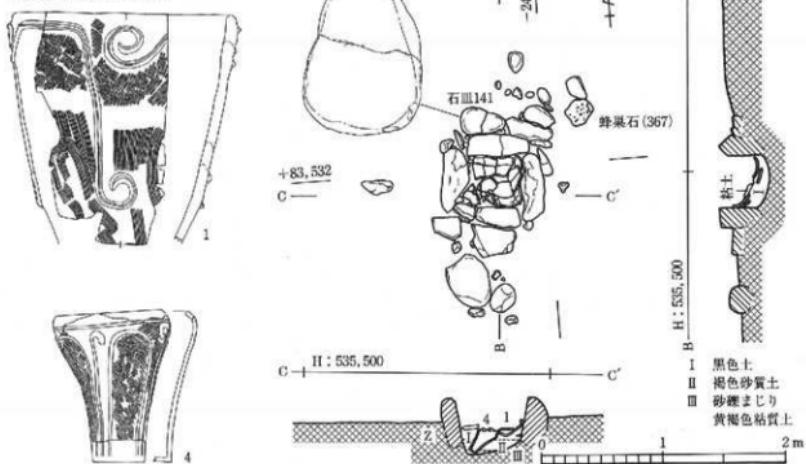


第9図 発掘全体図(2)、住居、土坑・ピット群(1:100)

1. 壺穴住居 SB 1・石組 SH10・集石 SH11

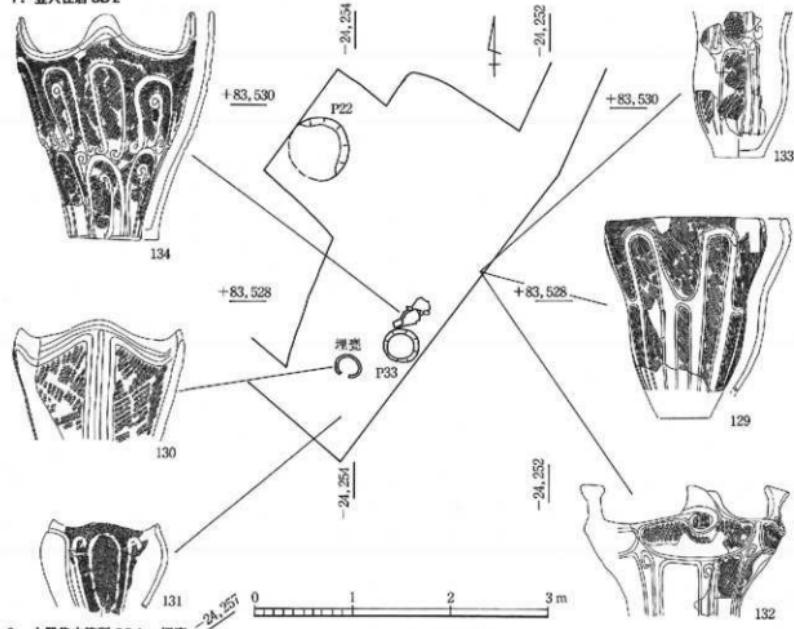


2. 壺穴住居 SB 1 石塙炉

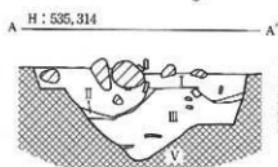
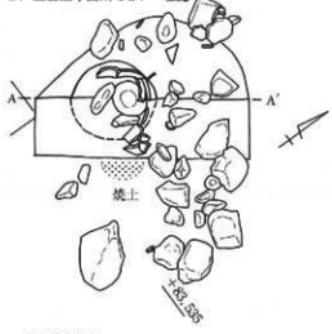


第10図 1. 壺穴住居 SB 1 (1:50) 2. 石塙炉 (1:40)

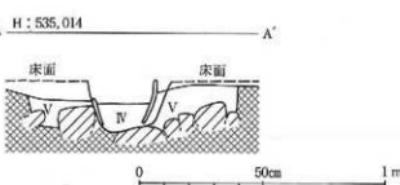
1. 穹穴住居 SB 2



2. 土器集中箇所 SQ 1・埋窓

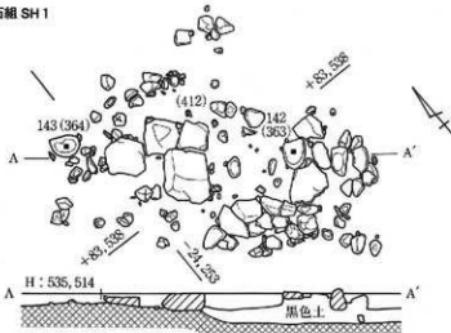


3. SB 2 埋窓

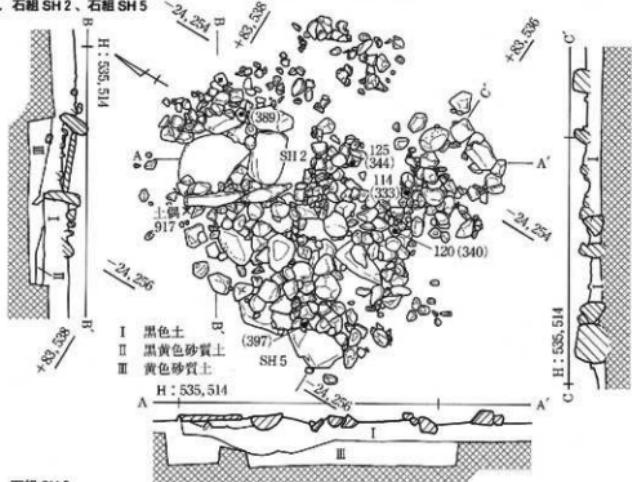


第11図 1. 穹穴住居 SB 2 (1 : 50) 2. 土器集中箇所 SQ 1・埋窓 3. SB 2 埋窓 (1 : 20)

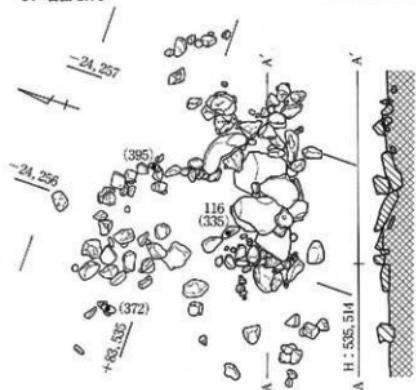
1. 石組 SH 1



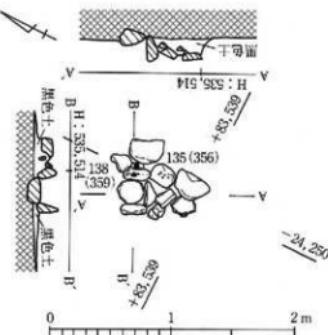
2. 石組 SH 2、石組 SH 5



3. 石組 SH 3

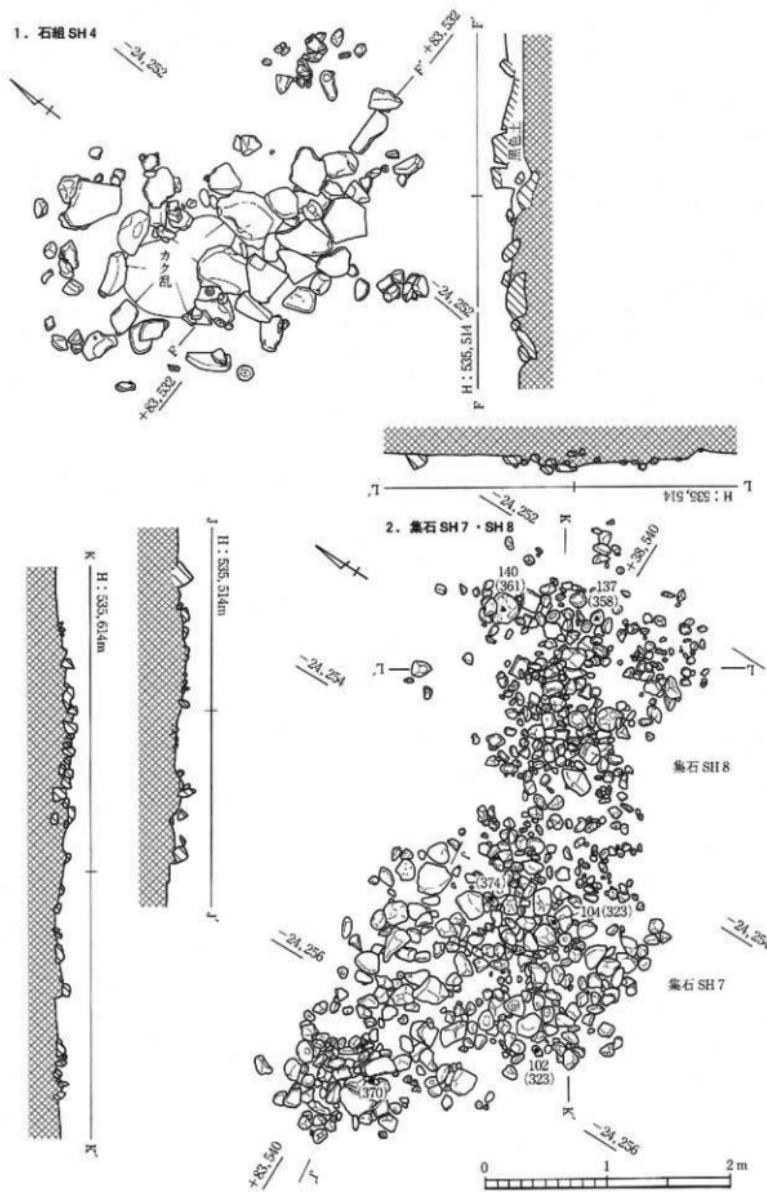


4. 石組 SH 6

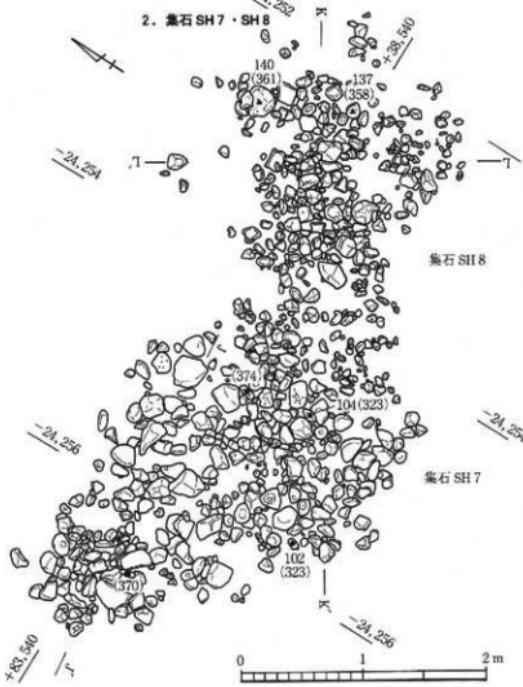


第12図 1. 石組 SH 1 2. 石組 SH 2、石組 SH 5 3. 石組 SH 3 4. 石組 SH 6 (1:40)

1. 石組 SH4

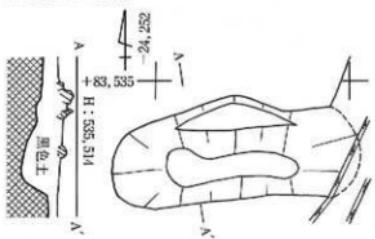


2. 集石 SH7・SH8

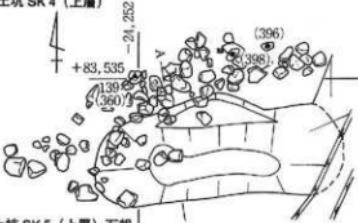


第13図 1. 石組 SH4 2. 集石 SH7・集石 SH8 (1:40)

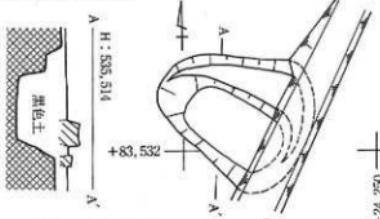
1. 土坑 SK 4 (下層)



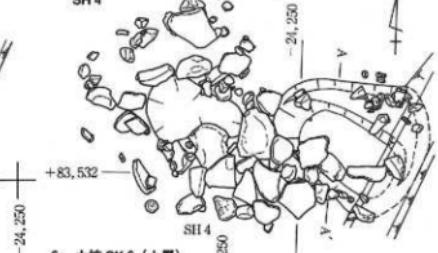
2. 土坑 SK 4 (上層)



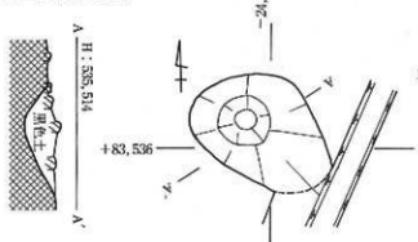
3. 土坑 SK 5 (下層)



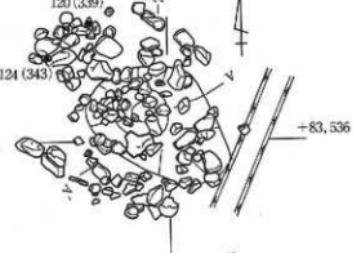
4. 土坑 SK 5 (上層) 石組 SH 4



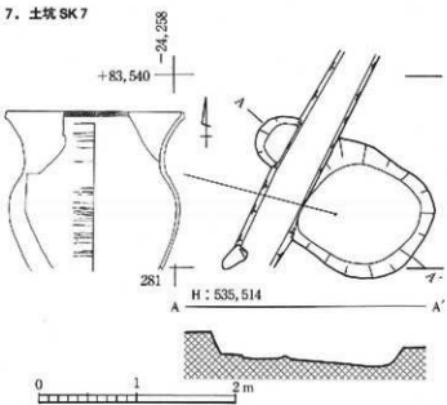
5. 土坑 SK 6 (下層)



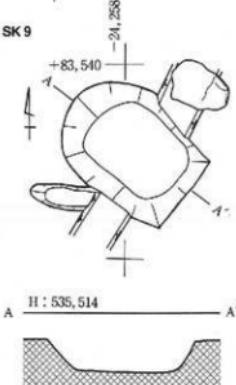
6. 土坑 SK 6 (上層)



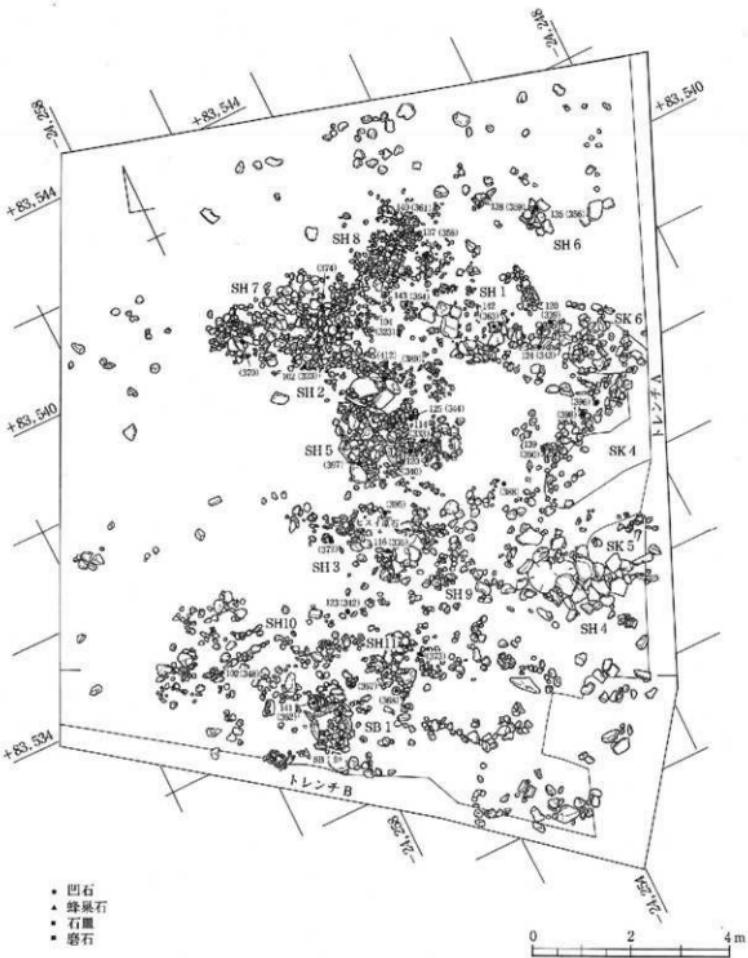
7. 土坑 SK 7



8. 土坑 SK 9

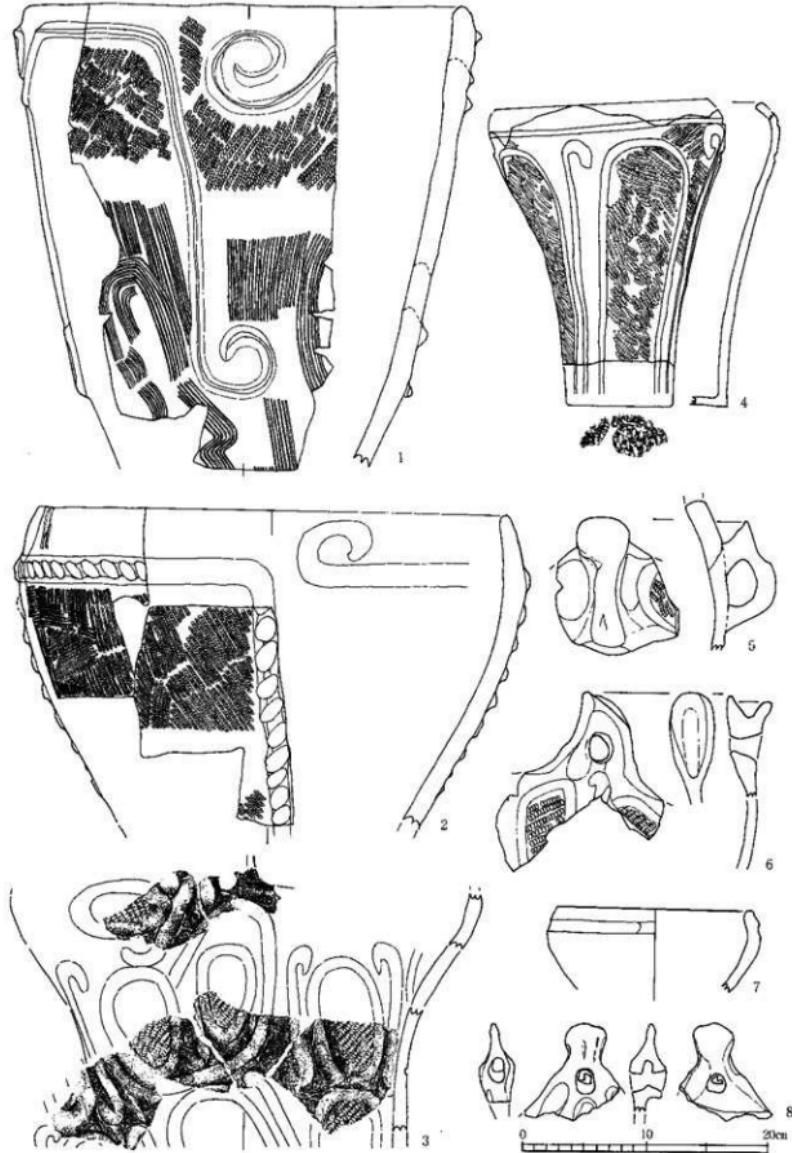


第14図 1. 土坑 SK 4 (下層) 2. 土坑 SK 4 (上層) 3. 土坑 SK 5 (下層) 4. 土坑 SK 5 (上層) 石組 SH 4  
5. 土坑 SK 6 (下層) 6. 土坑 SK 6 (上層) 7. 土坑 SK 7 8. 土坑 SK 9 (1:50)



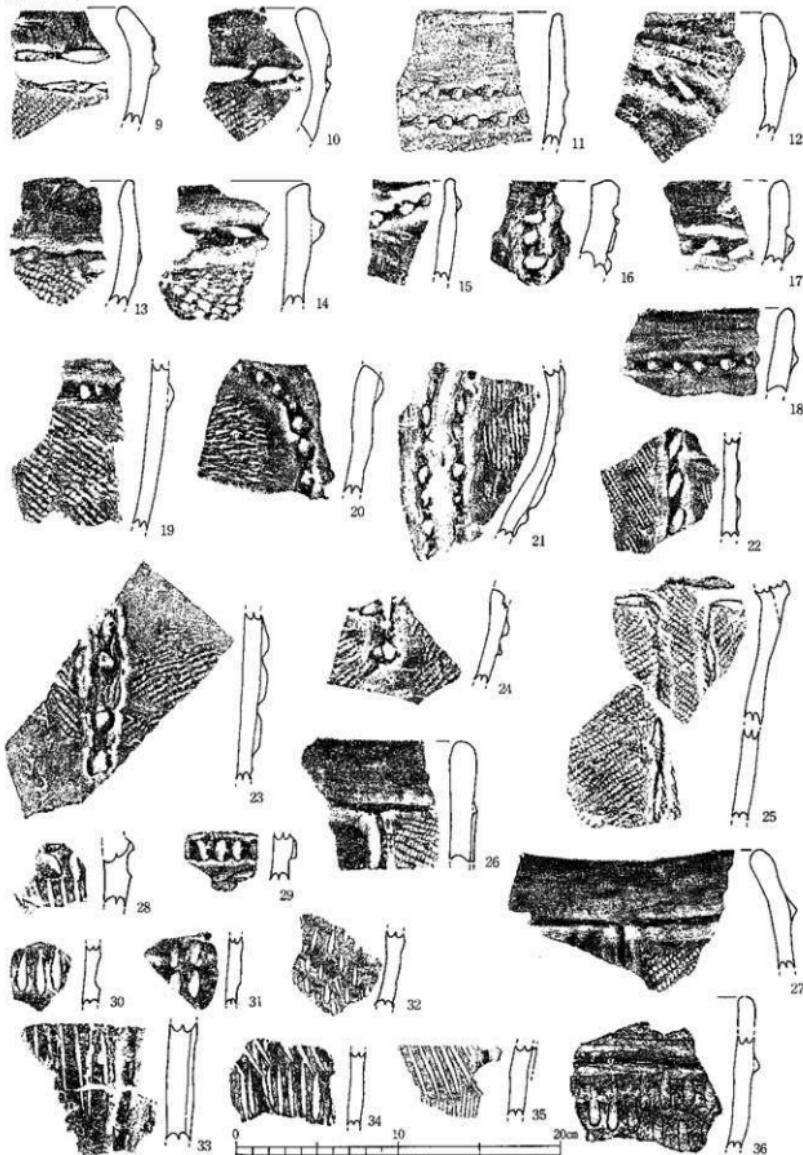
第15図 石組・集石群内の石器出土状態 (1 : 100)

整穴住居 SB 1



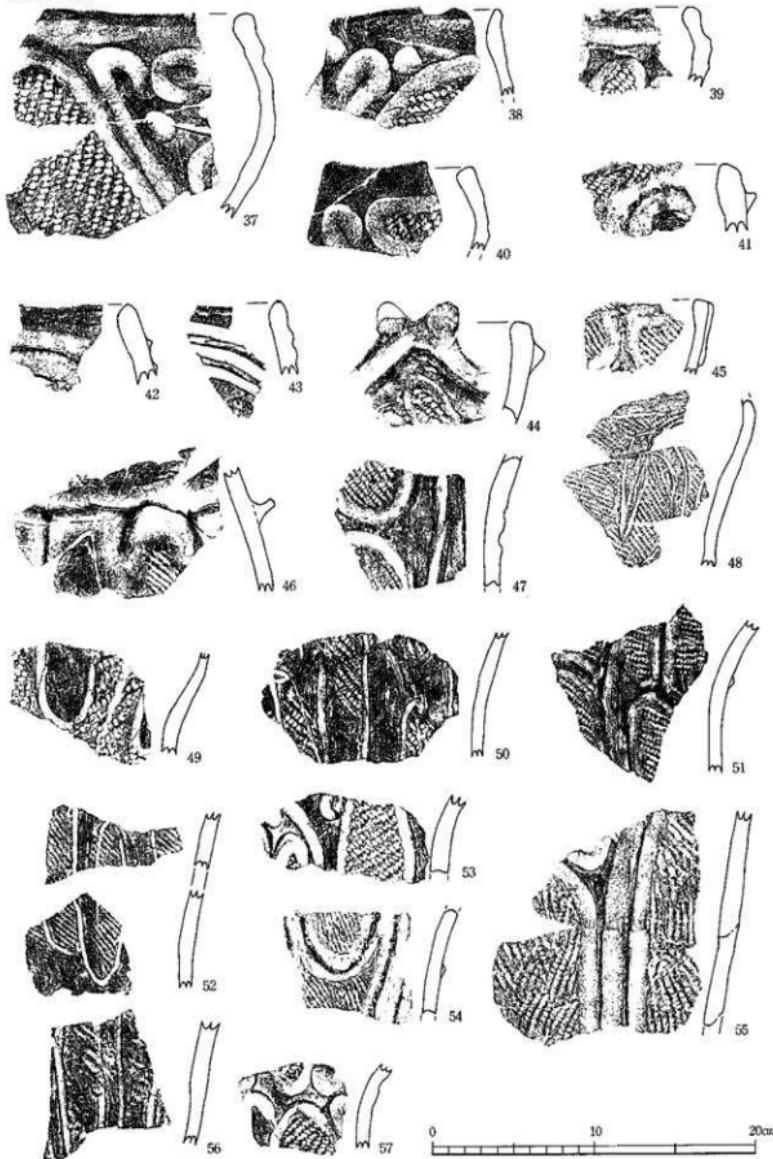
第16図 純文時代中期後器の土器 (1) (1:4)

堅穴住居 SB I



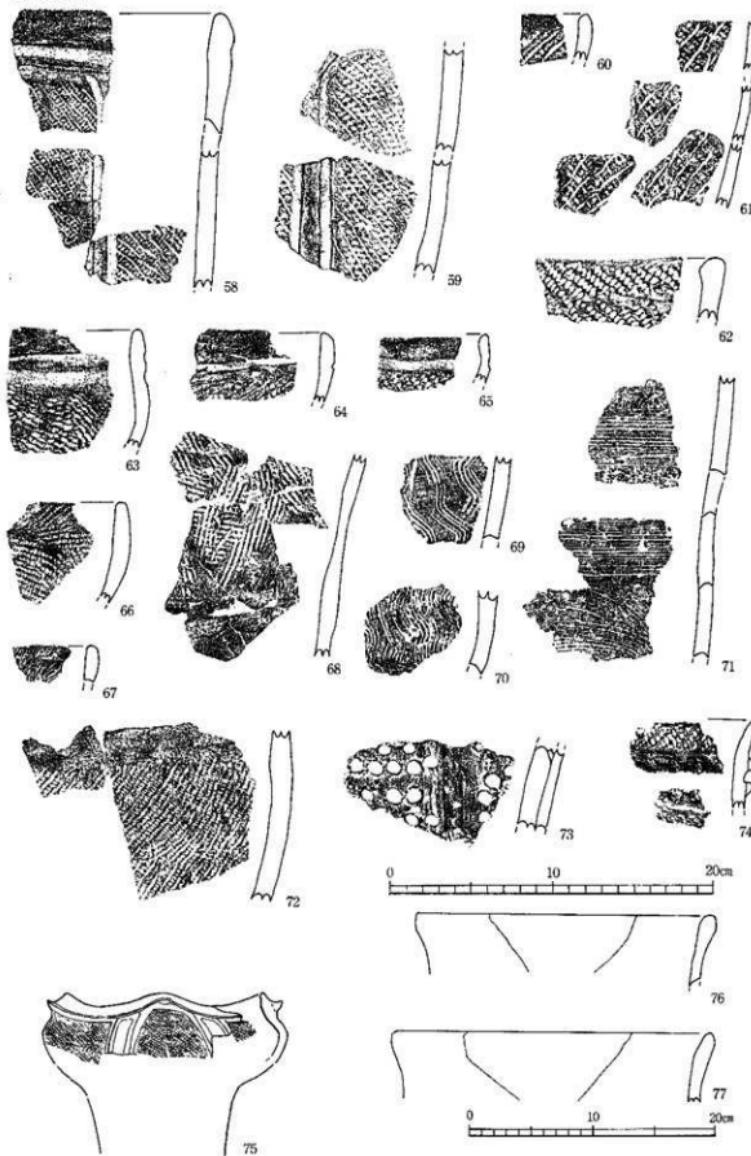
第17図 縄文時代中期後葉の土器（2）（1：3）

整穴住居 SB 1



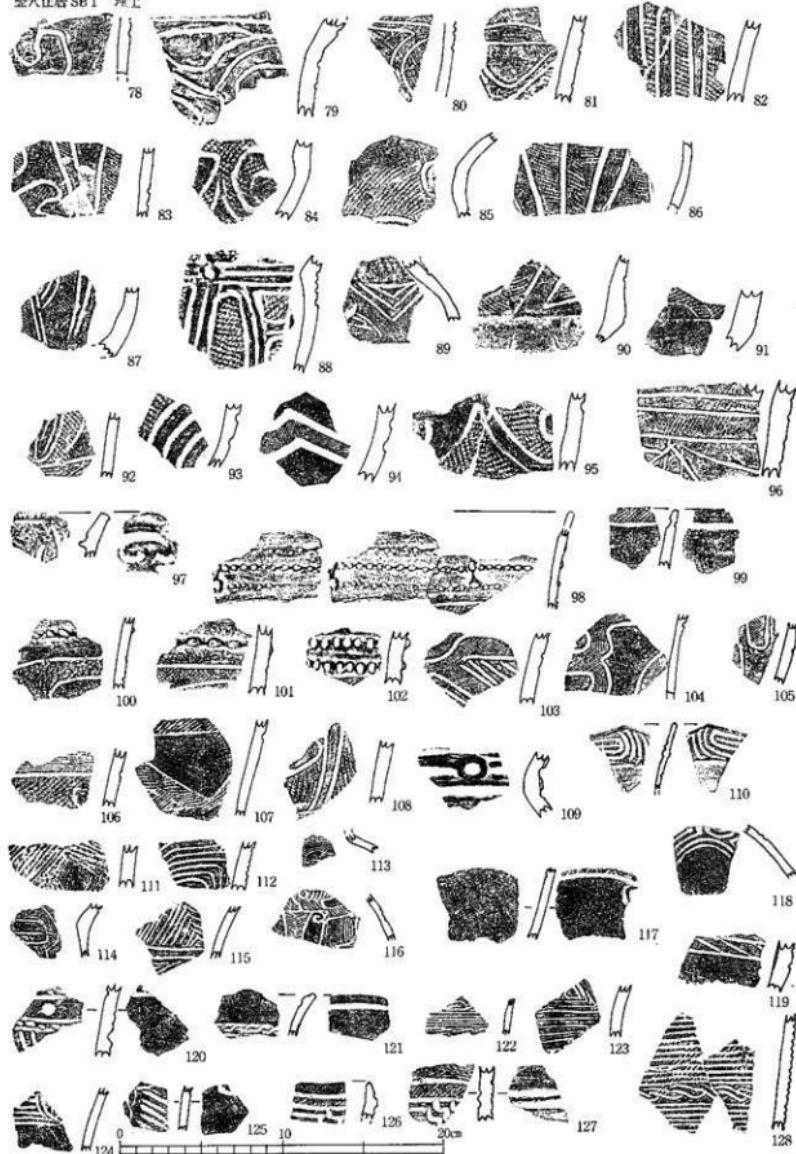
第18図 縄文時代中期後葉の土器 (3) (1 : 3)

整穴住居 SB 1



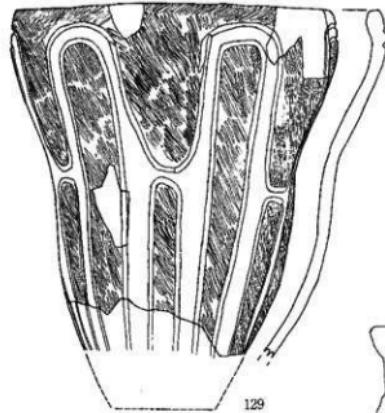
第19図 繩文時代中期後素の土器 (4) (1:3、1:4)

堅穴住居 SB 1 棚上

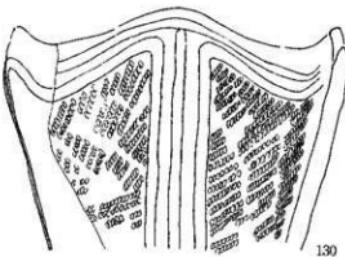


第20図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（1）（1：3）

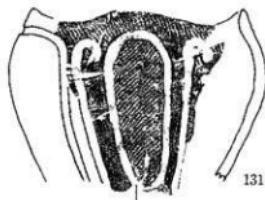
堅穴住居 SB.2



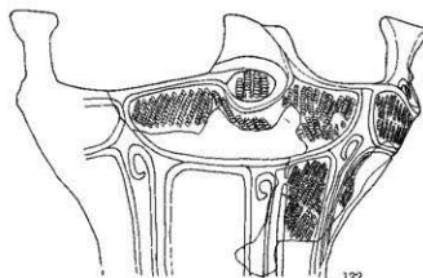
129



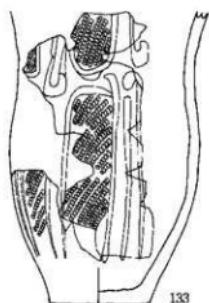
130



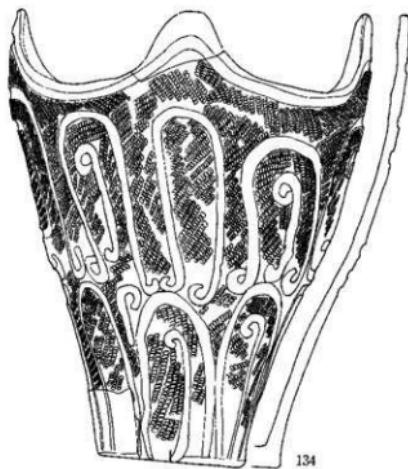
131



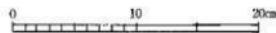
132



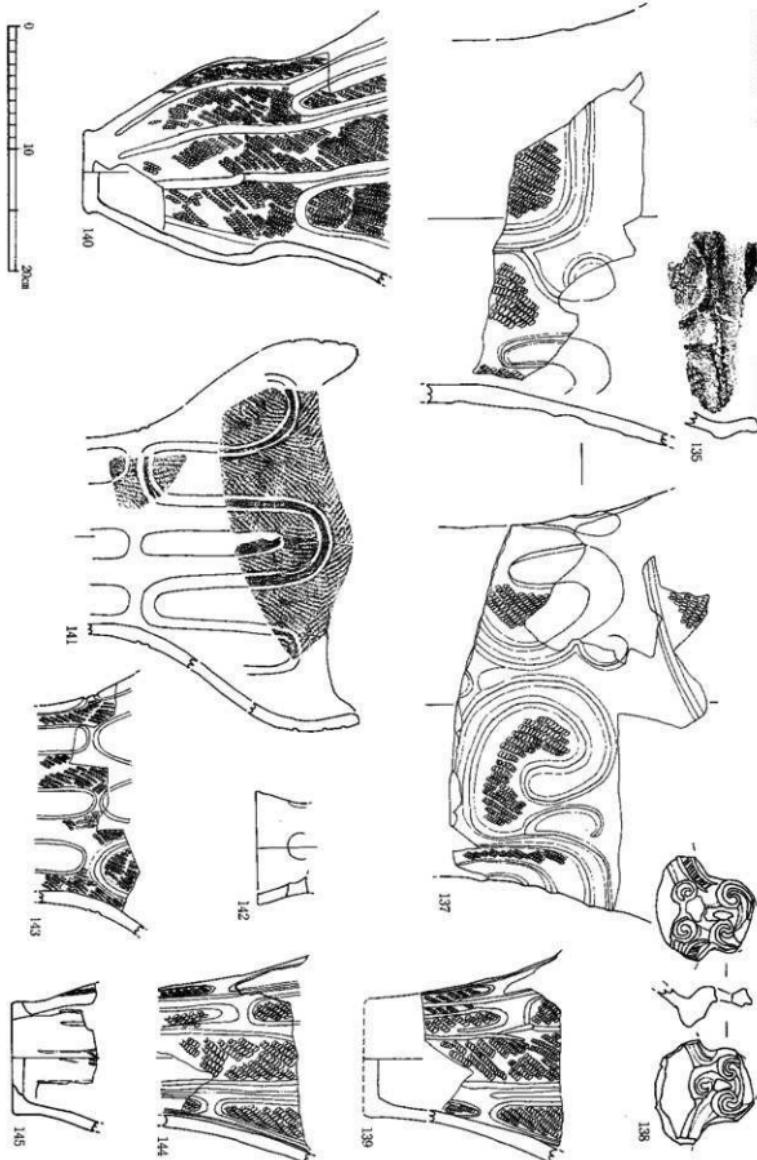
133



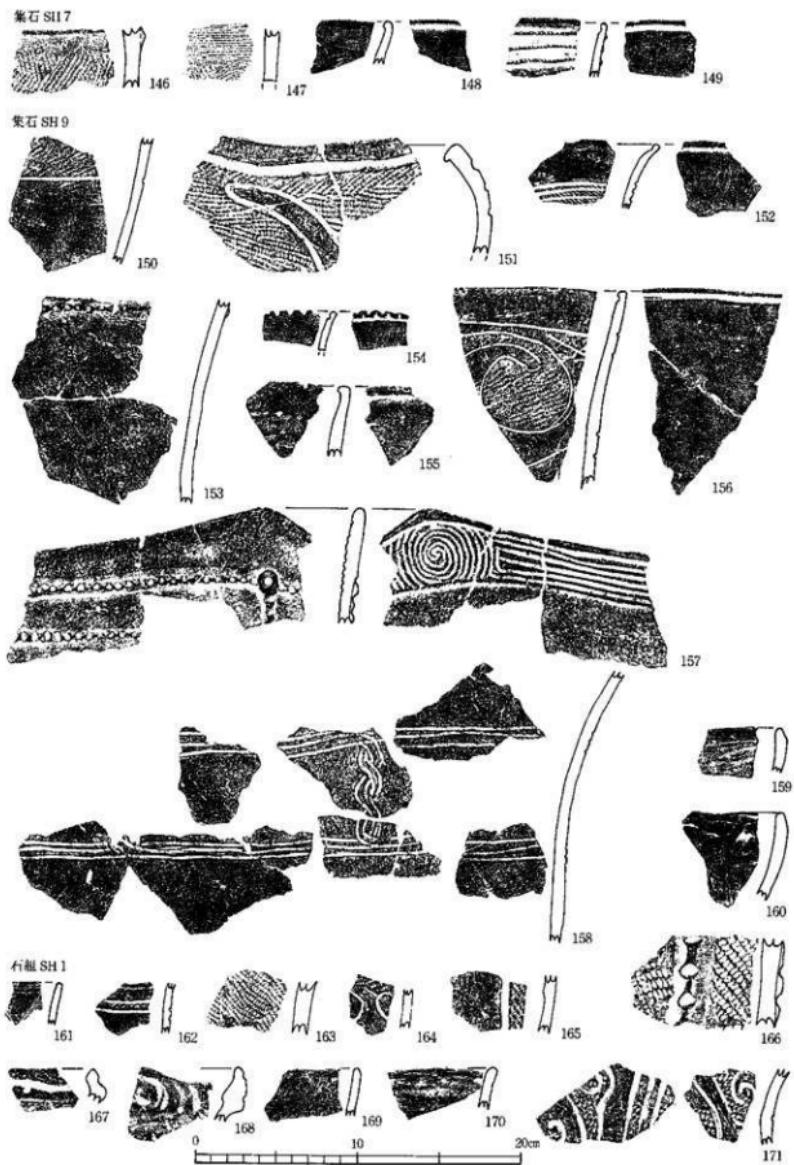
134



第21図 縄文時代中期後業の土器 (5) (1 : 4)

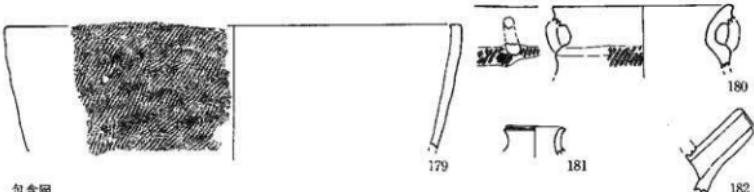
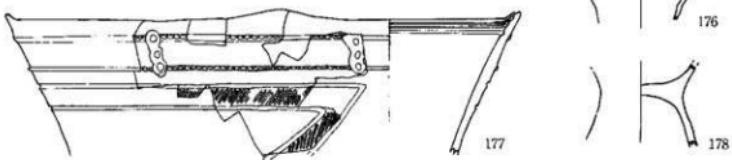
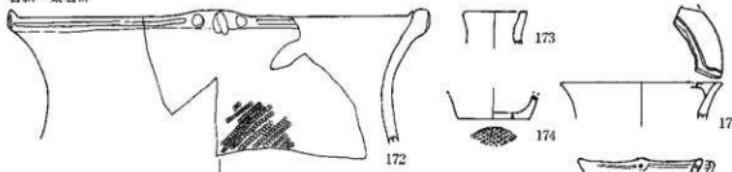


第22図 縄文時代中期後葉の土器（6）（1：4）

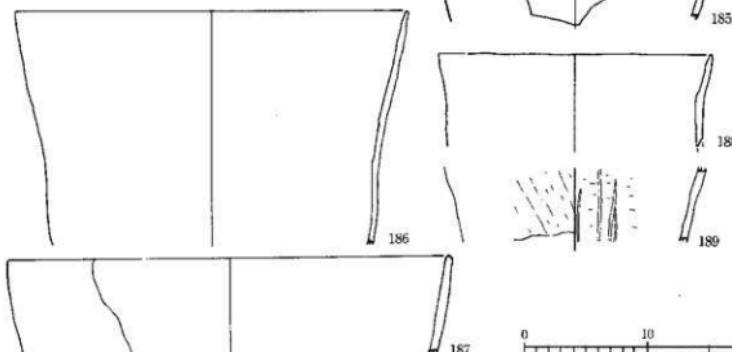
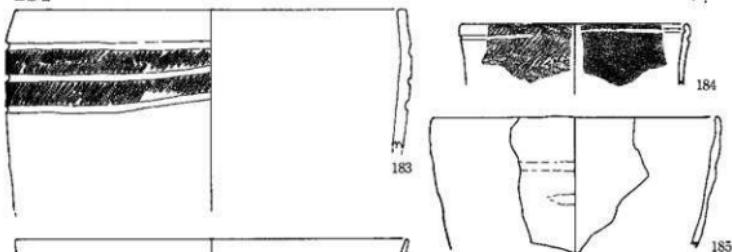


第23図 縄文時代中期後葉(7)・後期前葉～中葉(2)の土器(1:3)

石綱・朱石群



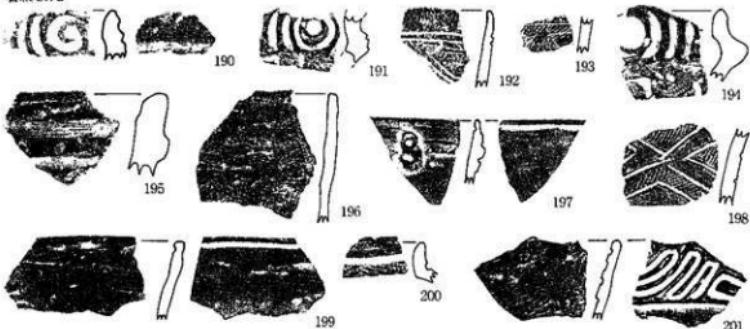
包含層



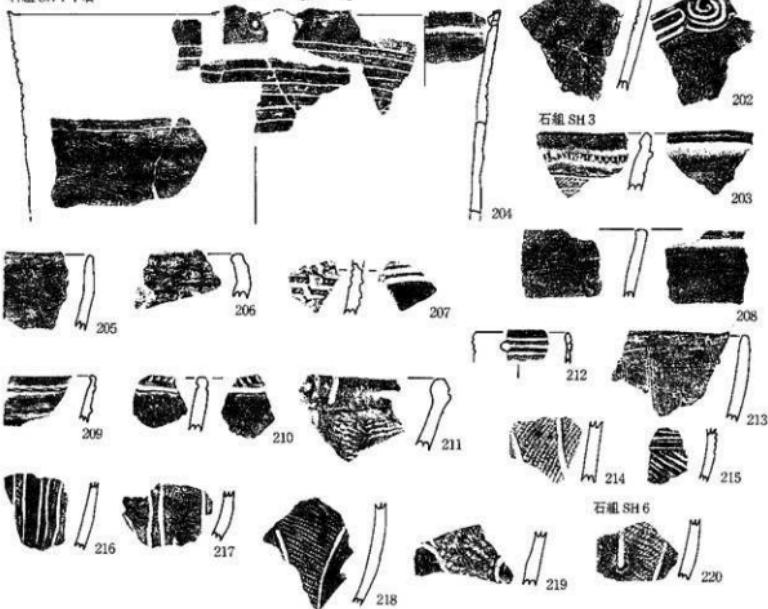
0 10 20cm

第24図 縄文時代後期前葉～中葉の土器（3）（1：4）

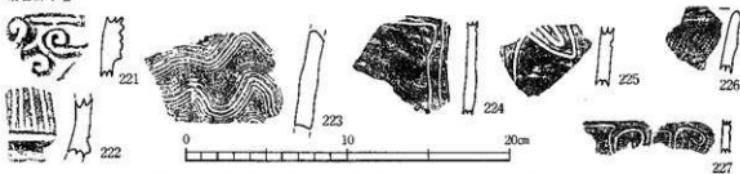
石組 SH 2



石組 SH 4 下層

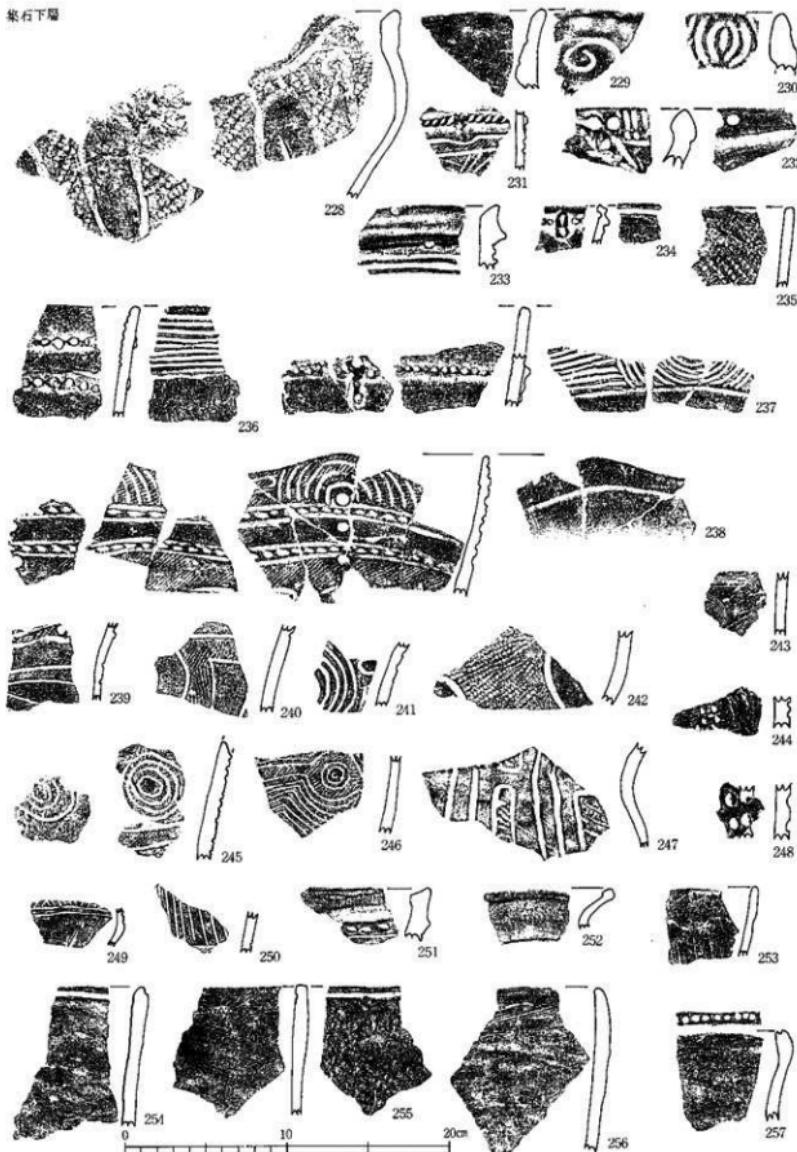


集石群下層

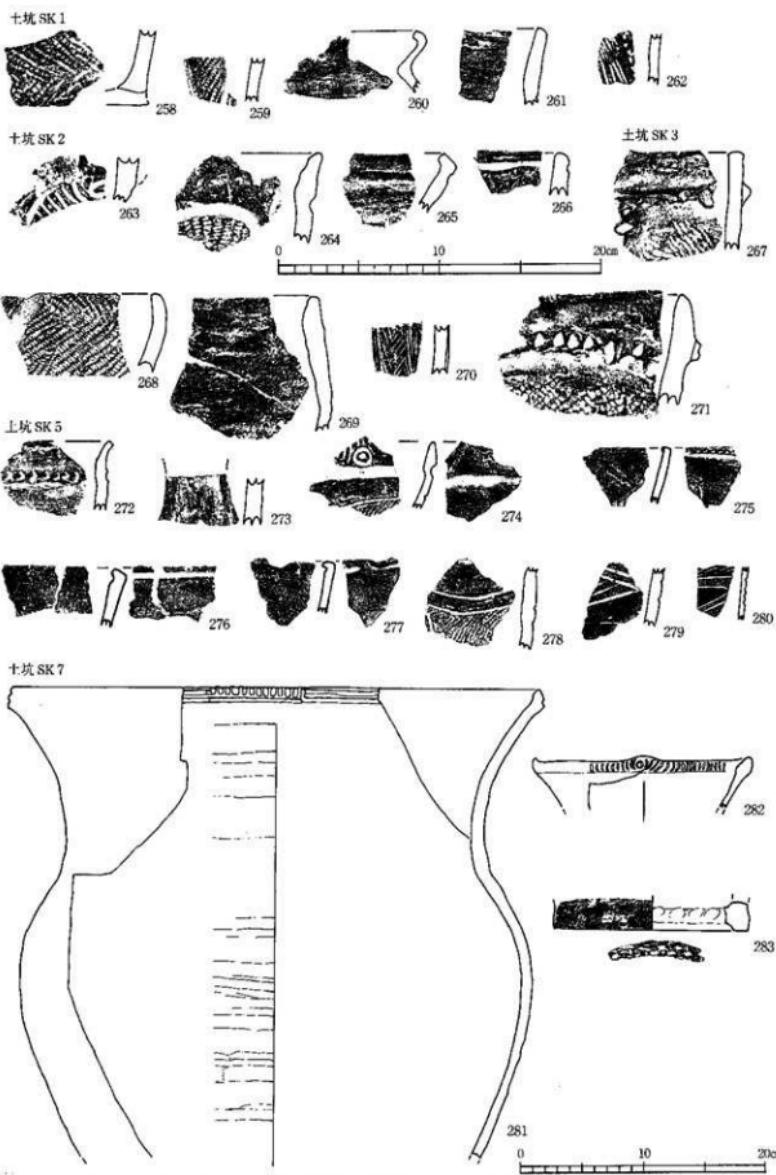


第25図 繩文時代中期後業（8）・後期前葉～中葉（4）の上器（1：3）

集石下層



第26図 繩文時代中期後葉(9)・後期前葉～中葉(5)の土器(1:3)

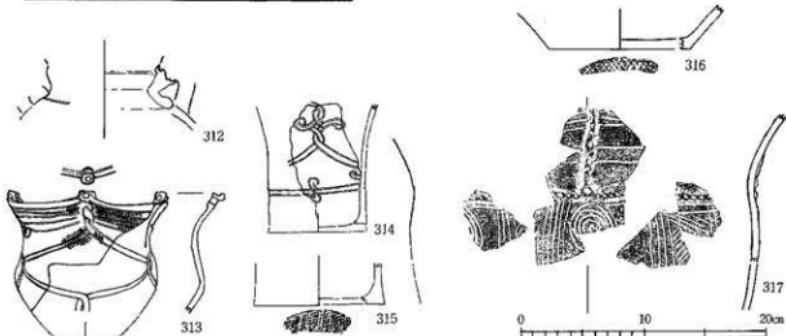


第27図 横文時代前期（1）・中期後葉（10）・後期前葉～中葉（6）の土器（1：3、1：4）

土坑 SK4

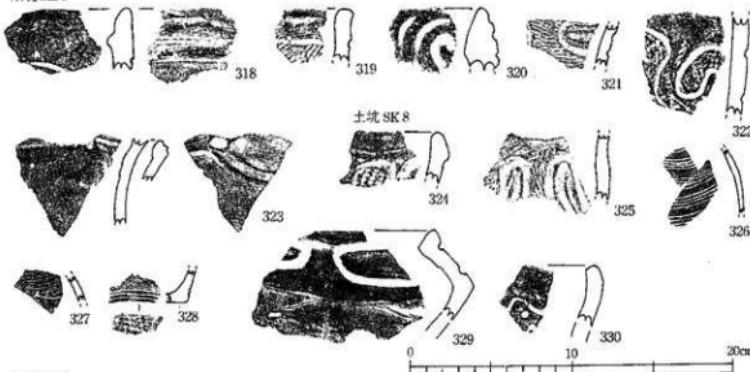


0 10 20cm

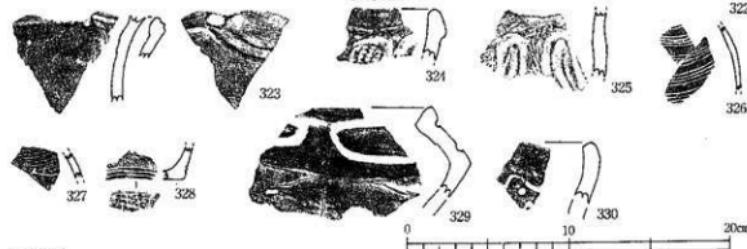


第28図 縄文時代中期後葉(11)・後期前葉～中葉(7)の土器(1:3、1:4)

土坑 SK 6



土坑 SK 8



土坑 SK 9

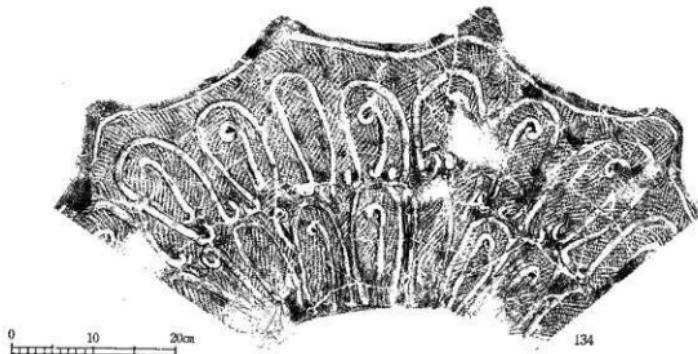
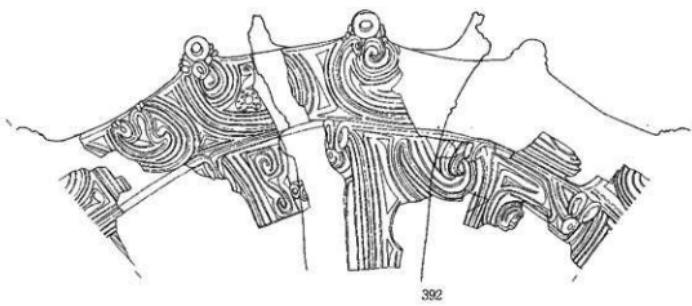
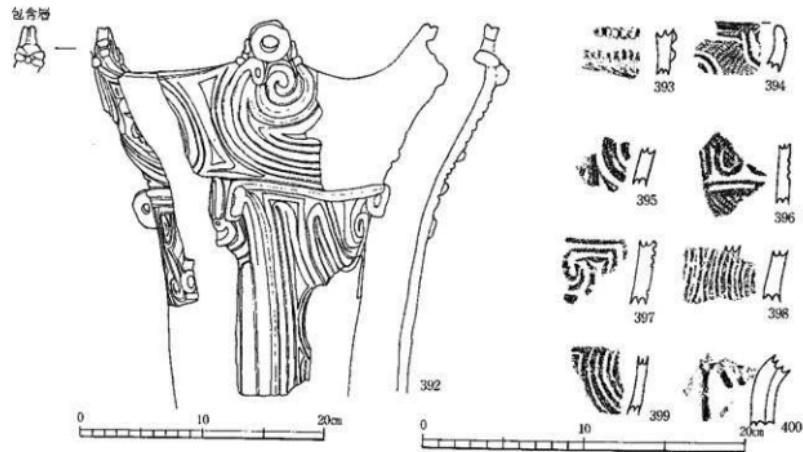


第29図 繩文時代中期前葉（1）・後葉（12）・後期前葉～中葉（8）の土器（1：3、1：4）

## 包含層

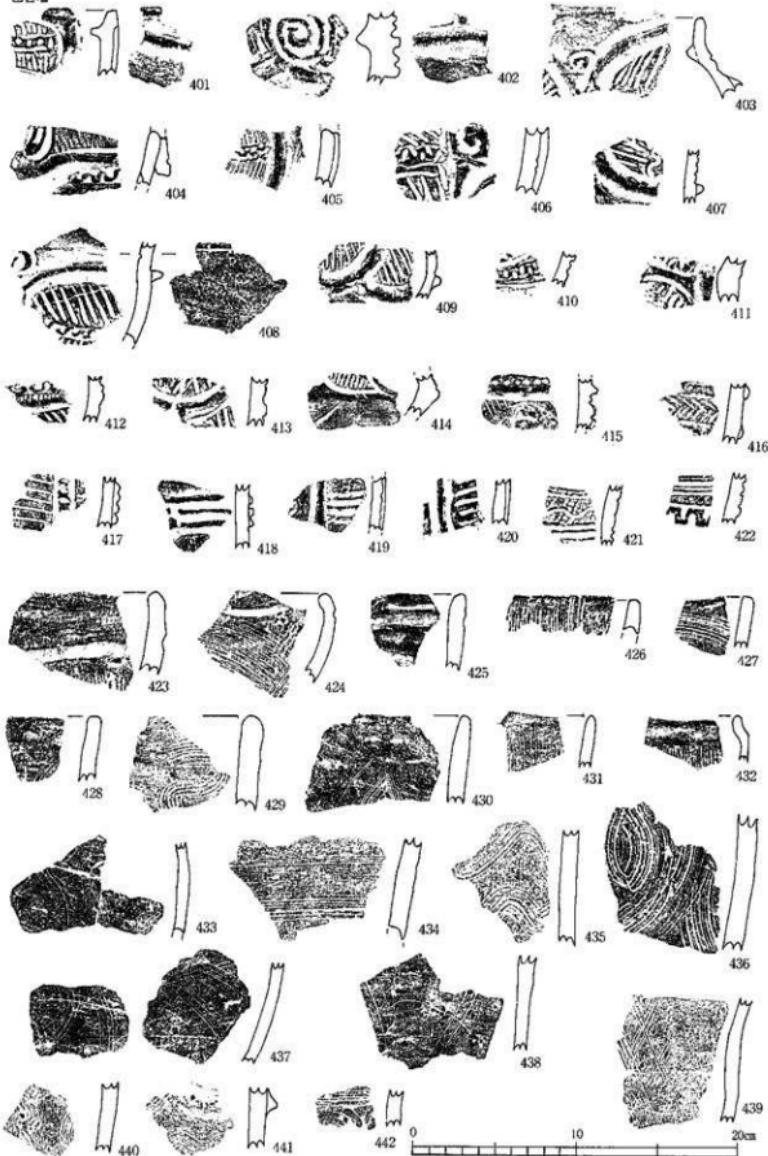


第30図 縄文時代前期（2）・中期前葉（2）の土器（1：3）

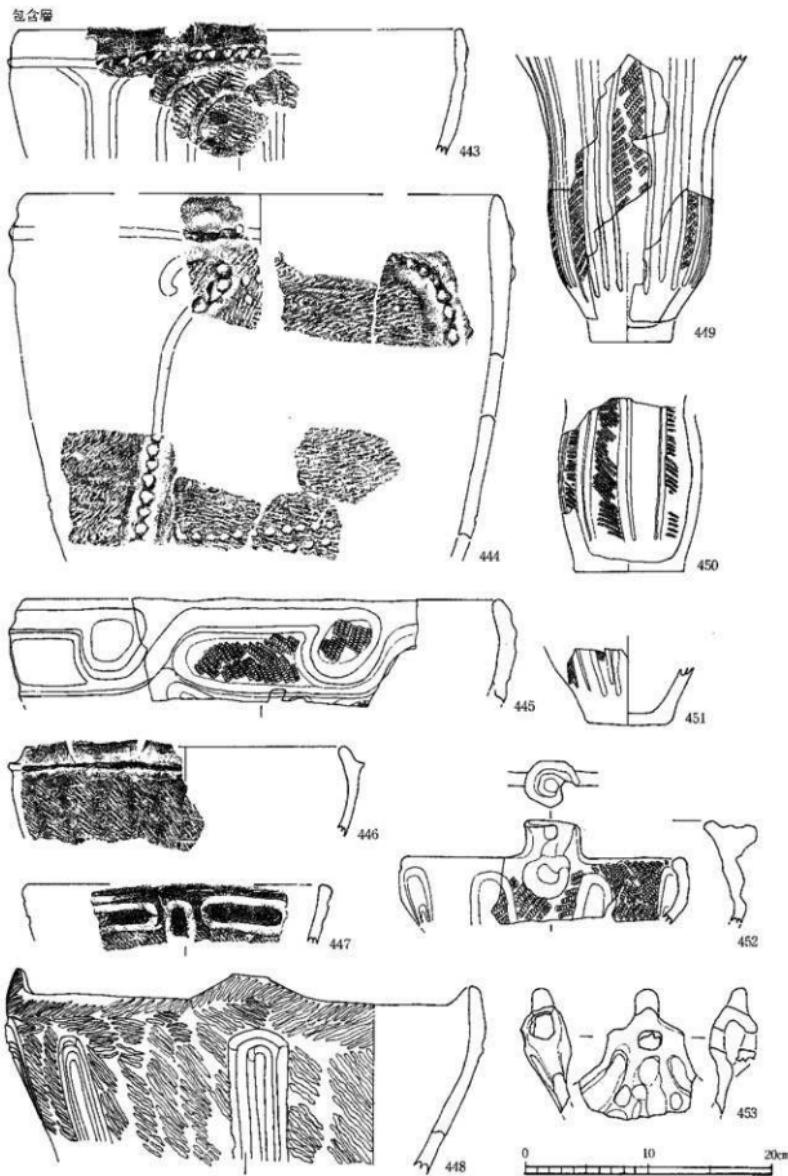


第31図 繩文時代中期前葉(3)・後葉(13)の土器(1:3、1:6)

包含層

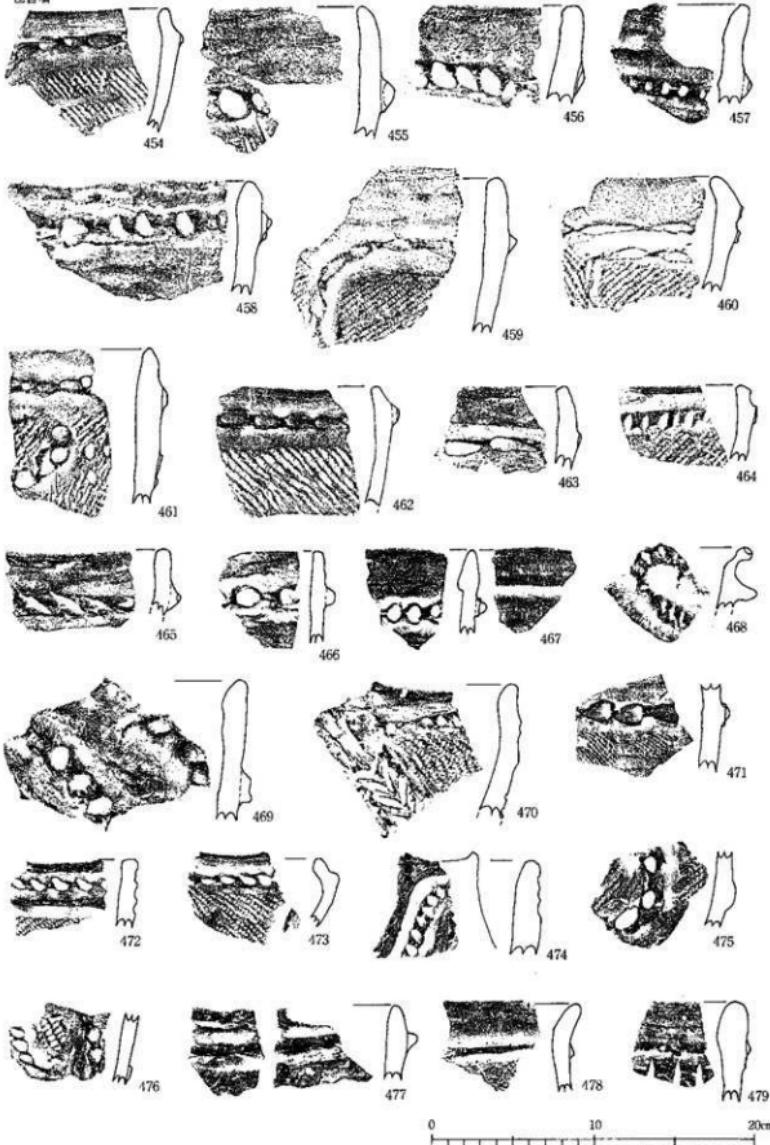


第32図 純文時代中期中葉（1）・後葉（14）の土器（1：3）



第33図 縄文時代中期後業の土器(15)(1:4)

包含物

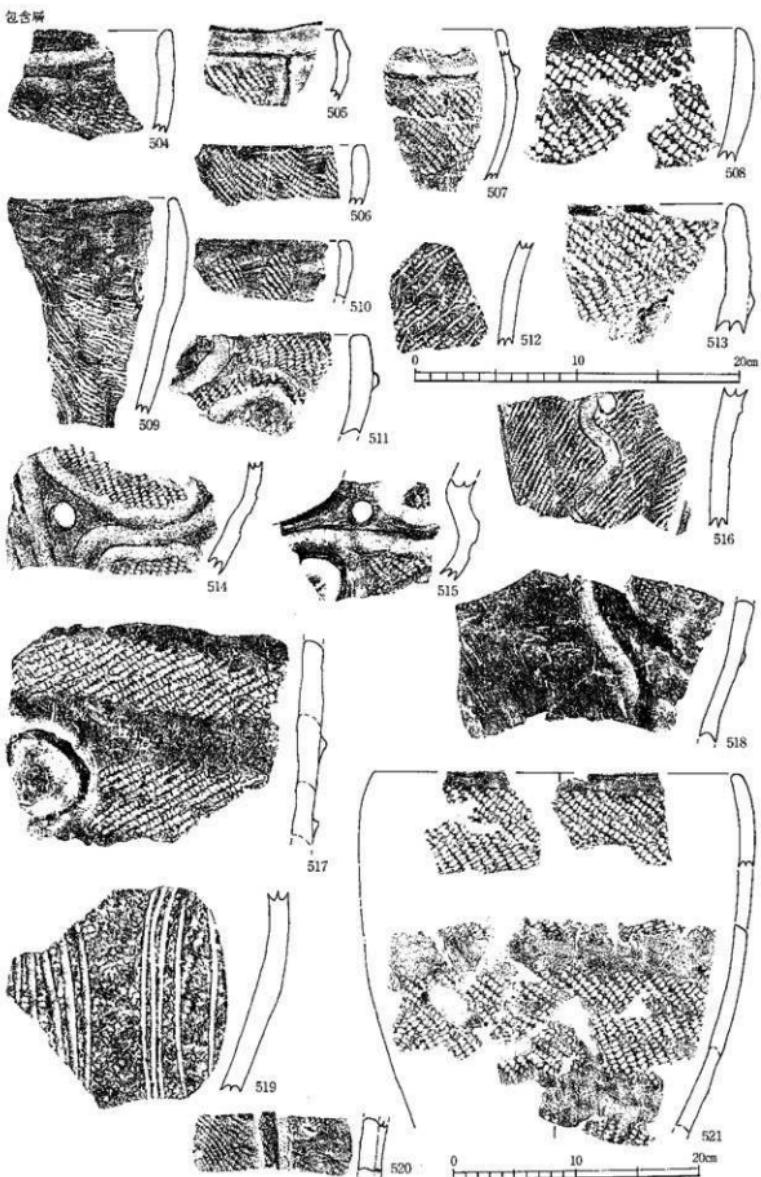


第34図 縄文時代中期後葉の土器 (16) (1 : 3)

包含層



第35図 總文時代中期後葉の土器 (17) (1 : 3)

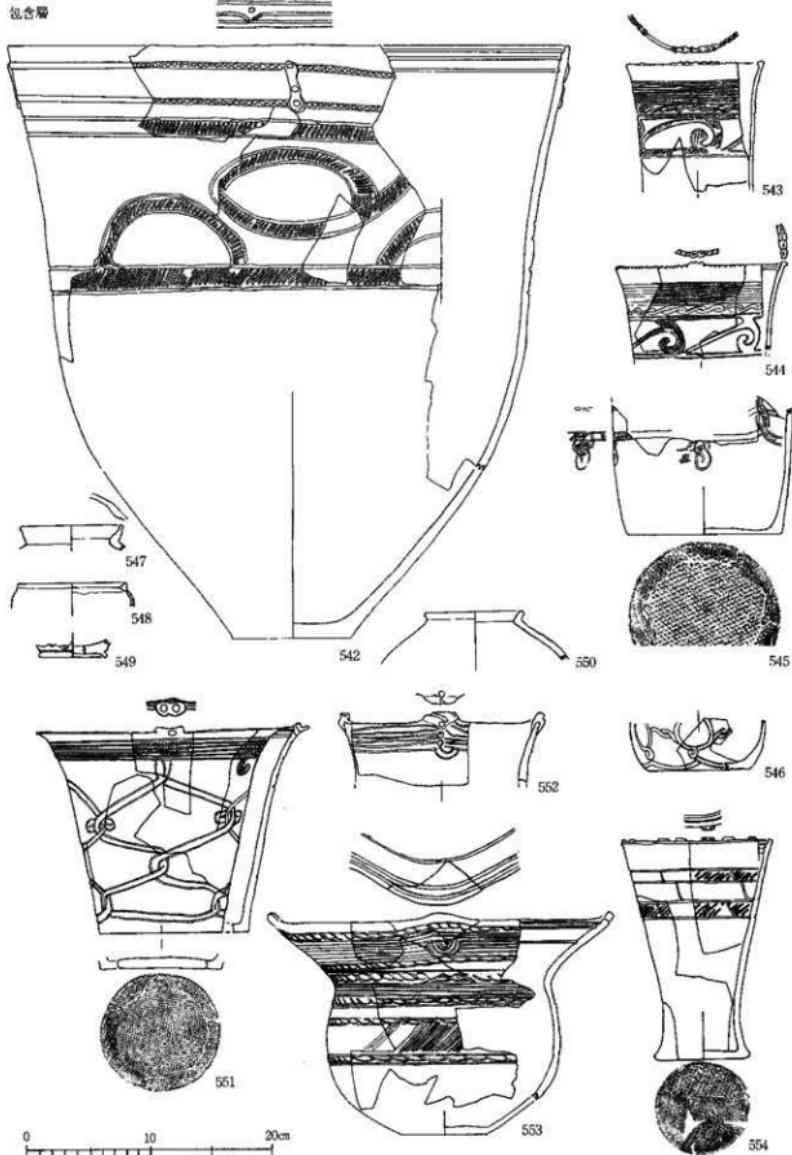


第36図 繩文時代中期後葉の土器 (18) (1 : 3, 1 : 4)

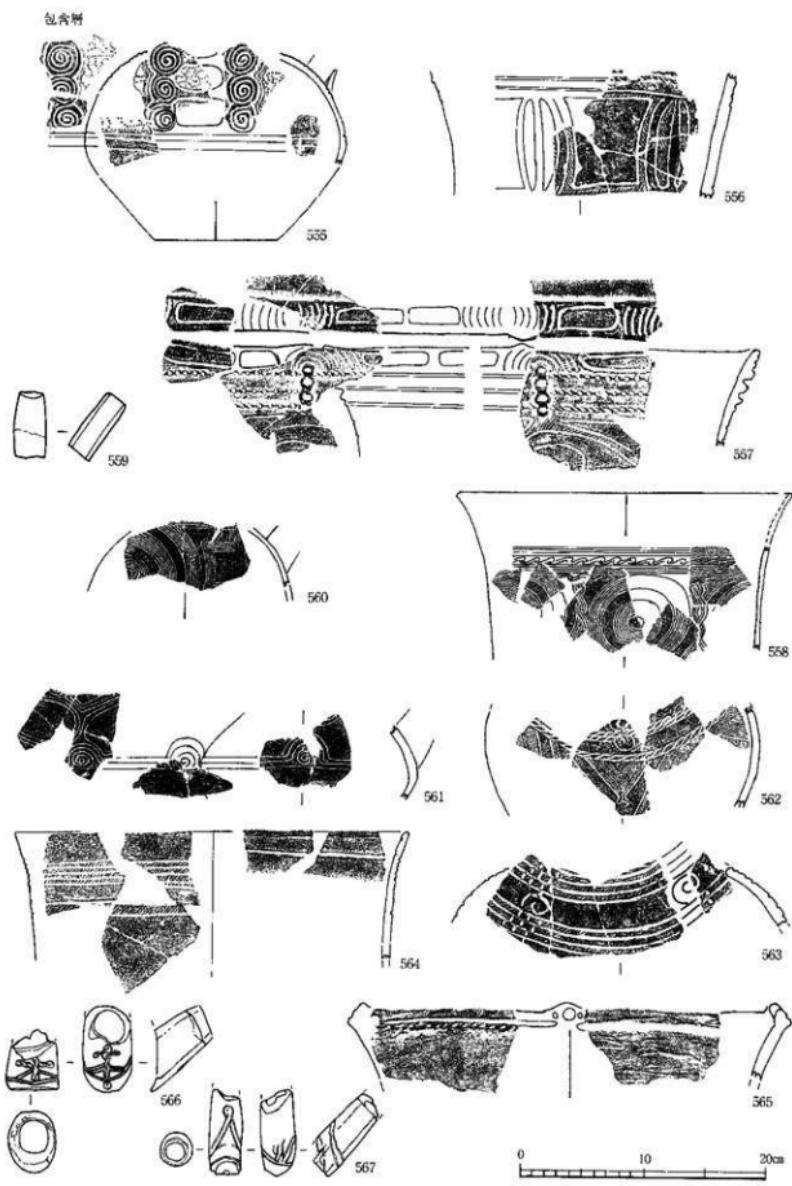


第37図 純文時代後期前業～中業の土器 (9) (1:4)

包含層

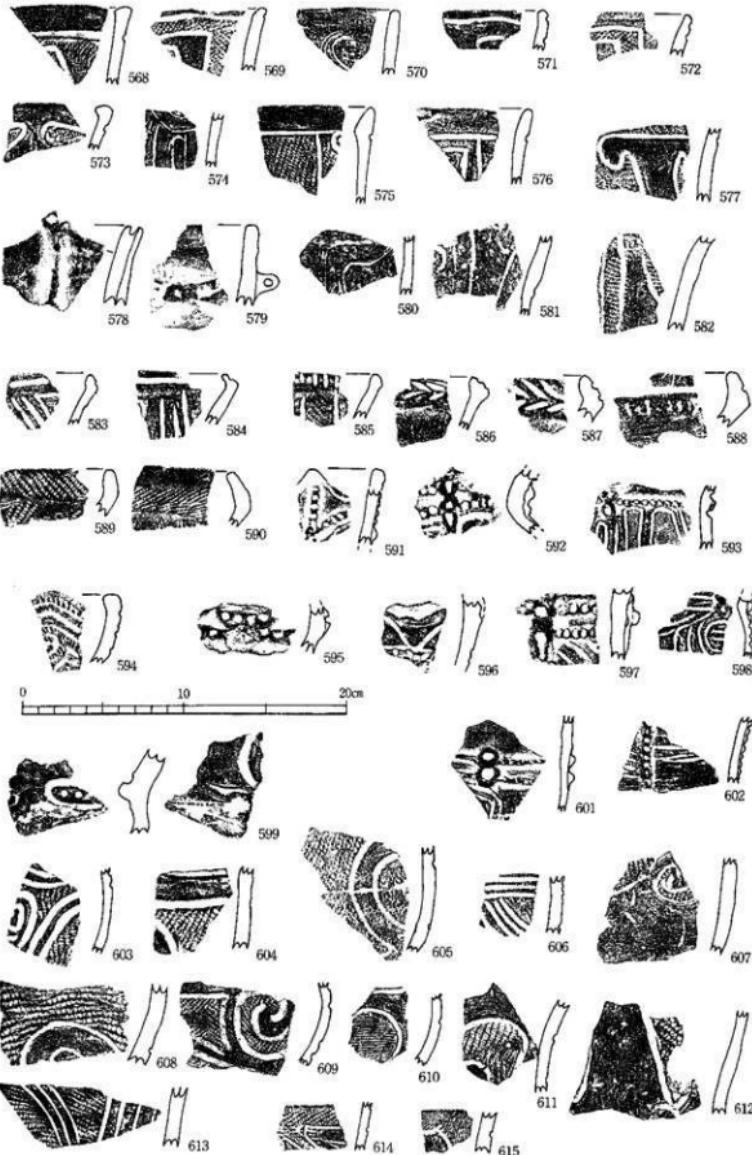


第38図 純文時代後期前葉～中葉の土器 (10) (1 : 4)

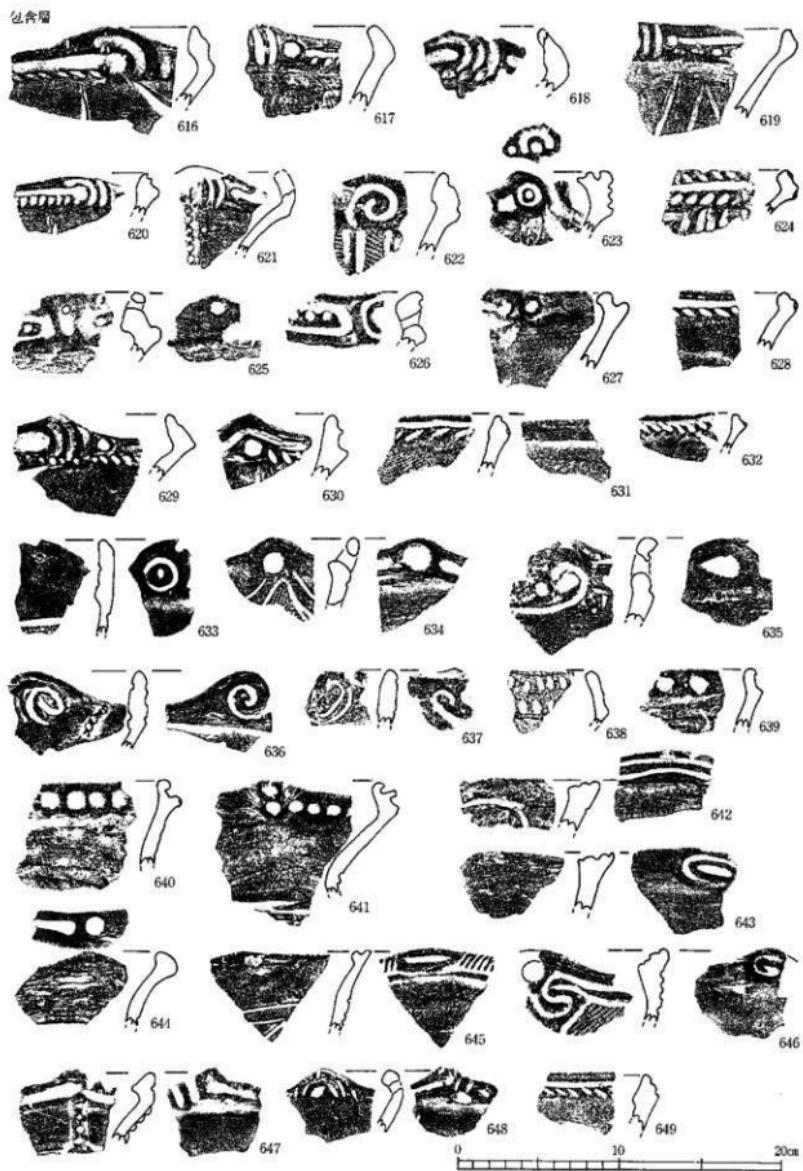


第39図 縄文時代後期前葉～中葉の土器 (11) (1 : 4)

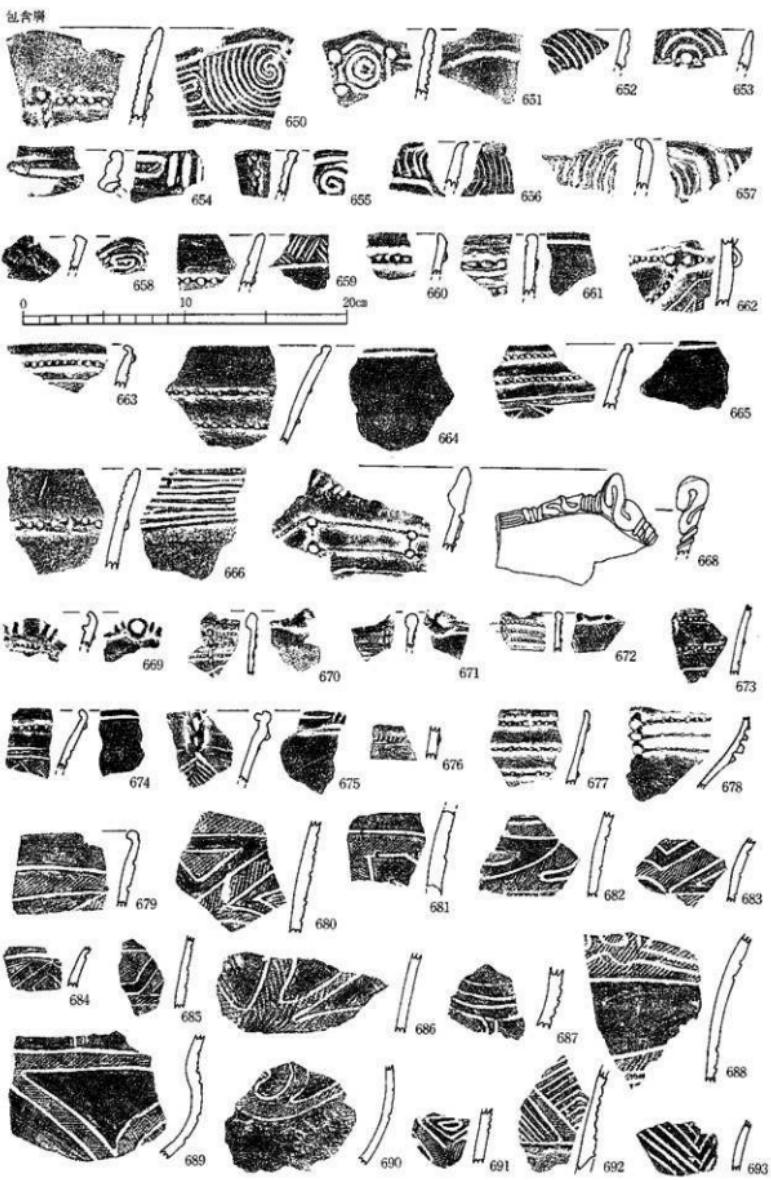
包含層



第40図 縄文時代後期前葉～中葉の土器 (12) (1 : 3)

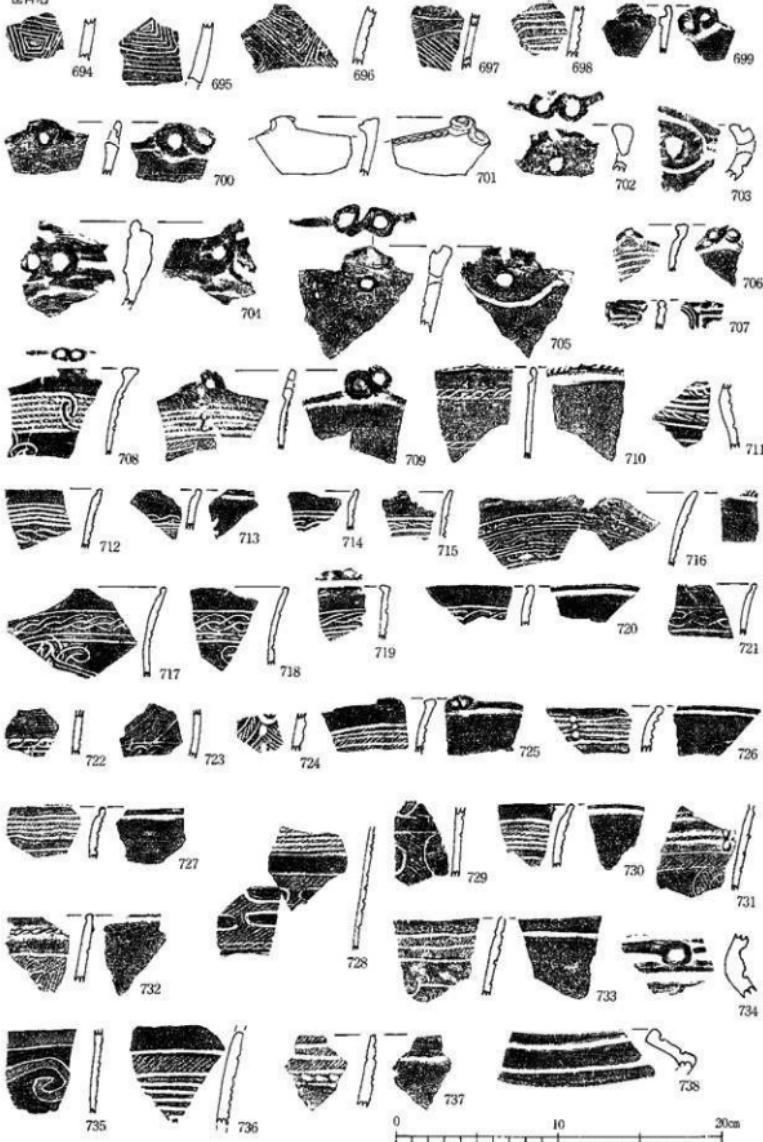


第41図 純文時代後期前葉～中葉の土器 (13) (1 : 3)

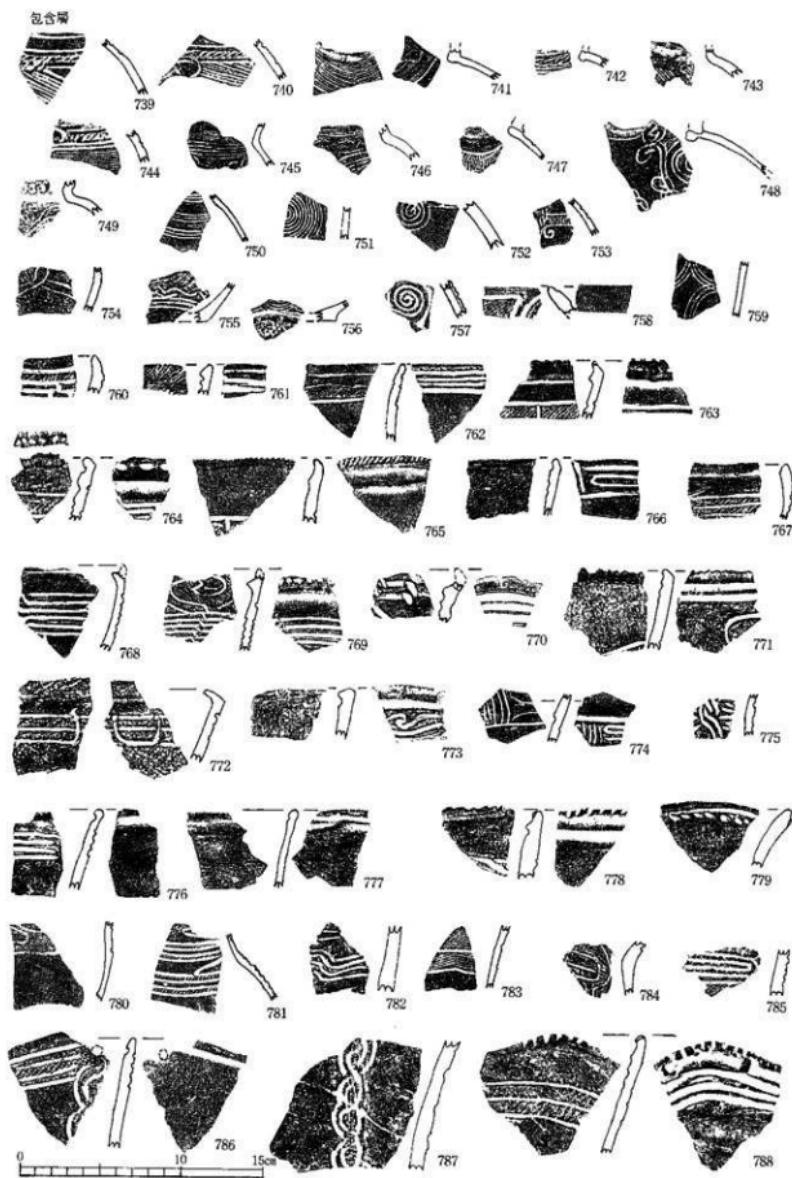


第42図 桶文時代後期前葉～中葉の上器 (14) (1 : 3)

## 包含層

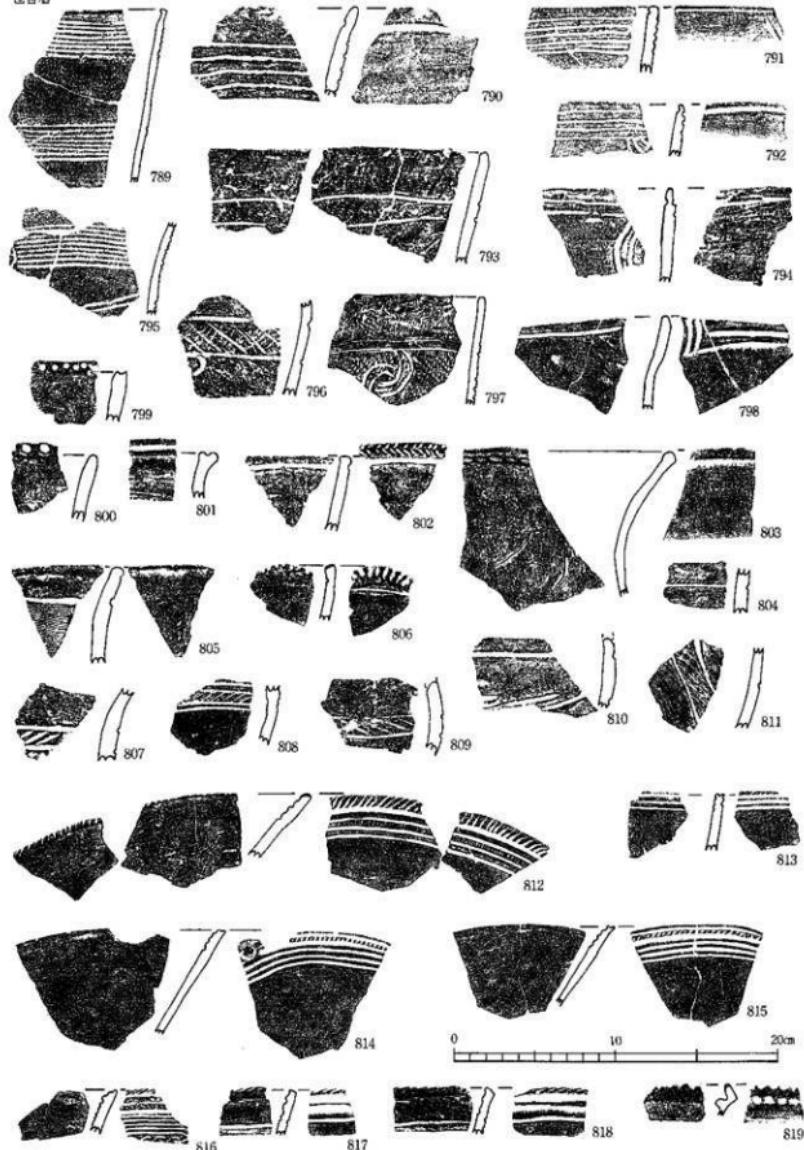


第43図 縄文時代後期前秦～中秦の土器 (15) (1 : 3)



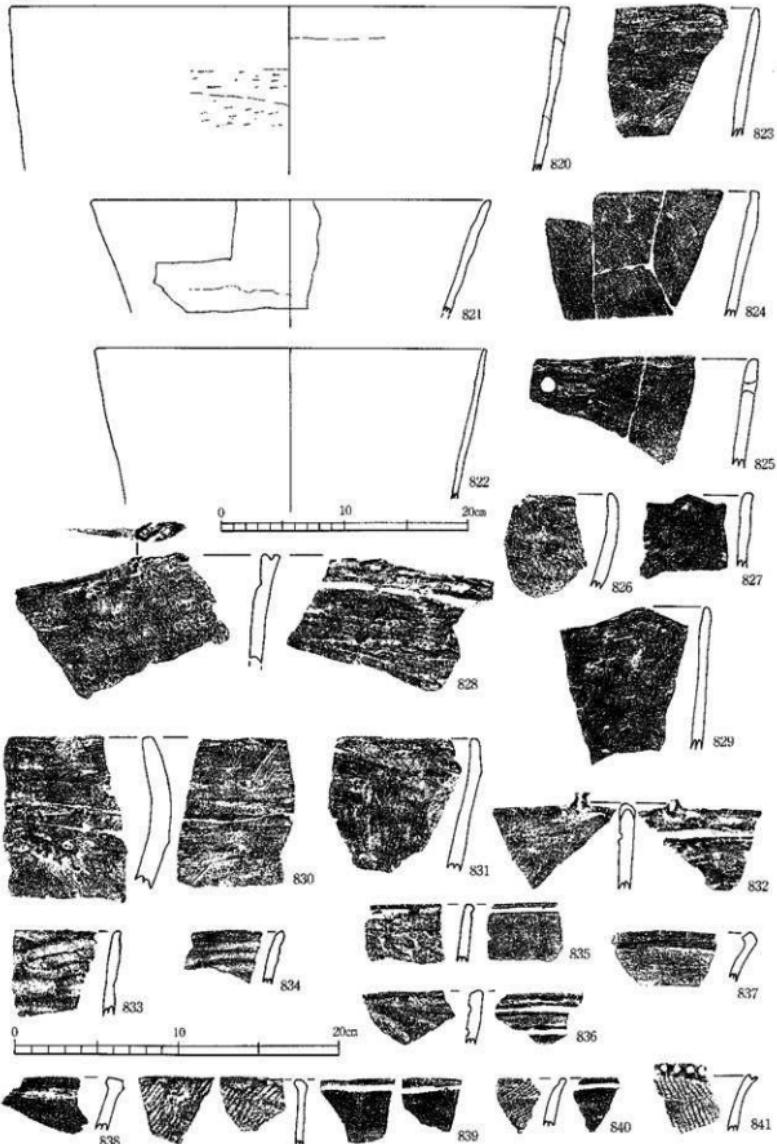
第44図 純文時代後期前業－中葉の土器 (16) (1 : 3)

包含層

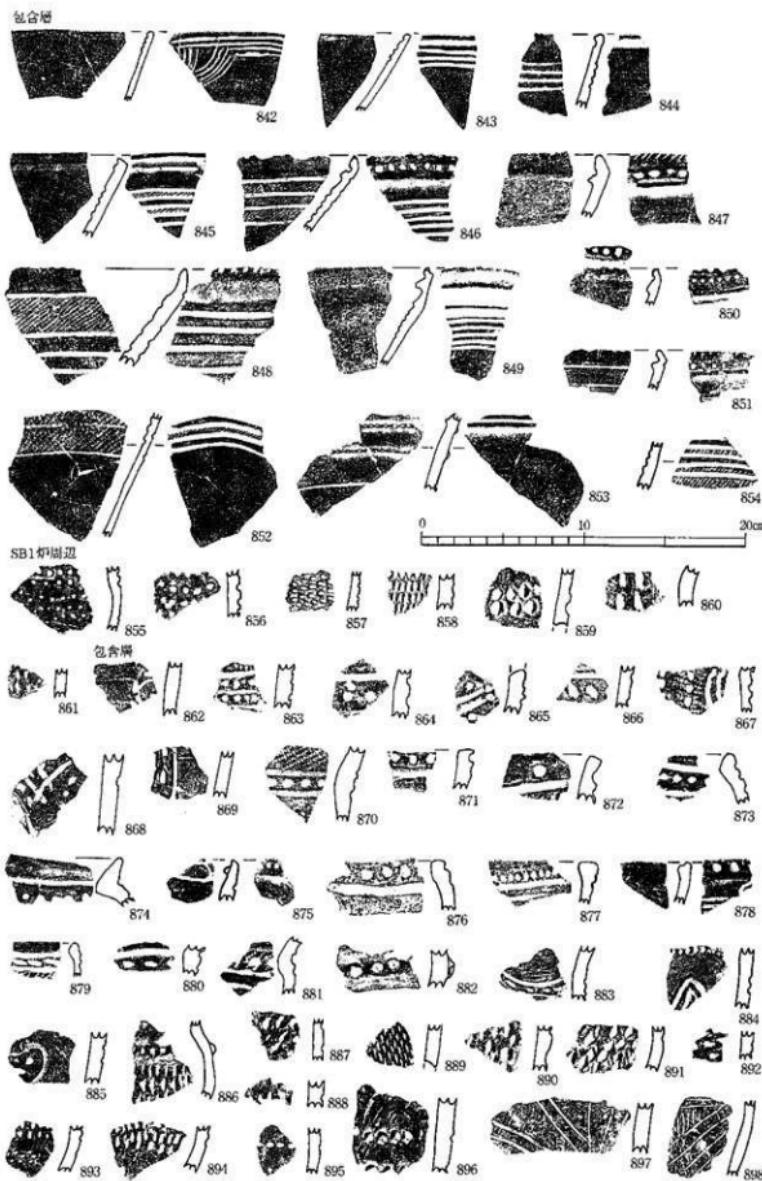


第45図 純文時代後期前葉～中葉の上器 (17) (1 : 3)

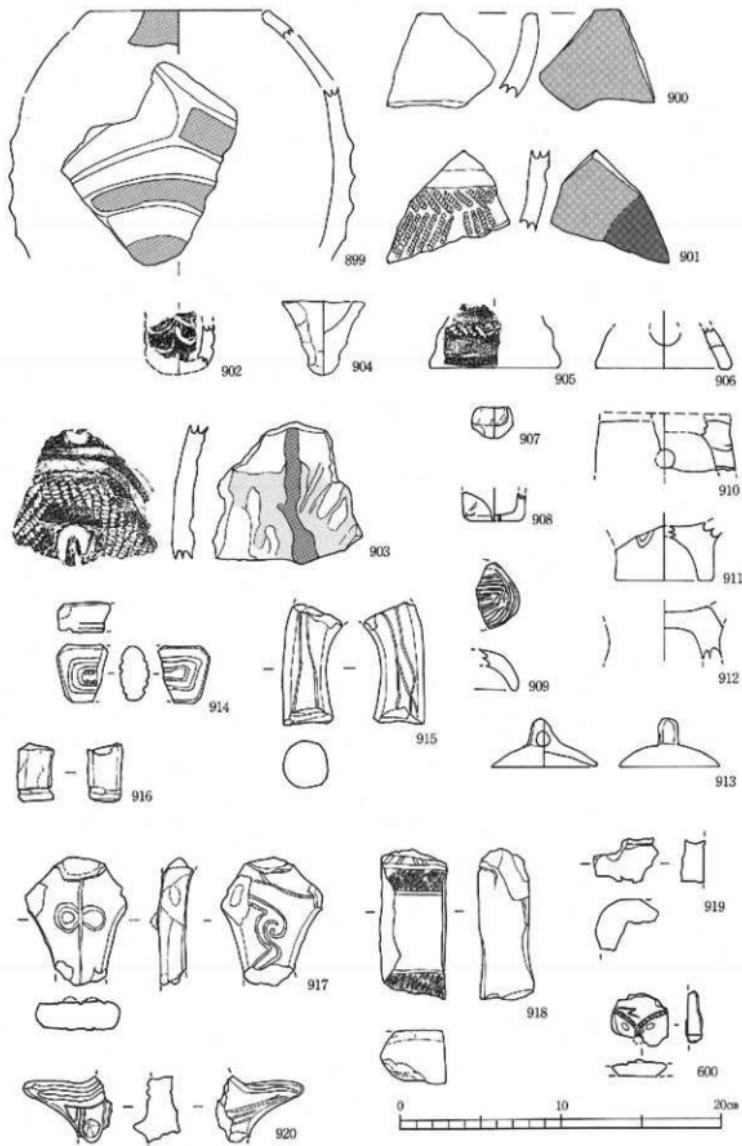
包含層



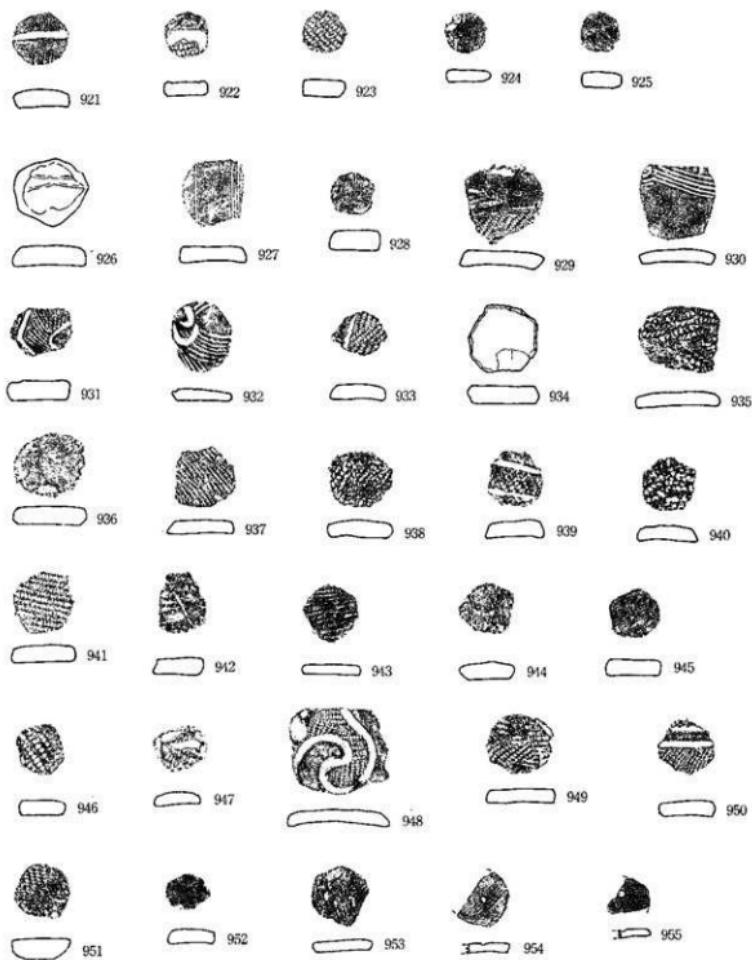
第46図 縄文時代後期前葉～中葉の土器 (18) (1 : 4, 1 : 3)



第17図 繩文時代後期前業～中葉の土器 (19) (1 : 3)

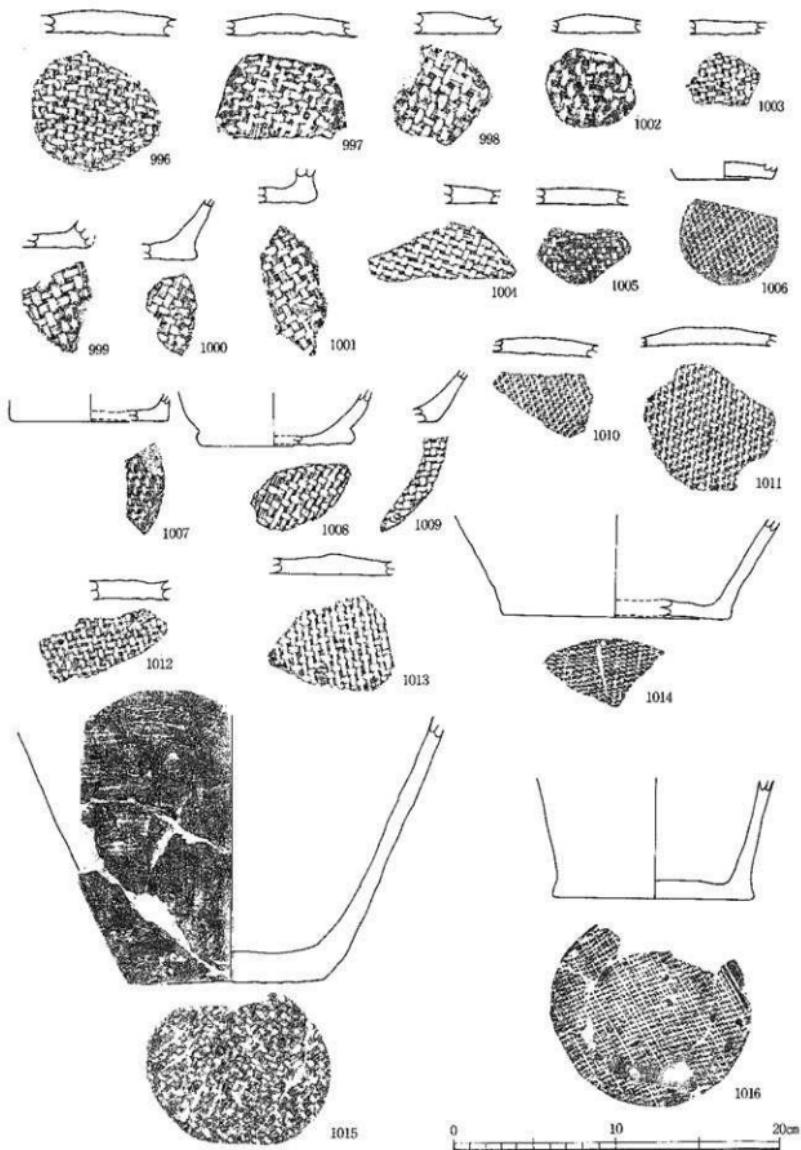


第48図 繩文時代の彩色土器・ミニチュア土器・台付土器・器台・土偶など (1 : 3)

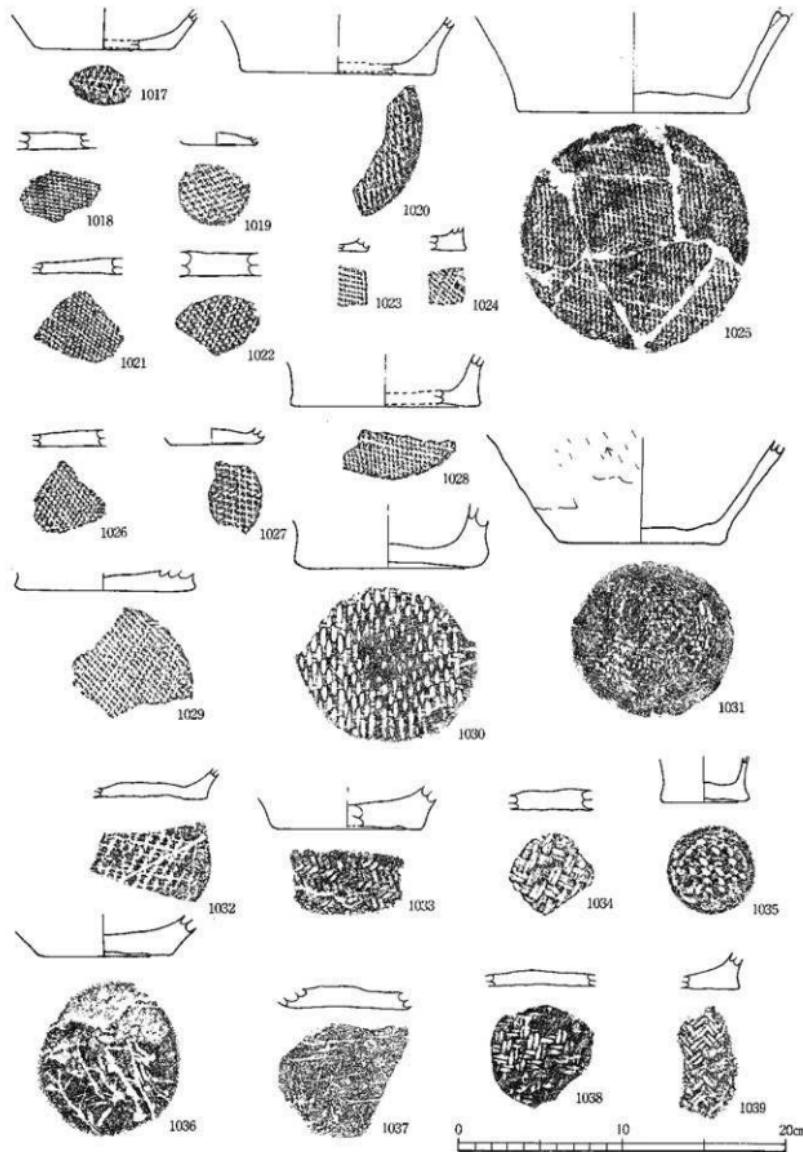


0 10 20cm

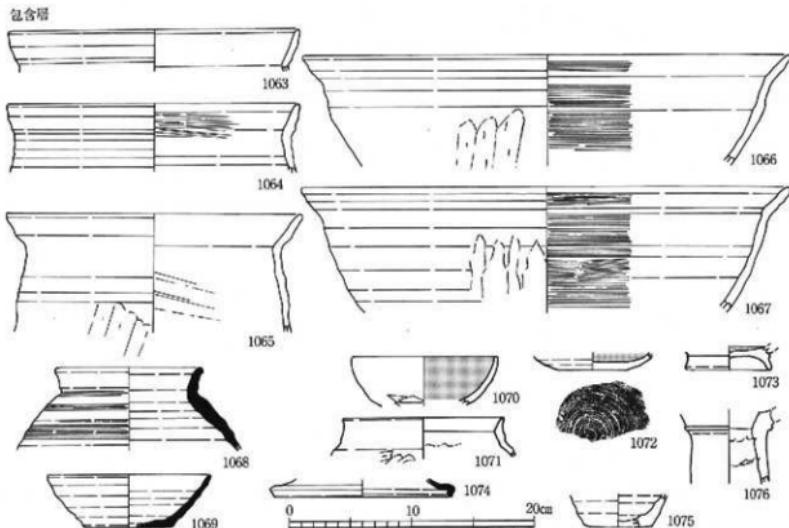
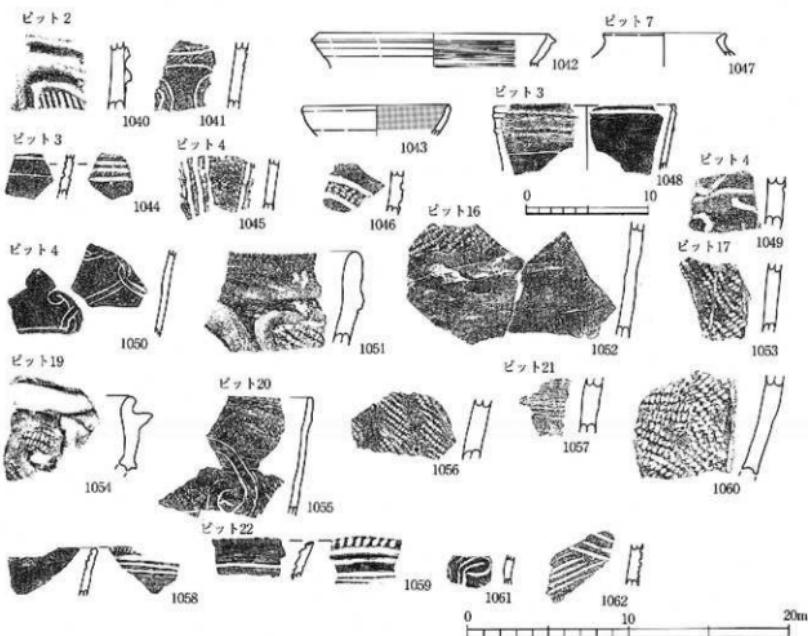
第49図 繩文時代の土製円板 (1 : 3)



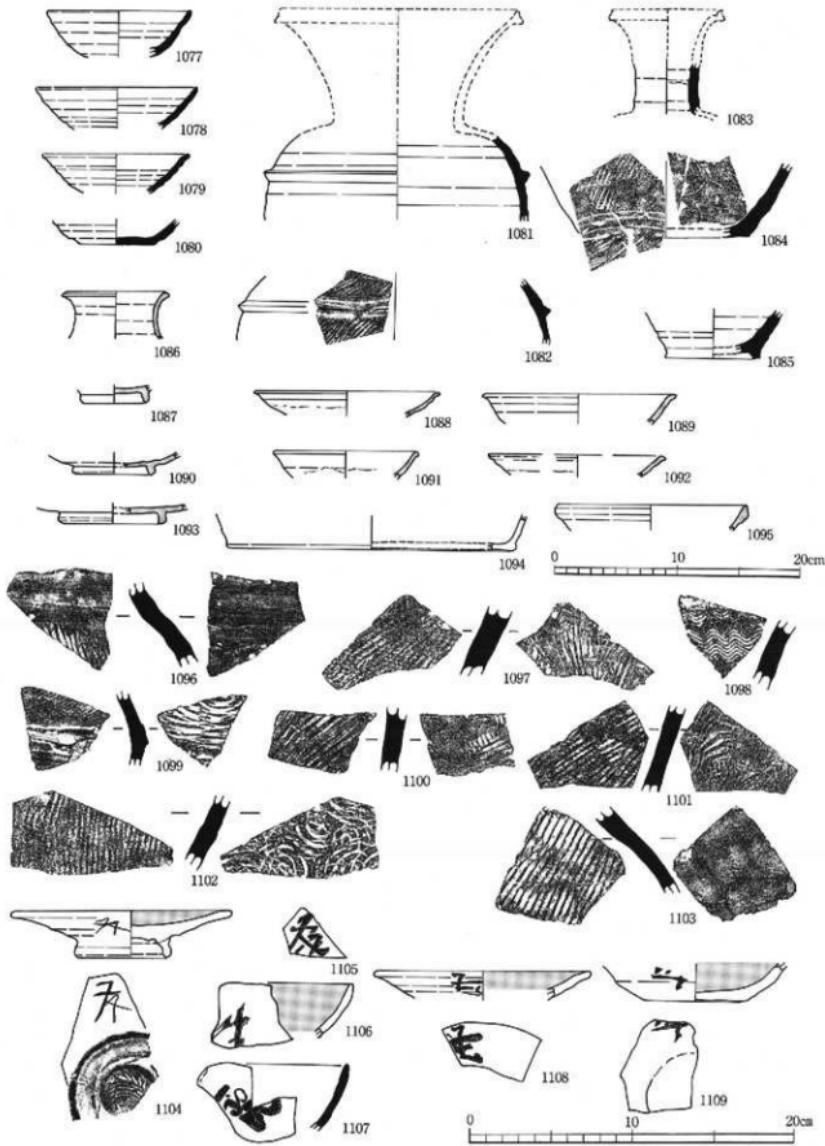
第50図 縹文土器底部 (1) (1 : 3)



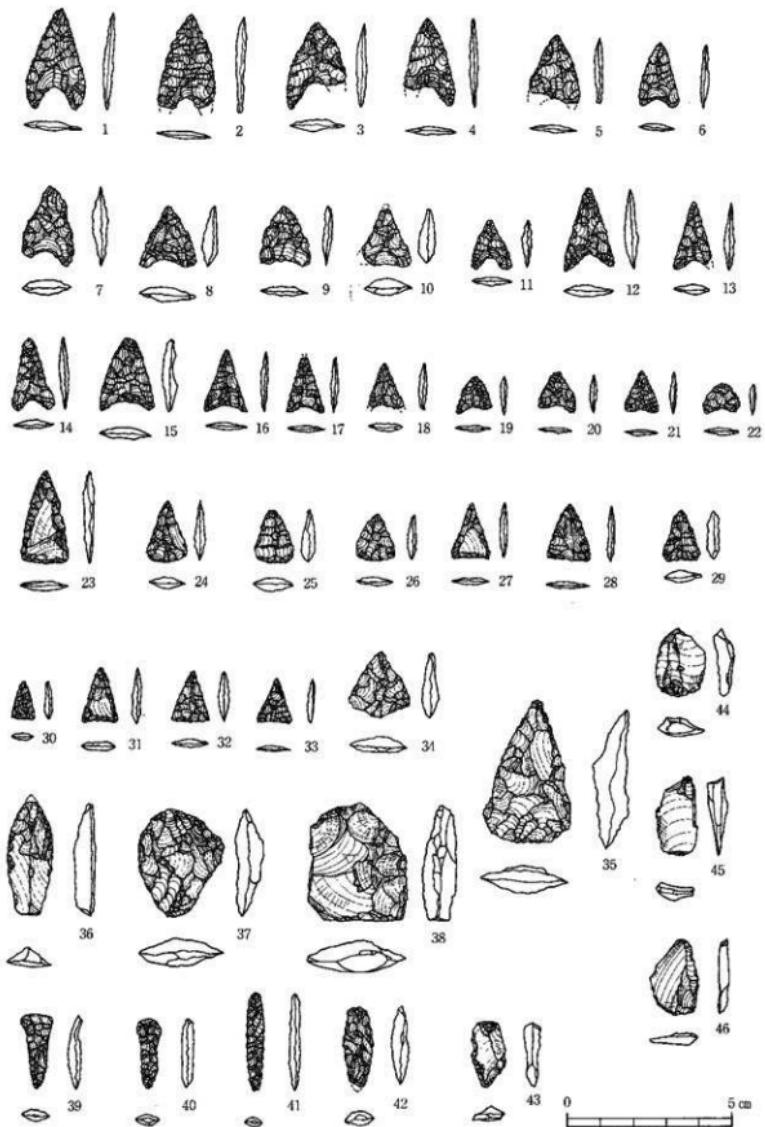
第51図 織文土器底部 (2) (1 : 3)



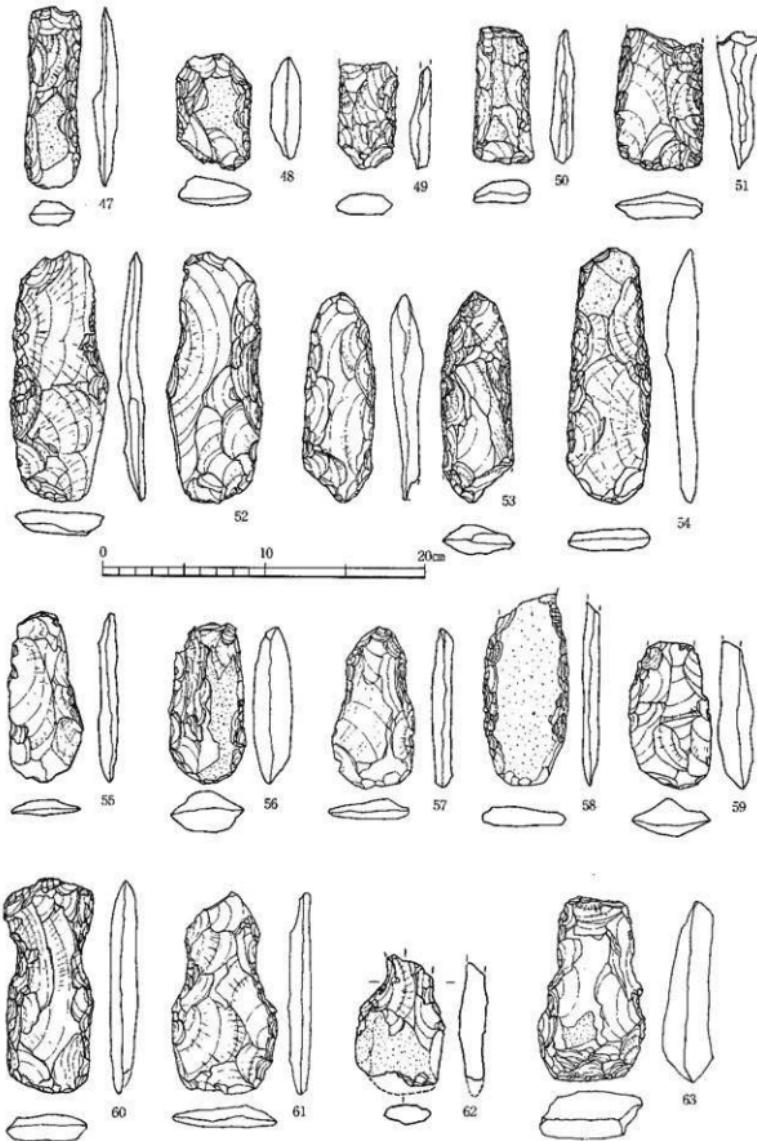
第52図 繩文時代・古代・中世の遺物(1) (1:3, 1:4)



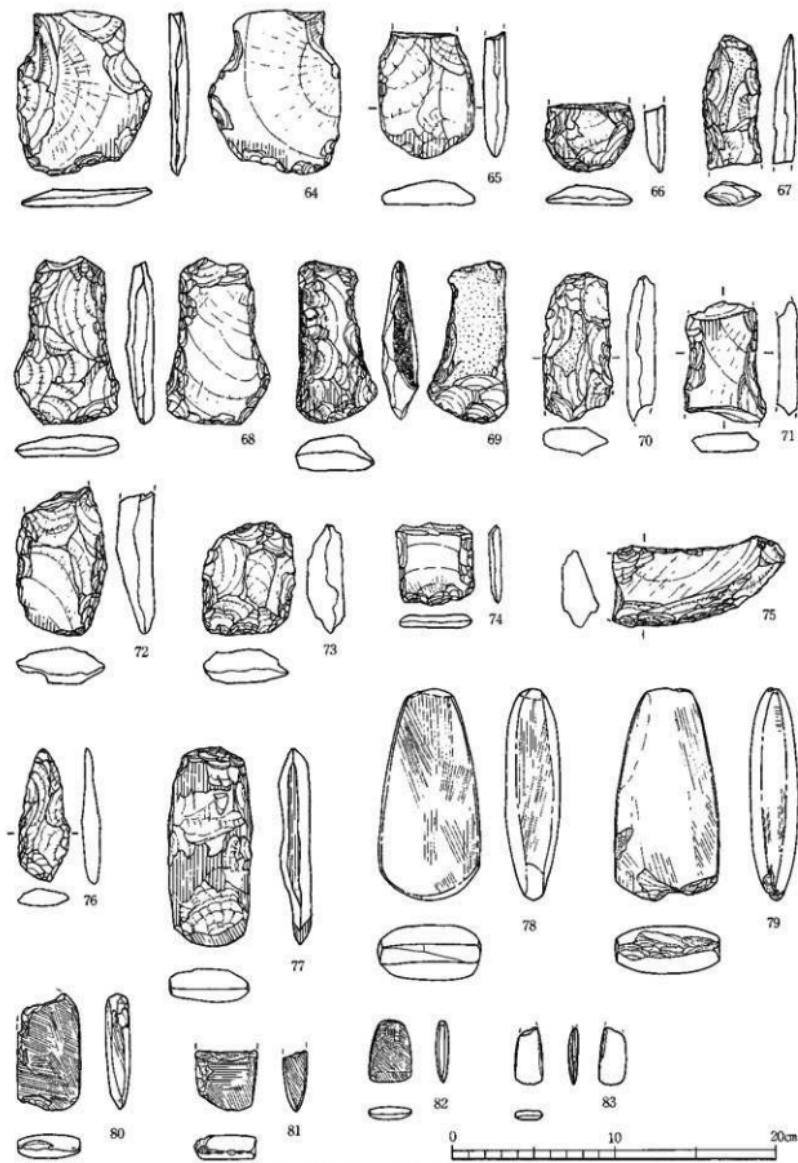
第53図 縄文時代・古代・中世の遺物(2)(1:4、1:3)



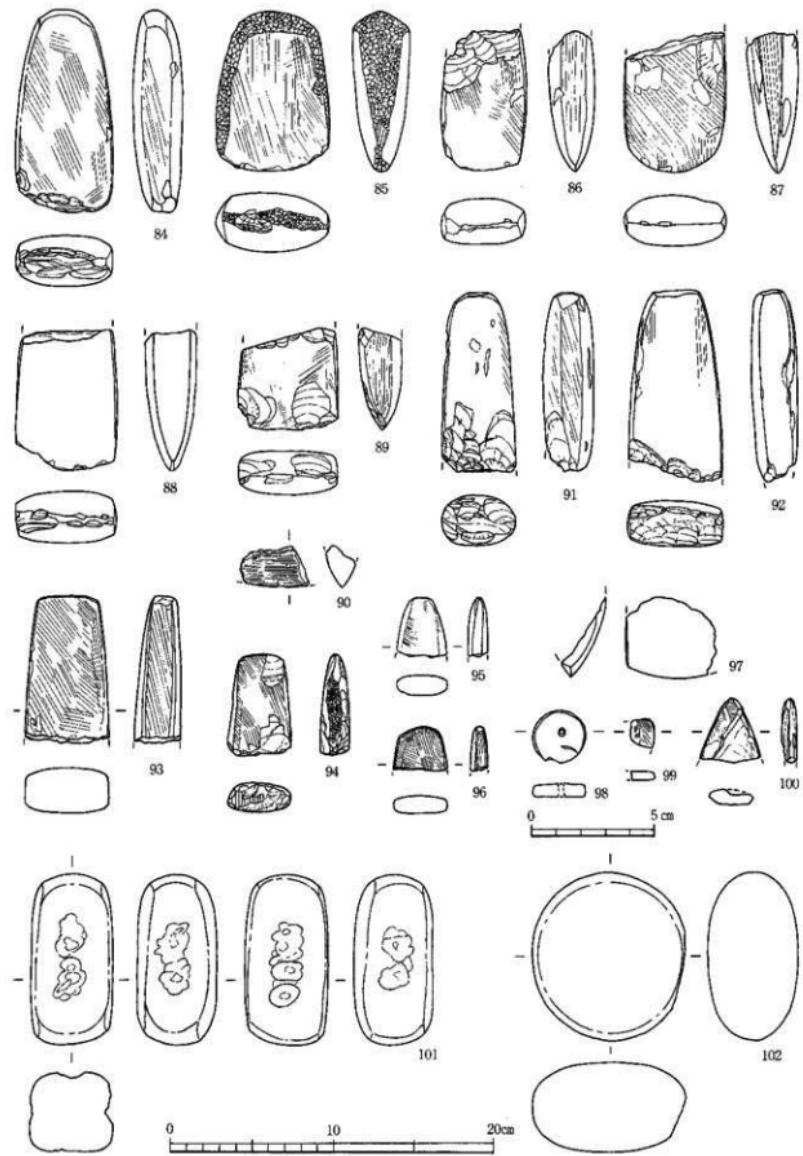
第54図 縄文時代中・後期の石器（1）（2：3）



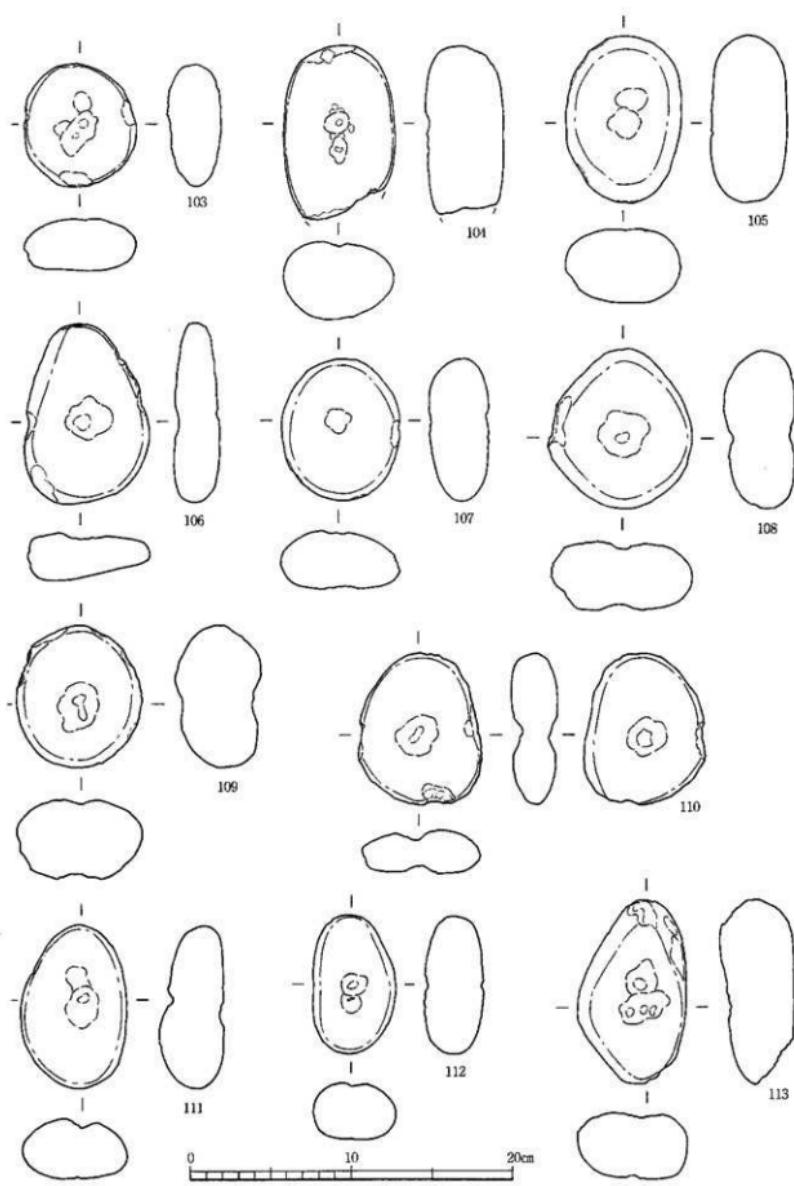
第55図 純文時代中・後期の石器（2）（1：3）



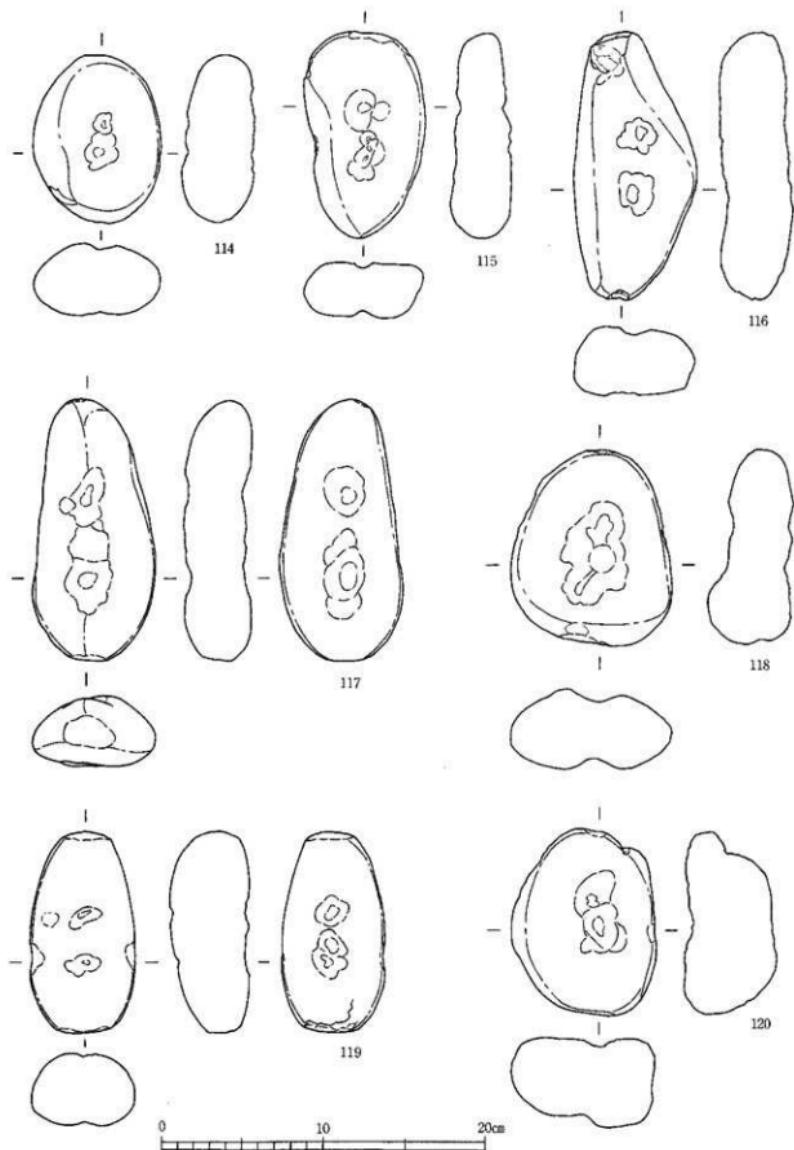
第56図 繩文時代中・後期の石器（3）（1：3）



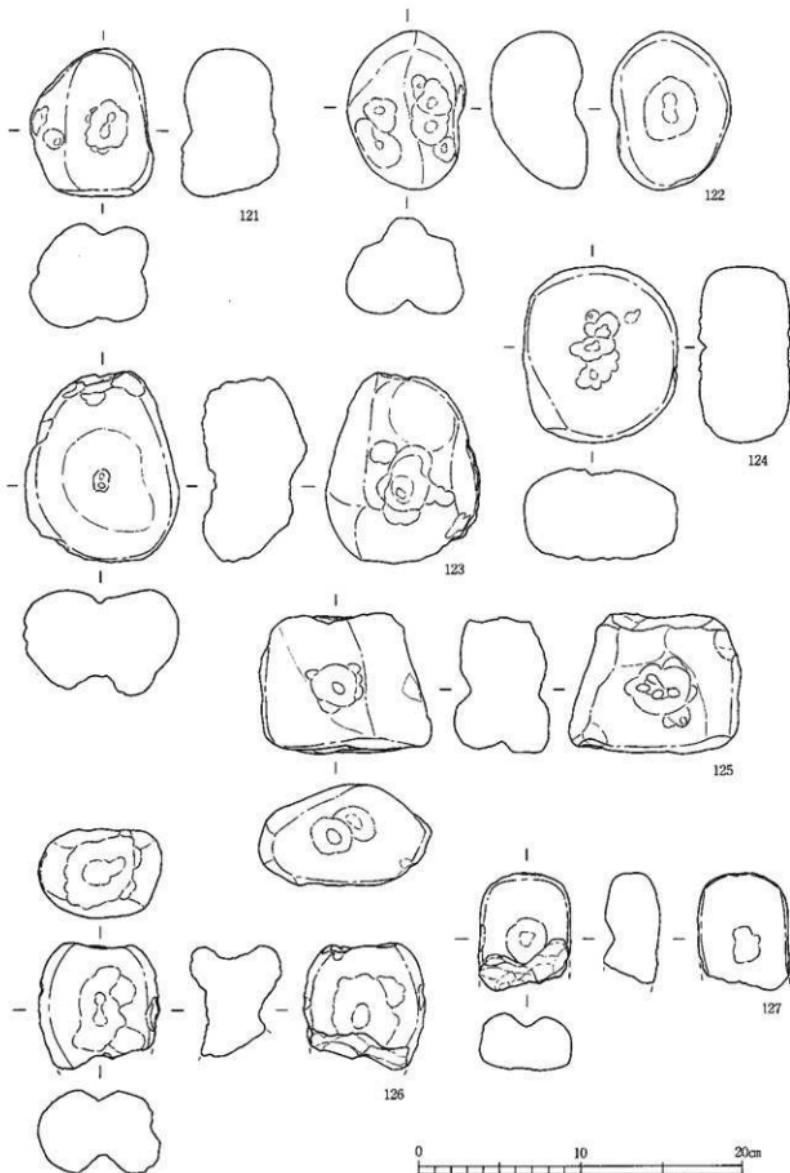
第57図 縄文時代中・後期の石器（4）（1：3、1：2）



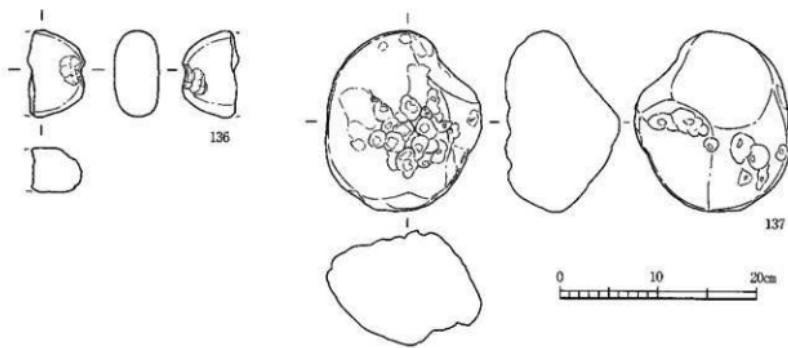
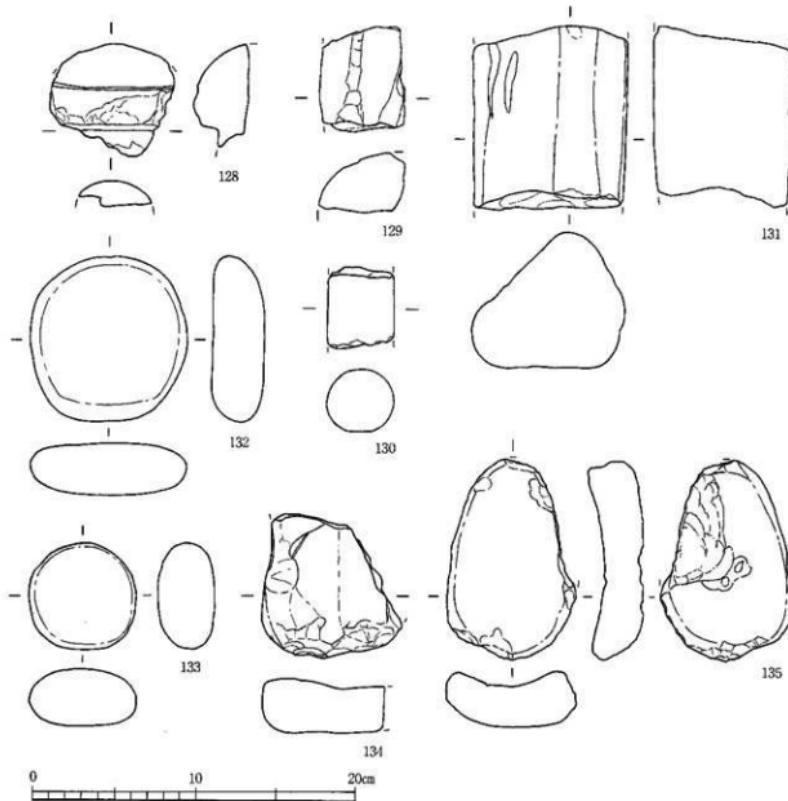
第58図 縄文時代中・後期の石器（5）（1：3）



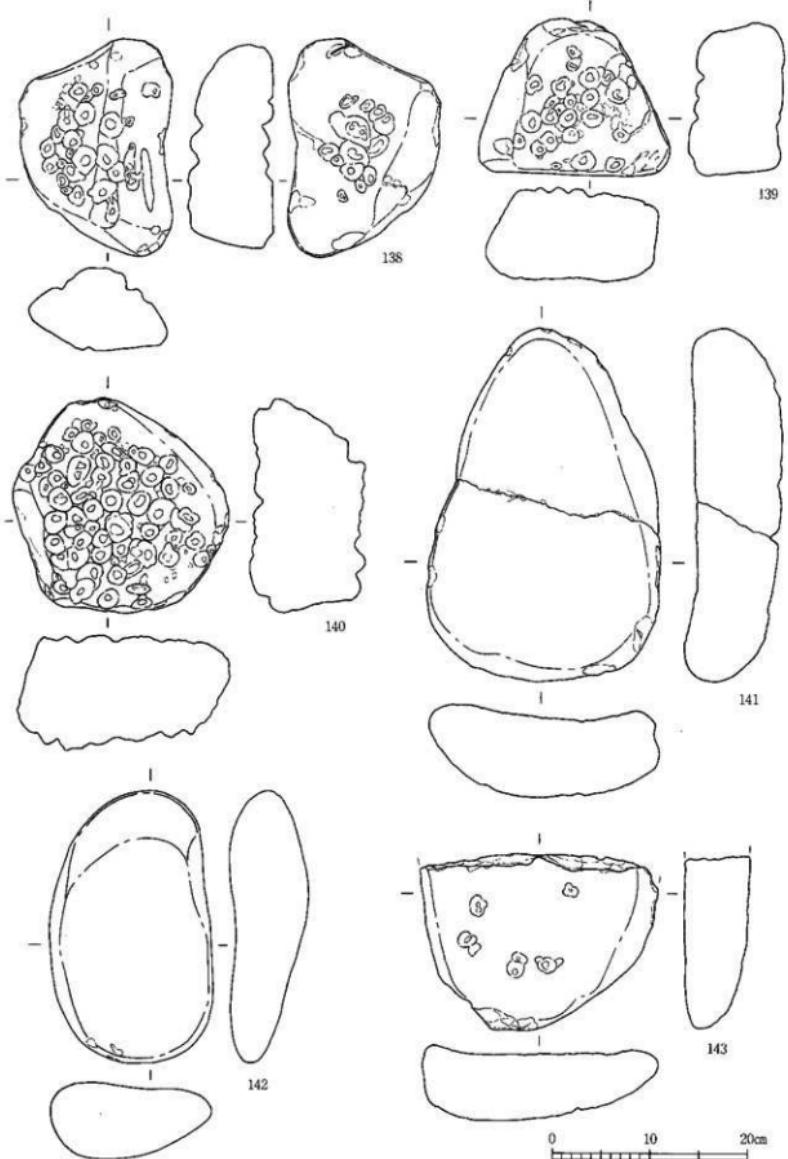
第59図 縄文時代中・後期の石器（6）（1：3）



第60図 繩文時代中・後期の石器（7）（1：3）



第61図 縄文時代中・後期の石器（8）（1：3、1：5）



第62図 繩文時代中・後期の石器（9）（1：5）

# 写真図版

遺跡近景  
(北東より)



石組・集石群  
全景  
(北より)





竖穴住居 SB 1



左：SB 1 上層  
右：SB 1 石圍爐



左：竖穴住居 SB2  
深鉢（134）・埋甕  
(130) 出土状態  
右：SB 2 埋甕（130）



左：石組 SH 1  
右：石組 SH 2



左：石組 SH 3  
右：石組 SH 4

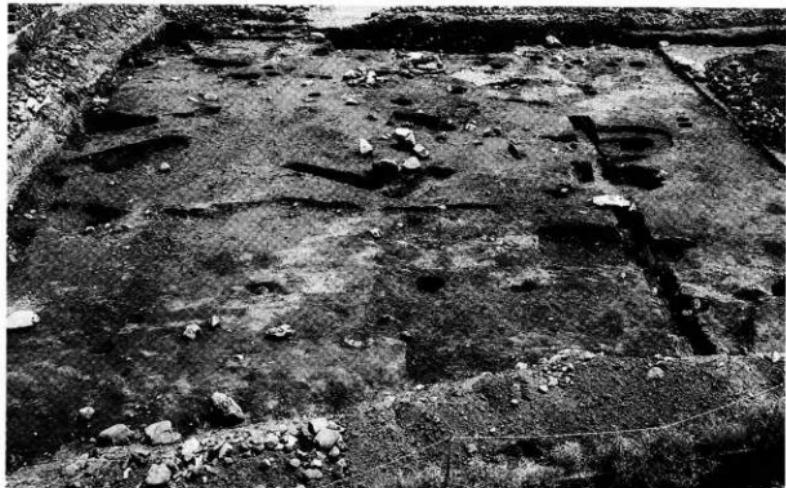


左：石組 SH 5  
右：集石 SH 9



左：石組 SH 10  
右：集石 SH 7·8





发掘区  
(下层)

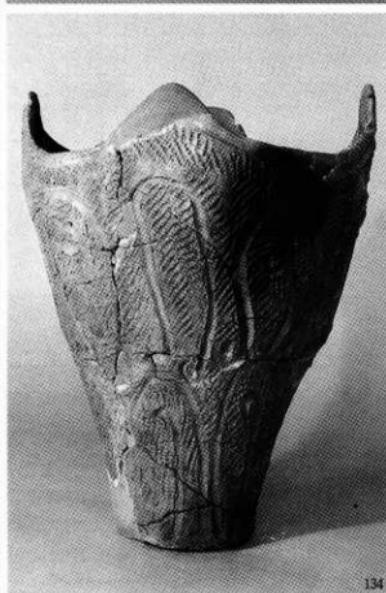
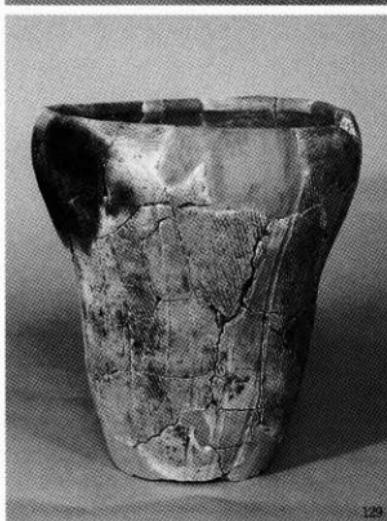
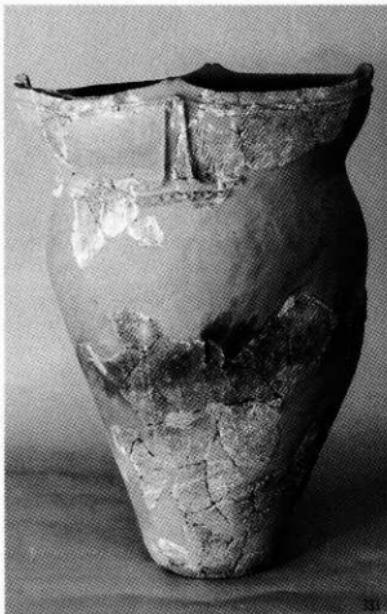


左上：土坑 SK 4·  
5 (上层)  
左下：SK 4·5



右上：土坑 SK 7·8  
·9 (上层)  
右下：SK 7·8·9

縄文時代  
中期の土器



129

134



542



522



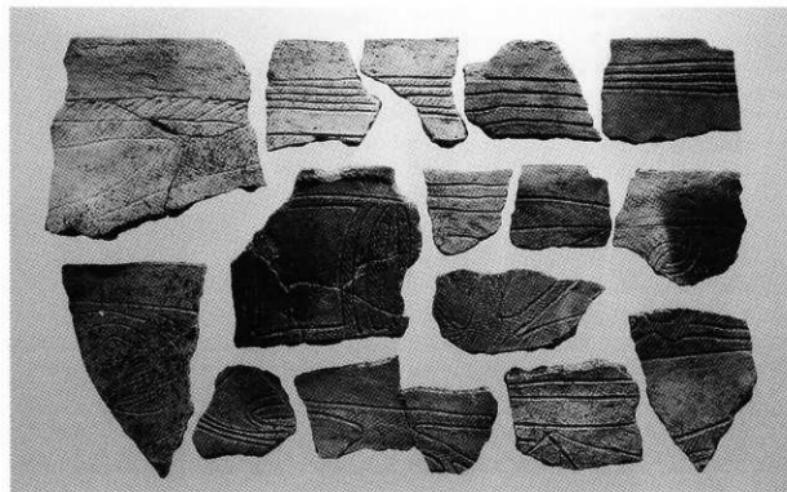
554



313



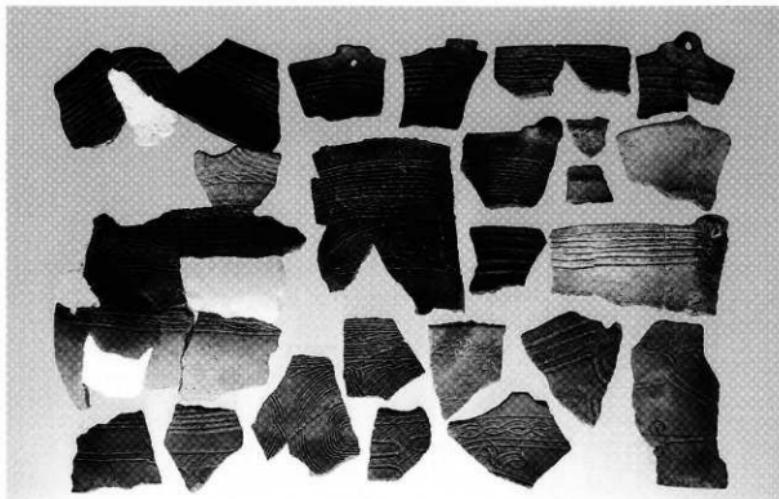
561



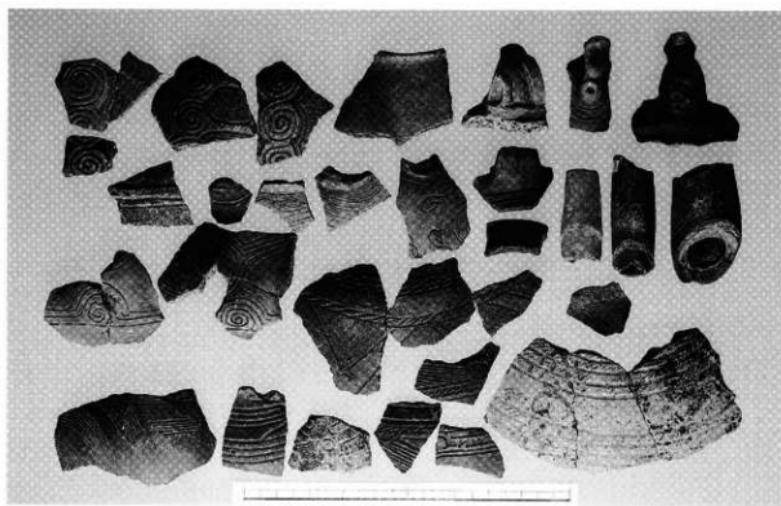
縄文時代  
後期の土器

縄文時代  
後期の土器  
上：表  
下：裏





石神頭型と  
その周辺の土器  
(縄文時代後期)



注口土器  
(縄文時代後期)

報告書抄録

書名	小玉遺跡						
副書名	小玉地区コミュニティ消防センター新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名							
編著者名	益澤 浩 横山かよ子 小山丈夫						
編集機関	飯綱町教育委員会						
所在地	〒389-1211 長野県上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1 Tel.026-253-2511						
発行年月日	2008(平成20)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小玉遺跡	長野県上水内郡 飯綱町人字小玉	78	36° 45' 21"	138° 13' 31"	20000510～ 20000622	180m <sup>2</sup>	公民館建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
小玉遺跡	集落跡	縄文時代中期後葉	竪穴住居跡	縄文中期上器 土製円板 土偶 各種石器			
		縄文時代後期前葉	石組・集石群・ 土坑	縄文後期上器(称名寺 ～加曾利B1式) 土製円板 土偶 各種石器・ヒスイ原石・ 石冠			
		平安時代	土坑	土師器 須恵器 灰釉陶器			
		中世		内耳土器 白磁			

小玉遺跡

発行日 平成20年3月31日

発行 飯綱町教育委員会  
上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1

印刷 信毎書籍印刷株式会社  
〒381-0037 長野市西和田1-30-3

